



Be With ~ I

目次

落とした指輪	1
お礼	4
妊娠	8
結論	12
三文判	15
最低な日	21
パジャマ	26
電話	35
病院	40
おにぎり	45
発熱と敗北感	54
どしゃ降り	61
前髪	66
イン	72
ハンバーグ	76
アイス	81
どっちもどっち	87
日曜日	91
名前	96
いろいろ	103
最強	108
タタラレン	114
中辛	119
保護センター	123
決死	128
ショップ	134
覚悟	139
間違い	144
泣く	147
タイプ	151
みーちゃん	156
不覚	160

平和ボケ	165
四面楚歌	168
出張決定	172
北斗の拳	176
決めたこと	180
最後の夜	183
私らしい そして	186

落とした指輪

ヤバイヤバイヤバイ！

地下道を全速力！ パンプスで全速力！・・・はキツイ！ けど走らなきゃ！

遅刻できない絶対できない！

今日は私の企画のプレゼンなんだからっ！

落ち度がないように明け方まで確認作業して、それで、ちょっとウトウト・・・

気がついたら、もうあんな時間で、心臓止まるかと思った！

ああ、こんなこと考えてるヒマなんてない！ 急がないと！

「アッ」

溝にパンプスのヒールを突っかけて

一瞬何が起こったのか・・・

「痛った～い」

やだ、こんなところで、やだ、早く行かないと。

まわりに散乱した荷物をかき集めて立ち上がった・・・ら！

「あっ！」

右手の薬指の指輪！

ない！

ど、どうしよう、落としたんだわ、ゆるかったから、

ど、どこかな、で、でも時間が、でも、あれは、彼からもらった大切な指輪。

あっ！ あった！ 銀色にキラキラ輝いた指輪がコロコロと、あ、ちょ、待って！

あっ！ ウ、ウソ！ 側溝の中に入っちゃった！ やだ、なに、ウソーーッ！

ど、どうしよう、どうしようって取らないと・・・

あ、やだ、側溝のそばにホームレス・・・ 気持ち悪い、でも、取らないと

できるだけ顔を背けて、側溝の鉄の柵を、お、おもっ、お・も・た・いっ

「ねーちゃん、なにしてんだあ？」

や、やだ、話しかけられちゃった、む、無視よ、無視
そ、それにしてもっ、重たくっ、てっ、う・ご・か・な・いーっ！
「なんか落っことしたんか？」
そうよっ！ 大切な人にもらった大切な指輪をねっ！ ハアハア・・・ ダ、ダメだ・・・
「取ってやっか？」
「え？」
思わず顔見ちゃった！ うわっ、汚ったない！
ホームレスは立ち上がって側溝の鉄の柵をつかんだ。
あ、開くかしら、開いて、お願い！
「硬ってえなあ」
え？ ダメ？ どうなの？ 開けて！ 開けて！
「ああ、ひっついちまってんだなあ」
ノキな声出してないで早く開けてよっ！ 時間がないのよっ！
あっ！ そ、そうだ！
「ね、ねえ、私、すごく急いでるの」
「あ？」
ウッ、汚い顔こっちに向けないで！
「そ、それでね」
なにげな～く鼻を手で押さえながら・・・ だって臭いんだもの
「この中に指輪を落としたの、プラ、あ、いえ、銀色の、や、安物よ安物」
プラチナって言ったら見つけても売り飛ばされるちゃうかも
「でもねっ！ 大切な人にもらった大切なものなの！」
それは本当なのよ！
「そっかあ、だから必死こいて探してたんかあ」
必死こいてって、こいてって、ま、まあ、そうだけど・・・っ

「それでね、お願いがあるの」
「エッ？ お、俺に？」
あたりまえじゃない、誰にしゃべってると思ってたのよっ!?
「探してくれない？ 本当に時間がないの！ お礼はするから、必ずするから！
だからお願い！ 探して！」
「あ、うん、わかった！」
ホームレスが真剣な顔してうなずいた。ホッ・・・
「これ、私の名刺」
カバンから名刺を一枚抜き取ってホームレスに差し出した
「ここが会社なの、ここに、そうね、6時くらいまでは確実にいるわ」
ホームレスがポカンとして名刺を見てるけど
「ここに届けてくれる？」
投げるようにホームレスに名刺を渡して
「お願いね！ 頼んだわよ？ いい？ わかった？」

「う、うん」

ホームレスは真剣な顔して何度もうなずいた。

私は走りだしながら

「必ず届けてよ？ いい？ 見つけてよ？」

「ま、まかすとけ」

ほんとにまかせられるのかな、でも、あんたにまかせるしかないわっ！

「ねーちゃん、いってらっしゃーい！」

「ハ？」

振り向くと、ホームレスがニコニコしながら手を振ってたああああ。

そんなヒマがあったら、さっさと探してよっ！

ゼーゼーしながら階段を駆け上ったあああっ

お礼

プレゼンが終わった。

まだ結果は出てないけど、手ごたえはあった、ガンガンあった！

彼も、廊下ですれ違うとき、耳元で言ったもの。

「これで決まりだな」

これが成功すれば、私は企画を任せてもらえる。

26歳の、しかも女性で初の企画主任！

ぜったいになる！

だって本当に頑張ったのよ、ほとんど寝ないで頑張ったのよ！

彼も言ってたわ。

「仕事しているときの君は輝いてるな」

嬉しかった！

私は男にベツタリ頼ったりなんかしない！

母のように絶対ならない、専業主婦で毎日家事ばかり。

腰が痛いとか主婦湿疹がどうか愚痴ばかり言って。

だったら仕事見つけて外に出れば？ って言ったら、

「あんたたちの世話は誰がするのよ」って、人のせい？

外に出て働くのが怖いだけでしょ！

お父さんが死んだらどうするの？ 私に頼らないでよね。

お父さんだって家のことなんか～んもしないんだから、できないのよ。

お母さんが死んだらどうするの？ 私は世話なんかしないわよ。

あの二人を見て育ったから、絶対自立した女になるって決めたのよ！

「北川さん、内線3番に電話で～す！」

「あ、はい」

どうでもいいこと考えてたわ。

「もしもし、北川です」

「あ、こちら受け付けですが、あの・・・北川さんにご面会の方が・・・」

「面会？　なんていう方？」

「それが・・・あの・・・とにかく来ていただけますか？」

なによ？　電話で言えない人？　誰よ？　まったく、ちゃんと名前聞きなさいよ！

「すぐ行きますって伝えておいて」

エレベーターで一階に下りて、受け付けに、え？ あっ！ あーーーーっ！

あ、あのホームレスがああああっ！

「あ、ねーちゃん！」

ニコニコして手を振っているううううっ！

「き、北川さん、あのお・・・」

受け付けの女の子が困った顔して私を見てるううううっ！

すーーーーっかり忘れてたあっ！

「ねーちゃん、見かったぞ！」

「え？」

「ほれ」

ホームレスがニコリして、汚ったない指でつかんだ指輪を突き出してみせた。

「あっ！」

私の指輪！

「ちゃんと便所の洗面台で洗ってきたからよ」

べ、便所って・・・ ま、まあ、いいわ、あとで消毒しよう

「ど、どうも」

笑顔を作ろうとしたけど、引きつっちゃって。

受け付けの子がヘンな顔して見てるしっ。

「見つけたのはいんだけどよ、俺さあ、字い読めねえからよ、これ見てもわっかんなくてよ」

ホームレスの手垢ですっかり汚れた私の名刺・・・

「人に聞こうとしてもさあ、俺がそば行くと、みんな逃げちまうからよ」

笑ってるけど？ 私だって、できれば逃げたいっ 今すぐねっ！

「え、えっと・・・」

どうすればいいどうすればいいどうすれば あ！ お礼するって言ったんだったわ。

だから探して届けにきたのよ、そうよ、それだったわ。

ポケットからお財布を・・・ いくらにする？ 5千円？ いや、1万、それであと腐れなし！

「あの、これ」

1万円札を差し出すとビックリした顔で私と1万円をキョトキョト見てる。

なによ、1万円札初めて見た？ 見たことはあるわよね？

「お礼・・・です」

これ受け取って、さっさと帰って！

「いらねえよ」

「ハ？」

「金はいらねえよ」

いらないうって、どういう意味？？？ 足りないの同義語？？？ わからない でも

「わ、私、お礼するって言いましたよね」

「そんなん、いいよ」

「で、でも、それは」

「ねーちゃんが大切なもんだつつたから」

ハ？

私が、大切なものだって言ったから？ だから探して届けた だけ？

なにそれ？ 親切おじさん？ いやいやいや、ホームレスよ！

ホームレスに借りは作りたくないわよ！

「ですからっ大切なものを探していただいたんですからっお礼はしますっ」

「いらねえって」

ホームレスのあんたがお金を受け取らない意味がわからないっ

いるでしょお金！ お金ないからホームレスになってるでしょ！

「受け取ってくださいっっ」

「いらねえっつってんじゃん」

って汚い顔でヘラヘラしてるけどっ

ここで終わりにしたいのっ！ 借りは作りたくないのっ！ スパッと縁を切りたいのっ！

「そんじゃ」

バイバイ的に手をあげて背中向けたけど？

あんたに借りは作りたくないのよっ！

「ちょっと待って！」

あ・・・ 思わずホームレスの腕つかんじゃった！

ビックリした顔してるけどねっ あんたの汚ったない腕つかんじゃった私も自分にビックリよっ

えっと・・・ あ！

「こ、これはっ 労働の対価ですっ」

何言ってるかわかんないみたいだけど？ 知ったこっちゃないわよ！

「あなたには受け取る権利があり、私には支払う義務がある！」

ポッカ〜んと汚い口開けてるけど

「受け取ってっっ」

グイッと3万押しつけてやったわよっ。

どうよっ？ これ以上何も言えないように増額してやったわよっ。

「労働のっ報酬ですっっっ」

わけのわからないってカンジで私を見てるけど？

あんたにわからなくたっていいわよっ。

キョトキョトして3万をポロポロのジャンパーのポケットに突っ込んで、
なに首傾げながら私を見てるのよっ!?

「ありがとうございますっ」 早く帰れ！

玄関出る直前、不思議そ〜に振り返ったけどっ？ 永遠にさようならっ！

「あのお、すみませんでした」

受け付けの子が泣きそうな顔で私を見てた。

「渡すものがあるって言うから、お預かりしますって言ったんですけどお、

どうしても北川さんじゃなきゃダメだって、大切なものだからとか言って」

「あ、そう」

「き、北川さん・・・ 今の人・・・ なんですか？」

なんですかって

「なんでもないわ」

説明するのめんどくさい。

指輪洗わなきゃ。あ、手もね。

妊娠

ベッドの上で煙草の煙をひと息吹いて 私を見て微笑む彼。
この笑顔が最高に素敵。

藤木さん、藤木部長、30歳で海外事業部の部長。
名門大学を出て、ずっとエリートコースの先頭を走っている人。
女性社員みんなのあこがれの的。
私が彼を好きになったのは、頭がいい人だから。
名門大学出身だからじゃなくて、本当に疎明な人だから。

彼の方から言ってくれた
「俺と付き合う気はある？」
そのとき、彼は私の尊敬する人から恋人になった

会社では秘密。
私も彼も会社の中に恋愛は持ち込みたくないし、
くだらない詮索されるのもイヤだから。

「しばらく会わない方がいいな」
「なぜ？」
「君の企画が通りそうなんだ」
「ほんと？」
「ああ」
彼が微笑んで・・・
私は・・・ ベッドの上で飛び跳ねたい気持ちを必死に抑えてる。
「ただ・・・ 君の企画と吉田の企画が競ってる」
「吉田くんの？」
私のひとつ下の後輩・・・ 彼と同じ大学出身・・・ だけどコネ入社ってみんな知ってるわ。
仕事できないって有名、その吉田の企画と私のが競っている？
「俺は、どうしても君の企画を通したい」
嬉しくて・・・
「もちろん、君の企画がいいからだ」

ほら、また素敵な笑顔。

「ただ、俺と君がこういう関係だと気づかれたら、まわりはそうは思わない」

「え？」

「俺が個人的感情で君の企画を推していると思われてしまうだろうな」

「私とあなたがつき合ってるなんて誰も知らないわよ」

「俺たちの世界は足の引っ張り合いなんだよ」

そうね・・・ 上の人たちは派閥があって・・・

「今は慎重に行動したいんだ」

彼の言葉はいつも説得力がある

「今回の君の企画は、それくらい価値があるよ」

彼の言葉は泣きそうなほど、私には価値がある。

おかしい・・・ こない・・・ 2週間も遅れてる・・・

会社のトイレの中、さっき、あれ？ と思ったのに、ちがう。

まさか・・・ 妊娠？ まさか！

彼はいつもすごく気をつけてくれてるし

プレゼンのことで神経使ってたからバランス崩れた？ それよ

でも・・・

トイレのドアが開く音がした。

「アツタマくるよねえ」

あの声はうちの部の子。

「だよね」

あの声もそう。 二人とも海外事業部の事務職の女子社員。

「北川さんさあ」

私？

「これコピーして！ なんて、私にあんたの部下じゃないっていうのお！」

あんた、ニーツコリ笑って「わかりましたあ」って言ってたわよね

「総合職だからってイイ気になってない？」

「なってるう、私にあんたたちとはちがうのよって、見え見ええ」

違うのよ

「できる女気取っちゃってさあ」

できるのよ

「あれじゃ友だちできないよね」

あんたたちみたいな友だちはいらぬ

「女に嫌われるってタイプう？」

けっこうよ

「男にも嫌われるよねえ」

ご心配なく あんたたちのあこがれの部長が恋人です

ボタンと個室のドアを開けて、彼女たちのいる洗面台に歩いていった。

「失礼」

二人の間をスッと抜けて、ゆっくりと手を洗う。

目の端に青ざめて引きつってる彼女たちの顔が見える。

「お先に」

私はドアを開けて、

「あ、そうだ」

と振り返る。

「さっきのコピー、枚数間違えてたわよ」

「え、あ、は、はい、す、すみません」

ボタンとドアを閉める。

雑魚はかまってられないのよ。

会社の帰りに妊娠検査薬を買った。

ただちょっと、なんていうか、安心したかっただけ。

テーブルの上に線のついた・・・線は・・・妊娠？ 妊娠してるの？

実感ゼロ。

でも、説明書を見ると・・・そうよね。

わからない、明日病院に行こう。

こんなキットじゃ信頼できないもの。

風邪を引いたから病院へ行ってから出社すると嘘の電話をして、

マンションからも会社からも遠い産婦人科を探して行った。

マンションの近くじゃ誰かに見られるかもしれないし、

この辺りなら会社の人たちには絶対に見られないから。

「北川さん、入ってください」

看護師に呼ばれ、診察室に入る。

なぜドキドキしているのかわからないまま先生の前の椅子に座った。

「陽性ですね」

先生がカルテを見ながら言った。

「4週目だな」

「え？」

「予定日は、そうだなあ」

「あ、あの、妊娠・・・してるんですか？」

「してますね」

妊娠 私が妊娠・・・

「北川さんは妊娠は初めてですね」

「は、はい」

先生がカルテを見た。

「結婚はなさっていないんですね」

「え・・・ は、はい」

イヤだ・・・なんだか・・・ 失敗しちゃったみたいなの・・・

先生は・・・そう思ってるのかな・・・

「どうなさいますか？」

「え？ ど、どうって・・・？」

「ここで出産なさいますか？」

え？ 出産？

急に・・・ リアルに感じて・・・ でもまだどこかリアルじゃなくて・・・

「えっと・・・あの・・・ まずは彼に報告します」

「そうですね、その後どうなさるか決まったら連絡してください」

ボーッとしたまま会計を済ませて、ボーッとしたまま病院を出た。

妊娠・・・ 出産・・・ 赤ちゃん・・・ 彼の子ども・・・ 彼の！

私と彼の子どもが今私の中にいるの？ いるんだわ まだ実感はないけど

どうなるの、これから？

頭の奥の奥に、うっすらと・・・ 結婚

なに考えてるの！？

と、とにかく彼に知らせなきゃ。

結論

「何があったんだ？」

緊急でどうしても話さなければならないことがあるってメールして、私の部屋に来てもらった。

「30分くらいしかいられないよ、専務と出かける予定が入ってるんだ」

彼はどんな顔をするのかな・・・

「あのね・・・」

次の言葉を言ったら・・・

「私、妊娠してるの」

彼は真剣な目で私の目を見て

「わかるよね」

え？ わかるって？

「今妊娠したことがわかったら、君の企画は確実にアウトだ」

「え？」

「今回は処理すべきだ」

処理・・・

「このチャンスを逃したら、もう後はないんだよ」

「でも、あなたは・・・」

あなたは・・・ 嬉しくはないの？ 私の中にはあなたの子どもがいて・・・

私たちの子どもがいて・・・ それは・・・ どう思って・・・

「俺がなに？」

「あの・・・」

その穏やかな顔を見ると何も言えなくなる

「中絶するには・・・ 申請書を出さないといけないらしいの」

NETで調べてはいたのよ・・・ こんなこと調べていた私も私よね

「それには配偶者のサインと印鑑が必要で・・・」

「俺は君の配偶者ではないよ」

穏やかな声で言うけど・・・ 確かにそれは事実で・・・

「と、とにかく、相手のサインと印鑑が必要らしいの」

「俺が君の配偶者ではないってことが問題なんだよ」

「え？ ど、どういう・・・」

「うちの取締役の中には医師会と強い繋がりを持っている人たちがいる」
だから・・・ なに？
「特に社長はね、そして、かなり保守的だ」
何が言いたいのか？
「俺はこうすることで潰されたヤツを何人も見てるんだよ」
潰される・・・
「誰か、うちの会社とは何の関りのない人を書いてもらってくれ」
「え？」
「冷たく聞こえるかもしれないが、それが最良の方法だ」
彼が・・・ 彼がそういうのなら・・・
「わかったわ、そうする」
「わかってくれて嬉しいよ」
そう言って立ち上がった。
「それじゃ」
いつもの素敵な笑顔を残して、部屋から出て行く彼の背中・・・

そうよ、たしかにそう。
私ったら、妊娠なんて言葉でビックリしちゃってどうかしてた。
子どもが欲しいなんて思ったことないもの。
彼は私のことを思ってくれている。
私の能力を実力をちゃんとわかって、それを大切にしてくれている。

こんなことさっさと処理して、前に進もう。

え？ ちょっと待って

配偶者のサインと捺印・・・
うちの会社とは関りのない男・・・

いない・・・！
私のまわりには誰もいない！

お父さん？ ダメダメダメダメ！ いちばんだめでしょ！
大学時代の元カレ？ 絶対イヤ！ そんなこと死んでも頼みたくない！
てか、もうどこにいるのかもわかんないし、わかりたくもないし。

エーーーーッ!? どうするうううっ？

と、とにかく、申請書もらってこなきゃ。

三文判

会社が終わって、駅につながる地下道に下りた。

昨日もらってきたわ、申請書。

この前とは違う病院で。

中絶するためにあんな遠くの病院まで行く気にならない。

それに、「やっぱり堕します」なんて言いに行けないわよ。

なんだか・・・ なんていうか・・・

いいの、前に進むんだから。

それにしても、この地下道、なんでこんなにホームレスが多いかなあつ。

なんかすえた匂いがして、すごくイヤ！

あ・・・ あいつもいるのかな、私の指輪を拾ったホームレスの男。

やだあ、顔合わせたくない！ でも、ここのところ見てないわよね？

っていうより、忘れてたわ。

あっ！ あいつは？

そうよ！ あいつよ！

あいつに署名・捺印させればいいんだわ。

親切おじさんでしょ？ いやいやいや、ただのホームレスよ。

だけど・・・

うちの会社と何の関係もなくあと腐れないヤツって

あいつしか思い浮かばない

あいつしかいないっ！

どこにいるのかな？

ホームレスって、みんな同じに見えてわからない。

前にいたところには・・・ いない。

どうしよう・・・

明日探す？ 土曜日だから会社の人もないし。

そうね、とにかく今日は帰ろう。

今日はパンプスは履いていない。

カジュアルな恰好でここに来るなんて初めてだわ。

会社へはいつもスーツとパンプス。

でも、今日はあのホームレスの男を捜すだけだから、そんな格好してられない。

ああもう、見つからない。

ホームレスって同じところにはいないわけ？

いないか・・・ 家がないんだものね・・・ でも、それじゃ困るのよおおっ！

探し続けて一時間。

いないっ

ハアアアアもおおおお何やってるのよ私っ!?

休日に地下道でホームレス探し？ バッカじゃない!?

帰ろう！ いや、コーヒー飲んでからにしよう、疲れちゃった。

地下道上がると、ハアアアア イヤになるほど天気がいい。

あっちにカフェがある・・・ え？ あれ？

あの、ベンチのところ、ホームレスが、あれ？ もしかして、あれって、あいつ？

ボーッと口開けて空見てる、あれは、ぜったい、あいつよ！

ベンチに向かって全速力で走って

「ちょっと！ あんた！」

あいつはぜんぜん気づかずにボーッと空見てる。

「ちょっと！ そのホームレス！」

今度はビクツとしてこっち見た。

やっぱりあいつだ！

「ちょっと、あんた、頼みがあるのよ！」

ゼーゼーしながらあいつのそばに行くと

「あっ！ ねーちゃん！」

ビクッとした顔してるけど知ったことではないっ

「あんた、名前なんていうの？」

「え？ お、俺？」

「そう、あんた」

「カズオ」

「ちがうちがうちがう！」
「俺、ほんとにカズオだよ？」
「上よ！ 上の名前！ 名字よ！」
「あ？ モリシタ」
「森下ね？ 木が三本の森に上と下の下ね？」
「森下駅のモリシタ」
森下駅？ えっと・・・ どこでもいいっ
「んで、ねーちゃんは？」
「ハ？」
「ねーちゃんの名前」
ノンキに名乗り合ってる場合じゃないのっ！
「あんた、ちょっとここ動かないで」
「え？」
「いいからここにいて！ わかった？」
「う、うん」
あいつがポツカーンと口開けて私を見てるけど、かまってるわ！
「いい？ ぜったいそこにいてよ？」
「う、うん」
たしか向こうの通りに事務用品の店があったわ
急いで横断歩道を
「危ねえっ！」
え？ っと思う間に、グイッと抱きかかえられて
キキーーーーッ！
気がつくと道路に・・・ ちがう・・・ 抱きかかえられて・・・ いる？
「ねーちゃん、危ねえよお、信号赤だぞ？」
ノンキな声で心配そうな顔であいつが・・・
ホームレスに 助けられたの？
イヤーーーーッ！
「ちょ、あの、離して」
今はいい とにかく
「とにかく、そこで待ってて！」
さっきのベンチを指差して、信号が青になったから全速力！

「森下」っていう三文判とボールペンを買って、さっきのベンチに戻ったら
「あ、ねーちゃん、おかえり」
おかえり？
家に帰ってきたわけじゃないんだから・・・って、こいつにとっては家なのかしら？
そうね、どこでも家なのね、ていうか、家がないのよね。
ホームレスってホームがレスだものね、って、そんなことどうでもいいっ！

「あんた！」

って、こんな目立つところじゃまずいわよね。

「ちょっと、こっち来て」

駅の裏側にホームレスを連れてきた。

ここなら 誰も見てないわね？

「あのね、お願いがあるの」

「うん、いいよ」

「え、あの、まだ何も言ってないけど？」

「お願いがあるつつったじゃん」

言った・・・けど

「何すればいい？」

話が 早すぎる いいけど その方がいいんだけど ちょっと 怖い

「あ、あのね・・・ここに名前を書いてほしいの」

バッグの中から書類を出して見せると、あいつはキョトンとした顔して見てる。

「わかるでしょ？ わけありなのよ、署名が必要ななの」

「これ、なに？」

「読めばわかるでしょ!？」

「俺、字い読めねえんだ」

あいつが情けなさそうな顔で笑った。

「えっ？ ぜ、ぜんぜん？」

「ひらがななら・・・」

「な、名前は？ 自分の名前書ける？」

「ハハハ、自分の名前は書けるよお」

ハハハッて、まあいい、それさえ書ければいいわ

「ここに署名してほしいのよ、あ、借金の保証人じゃないわよ、安心して」

「なってもいいけどよ、返せねえもんなあ」

ノンキに笑ってるけど？ あんたにだけは借金の保証人は頼まない絶対につ

「そんで、これ、なに？」

「中絶申請書よ」

「なんだそれ？」

「妊娠してるのよ」

チラッとだけあいつの顔見て・・・

「でも、生むつもりないから墮ろすの、それに必要な書類」

できるだけ軽く聞こえるように

そうよ こんなこと なんでもないことよ

「んで、なんで・・・俺？」

まったく、当然、とってまともな疑問だわ、とってまとも。

だから困るのよ！

えっと・・・ そうね・・・ えっと・・・

彼とのことを説明するにはいろいろあり過ぎてどこから・・・

ああもうっ めんどくさい！

「と、とにかく、生めないの、相手もいろいろあって署名できないの。

でも署名が必要なの、署名がないと墮せないの、だから絶対必要なの！」

「それで、俺？」

そうそうそうそれ！

「お願い」

「そっかあ」

そうです

「そんじゃ書くよ」

ヤッ ターーー！

「ここ、ここに名前書いて」

あいつが汚ったない指でボールペン持って・・・

森 下 一 男

ホームレスでも名前はあるのね・・・って、あるわよ人間だもの

ないのはホームよ、あと、仕事？ お金？ わかんないけど どうでもいいし

「ここに判を押して」

さっき買ってきた三文判

「これ俺の名前？」

そうそうそう、あんたの名前 早く押して！

「俺、自分のハンコなんて持ったことねえよお」

ニコニコして珍しそうに三文判眺めてるけどっ

「終わったらあげるから、早く押して！」

「え？ くれんの？」

「あげる」

私が持っても意味ないでしょ、てか、済んだら捨てるつもりだったし。

「ありがとなあ」

いいからっ

「押してっ」

あいつがギューユッて押しつけるからベツトリ森下の文字

「すげえ、俺の名前だあ」

終わった！

あ、そうだった

「これは・・・ お礼です」

バッグから、茶封筒に入れたお金5万！　これで文句なからうな額！

「いらねえよ」

ハ？

「これもらったじゃん」

ちょ、あんた、茶封筒に、ポンて 森下押す？

「あんたねっ、ここにあんたの判を押したってことは、これはあんたのものよっ？

受け取ったってことになるのよっ？」

「ハンコ持ったら押してみたくなるじゃん」

ヘラヘラ笑ってるけどっ、一般社会では判を押すということには責任が・・・って

こいつには無駄だ、もういいっ

署名もゲットしたし 離れよう 永遠に

「お世話になりました、さようなら」 永遠にねっ

クルッと背を向け

「ねーちゃん！」

背中から・・・

「な、なんですかっ」

振り向くと

「これ、ありがとなあ」

三文判振ってるけど

さっ よっ うっ なっ らっ

最低な日

今日は、いよいよ採用された企画が発表される日。
つまり、私が企画主任に任命される日。

今日はいつにもましてビシッと決めてきたわよ！
メイクは派手すぎず、でも知的に。
紺のプラダのパンツスーツ、今日のために買ったのよ、この瞬間のために買ったのよ！
重役たちの前に出るんですもの。
あ ドキドキしてきた
大丈夫よ、彼がついてるから、大丈夫！

「北川くん」
彼が私の名前を呼んだ・・・！
「はい」
できるだけ冷静な声で返事をした。
いよいよだ！
「吉田くんも、一緒に来たまえ」
え？ 吉田も？ まあ、彼も企画を出したから、結果を聞く権利はあるわ。
“部長”の後ろを私と吉田が並んで重役室に向かう。
背筋を伸ばして、そうよ、堂々と見えるように歩かなきゃ。
そして、“部長”が重役室のドアを開けた。

給湯室の前の喫煙コーナー。
私は普段会社で煙草は吸わない。
でも・・・今は吸わずにられない・・・

なに・・・いったい・・・ どういうこと・・・

プレゼンは成功したし、私の企画が通った。
なのに、どうして吉田が企画主任で、私が「暫定的主任補佐」なの？
あれは私の企画よ？

『対外的交渉の場も多くなるから、やはり主任は男の吉田くんの方がいいだろう』
社長の言葉。その横で黙っていた彼。どうして何も言ってくれなかったの？
だって、あれは私の企画よ？ おかしいじゃない！ 私の企画の主任が吉田なんて！
『北川くんは暫定的主任補佐ということで吉田くんをフォローして・・・』
つまり、吉田はこれからも主任なのに、私はこの企画のみの“主任補佐”の座。
この企画が終わったら、また、ただの平社員・・・
どうして？ どうしてみんなおかしいと思わないの？
どうして彼は何も言ってくれなかったの？
推してるって、私を推してるって言ったのに・・・

「北川くん」

振り向くと彼が立っていた。

「残念だったが、君の企画自体は採用されたんだ、そこは自信を持っていい」

「どうして・・・」

「え？」

「どうしてですか？ 私の企画なのに、なぜ吉田くんが主任で、私が・・・」

「それは社長が説明しただろ？」

「でも、あなただって、部長だって言ってたじゃないですか！ 私を推してるって！」

「君の企画をね」

「え？」

「ビジネスはビジネスだ、より効率のいいやり方を選ぶ、それが会社だ」

「そうかもしれないけど・・・ だけど・・・」

「いいか、企画は君の企画なんだ、成功させることが君のためなんだよ」

「今夜・・・ 来て」

「え？」

「お願い」

彼はチラッとまわりを見て、小さい声で言った。

「そんなこと、会社で言うことじゃないだろ」

「だって・・・ ひとりでいたくないの」

「今夜は専務も交えて飲み会だろ？ 君も出席するんだぞ？ 憶えてるだろ」

「行きたくない」

「君らしくないな」

彼はそう言ってフツと笑った。

「私らしいって・・・ なに？」

「それじゃ、またあとで」

そう言って私の肩をポンと叩くと喫煙コーナーから出ていった。

深夜の地下道の中、フラフラになって、壁をつたいながら歩いた。

最低の気分・・・ 吐き気がする・・・

私の企画の主任に吉田がなったお祝い。

ううん、そんなことは、もうどうでもいい・・・

最低なのは・・・ 専務のあのひとこと・・・

「藤木くんとうちの娘が婚約することになってねえ」

藤木・・・ 彼・・・ 私の彼。

一瞬なんのことかわからなかった。

「この前、見合いをさせたんだよ、私の希望でね、藤木くんに頼んだんだ」

ご機嫌な専務の横で控えめに微笑んでいる彼。

私の方を見ようとしめない。

だからしばらく会わない方がいいって言ったの？

専務の娘とお見合いするから？

私のためじゃなかったの？

彼が好きなI.W. ハーパーの水割りを、わざと大きな声で注文しても、

何度も何度も注文しても・・・

彼は私の方を一度も見ようとはしなかった。

バーボンなんて好きじゃないのに・・・

彼が私の方を見てくれるんじゃないかって・・・

何度も何度も・・・

気持ち悪い

吐きそう

もう・・・ 無理・・・

そのまま壁の前にしゃがみ込んで、ゲーゲー吐いた。

最低 こんなところで・・・

最低 これじゃまるで・・・

男に捨てられてやけ酒飲んで吐いている女・・・

最低 涙が・・・ こんなところで・・・

「ねーちゃん？」

え？

「大丈夫かあ？」

顔を上げると、あのホームレスが私の横にしゃがんでた。

「全部吐いちまえよ、楽になっからよ」

そう言いながら私の背中をさするけど

やめてよ、プラダの服が汚れる

だけど・・・

背中をさすられると楽に吐けそうで・・・

もう何も出てこないのに 吐き気だけが止まらない・・・

最低・・・ホームレスなんかには背中さすられて ホームレスなんかには同情されて

最低 なによ これ なによ こんな・・・ 冗談じゃないわよ！

私が何したっていうのよ！

「水持ってきてやっか？」

ホームレスの汚ったない顔が心配そうに私の顔を覗き込む。

なによ、これ、なによ！ なんなのよ！ なんだっていうのよっ！

こんなところでうずくまってなんかいられないわ！

グッと立ち上がって

「ちょっと、あんた！ 来て！」

「え？ お、俺？」

「そうよっ、あんたよ！ ホームレス！ 早く立て！」

「え、あ、う、うん」

ホームレスが立ち上がって戸惑った顔して私を見てるけどっ

「行くわよ！」

「ど、どこへ？」

「いいから早く！」

「あ、う、うん」

カツカツとヒールの音鳴り響かせて地下道を歩いた！

目の前がちょっとぼやけるけどどうでもいい！

もういいわよ！ もうどうなったっていいわよ！ 好きにするわよ！ してやるわよ！

切符売り場で切符を一枚買って、ホームレスに渡した。

「あ、あの、俺、どこに行くんだ？」

「黙ってついてくればいいの！」

「う、うん」

定期を自動改札に入れてさっさと階段を・・・

「早く！」

ノロノロしてんじゃないわよ！

「電車が来ちゃうわよ！」

「う、うん」

私はカツカツと階段駆け下りた。

ナニヤッテルノ私？

どーーでもいいっ！　もうどーーでもいいっ！

パジャマ

あと3分で最終の電車が来る。

「おい、こんなところに入ってきちゃダメだよ！」

後ろの怒鳴り声に振り向くと、あいつが駅員に腕をつかまれてた。

「ほら、早く出て！」

駅員があいつの腕を引っ張って階段の方に連れていこうとするから

「ちょっと！ その人、私の連れですけど！」

「ハ？」

駅員があいつの腕つかんだまま驚いた顔で私を見てるけど

「ちゃんと切符も買いましたっ！ ほら！ 早く見せなさいよ！」

あいつはおどおどしながら駅員に切符を差し出した。

駅員は戸惑った顔して私とあいつを交互に見てるけど、なんですかっ？

「何してるのよ！ 早くこっちに来なさいよ！」

あいつのボロボロの袖を引っ張った。

なるほどね、ホームレスがあちこち入り込まないように警戒してるのね。

電車に乗り込むと、車内のみんながギョッとした顔でこっちを見てるけど

なによ、なんだっていうの？ そうよ、私、ホームレス連れてるわよ！ 悪いっ!?

世の中全部敵みたいな気持ち！ ドカッと席に座って

「早くあんたも座りなさいよ！」

ドアのそばに突っ立ってるあいつに言うと

「う、うん」

おどおどしながら座るなっ！ チケット持ってるんだから！

まわりの乗客たちがチラッチラッとこっちを見てるけど？ なんですかっ？

こいつと並んで座ってるからですかっ？

あちこち擦り切れてボロ雑巾みたいな汚ったない服着てるこいつと？

髪はボッサボサで顔が見えないこいつと？

まあ、鼻からは見えるけどね 垢と埃でドロドロに汚れた顔がね

ボロボロで汚れた長靴履いてるこいつと？

隣りに座っていると気が狂いそうなほど臭いこいつと？

なんで 私 となりに座ってるの？
なんで連れてきちゃったの？

なによ、今さら！
いい！ どうでもいい！ もう どーーーーでもいいっ！

電車を下りて駅前に出た 出ちゃった
もう最終バスは行っちゃったからタクシー拾わなきゃ・・・
「あのお ねーちゃん？」
声かけないで！ 走って逃げたくなるからっ！
「俺・・・ どこに行くんだ？」
さあ、どこでしょうねえっ
「ねーちゃん？」
「うるさいっ！」
タクシー止めて
「桜ヶ丘2丁目まで」
このままタクシーで逃げちゃおうかな？
「あ、ちょっと、あんたは入ってきちゃダメだよ！」
運転手があいつに言ったの聞いたらね なんかね ムカついたのでっ
「この人、私の連れですけどっ」
あいつの袖つかんでタクシーの中に引っ張り入れたっ
「エ～、お客さ～ん、困るんだよねえ、そういう人乗せるのはさあ」
ったく、うるさいわねっ！
財布から一万円札を出して運転手に突き出して
「お釣りはいらないうすから、さっさと出してください！」
「しょうがねえなあ」
渋い顔しながらも、しっかり一万円は受け取けるとのねっ。

タクシーから降りたときは、もうへろへろ・・・
車内にあいつの臭いが充満して死ぬかと思った・・・
「俺、タクシーなんて乗んの、生まれてはじめてだよお」
ノキな声で笑るけどね
とうとう・・・ マンションの前なのよ・・・
「あのお・・・」
話しかけるなっ 今 葛藤してるんだからっ

連れて来ちゃった

私の部屋の前

葛藤したんだけどね めんどくさくなったの

もうどーでもいっていいの？

で 今 部屋の前

カギを開けて、ドアを開けて、パチンと電気をつけましたっ

「すげえ！　きれいだなあ！」

そうよ　いつ彼が来てもいいようにきれいにしてたのよ

そして　ここに・・・　こいつを入れる？

イヤーーーーッ！

今さらそんな、でも、イヤ、でも、やっぱりイヤ、でも

あっ、そうだ！

「あんた！　服脱いで！」

「へ？」

「ここで！　全部脱いで！」

キッチンに走って、大きなゴミ袋を持ってきて

「脱いだら全部この中に入れて！」

ポカンと口開けて私を見てるけどっ

「そんな汚ったない服で部屋の中に入ってこられたらイヤなの！」

「あ？」

「わからない？　部屋が汚れるでしょ！」

うんうんね　わかったのね

「脱いだらお風呂に入って！」

「へ？」

「お風呂よ！　わかんないの？　お・ふ・ろっ！」

「ふ、風呂入んの？」

「あんた、死ぬほど臭いんだもの！」

「ねーちゃん、俺を風呂に入れに連れてきてくれたのか？」

「ちがうわよ！　いいから入って！　ここだから！」

玄関の横のバスルームのドアをバンバンバンッ

「いい？　最低3回はセッケンかけて洗ってよね！」

「う、うん」

「シャンプーも3回よ！　わかった？」

「う、うん」

「あっ！　その汚ったないヒゲも剃ってよね！　髭剃りは…」

彼が使ってた髭剃り・・・　もう・・・　使うことなんかない・・・

「お風呂の中にあるから」

吐き捨てるように言ってベッドルームに走った。

プラダのスーツ

バカみたい　こんなの買っちゃって

クシャクシャにしてベッドの足元に放り投げた

バカみたい　私・・・

主任になれるなんて思って

彼が私を推してくれるなんて信じて・・・

彼が、専務の娘と・・・

何も言ってくれなかった、ひとこともそんなこと・・・

私は遊ばれたの？　遊ばれて、妊娠して、捨てられた？

彼にとって私はそんな軽い存在だったの？　軽い女に見られていたの？

ただの遊びだったの？

「ねーちゃん？」

「え？」

あいつがドアの隙間から覗いてたあっ！

「キャーーーー！」

ボタンとドア閉めて、ゼーゼー、な、なに、やだ、下着だけだったのにな

「ねーちゃん、俺、どうすればいいかなあ？」

「ど、どうすればって、どういうことよっ!？」

「服着ちゃいけねえんだよな？」

「ハア？」

「スッパなんだけだよ」

「あっ！」

忘れてた！　そ、そうよね、何か着せないと、でも、男モノなんて・・・

あ！　ある

「今持っていくから、バスルームに入ってる！」

「うん」

クローゼットの奥の、真新しいパジャマとトランクス

彼のために買っておいた

でも、彼は一度も着てない　だって・・・

泊まっていったことがない

私も泊まってって言ったことがない

物分りのいい顔して　彼が帰るのを見送るだけ

本当は、もっとそばにいてほしかった

「泊まっていてよ」って言いたかった・・・けど
あの穏やかな顔で「またな」って言われると何も言えなくなった
それが私と彼のいい関係だと思ってた
なのに・・・
こんなパジャマと下着買ってたのよ
バカみたい
どっちにしたって、もう終わってしまったんだから
ほんとに？　ほんとに終わりなの？
わからない・・・　ちゃんと彼と話をしたい。

「ここに置いておくからね！」
バスルームの前で、あいつに声かけて・・・
玄関のタタキのゴミ袋に入ったあいつの服！
ウッ　き、気持ち悪い
さっさと外に出さなきゃ！　ノミがいるかもしれないわ！
ウゲッ、この長靴も入れなきゃ　で、でも、触りたくないっ
そうだ！
トイレからトイレ掃除用のゴム手袋を持ってきて、
ゴム手袋はめて、袋の中に、ウッ、顔背けても臭いっ！
ポイッ！　とゴム長入れて、ギューッと袋の口を縛って、玄関の外の廊下に出して
芳香剤をシューッ
ゼーゼー
「あれ？　俺の服は？」
背中からあいつの声がした
「廊下に出したわよ！　臭いんだもの！」
振り返っ　え？　ダ、ダレ、コイツ？？
紺色のパジャマ着て　まだ少し濡れてる髪から顔が
なんか・・・こいつ　なんか・・・　若くない？
「あ、あ、あんた、歳いくつ？」
「俺？　20歳」
「ハ、ハタチーーーーッ!？」
オッサンかと思ってたーーーーっ！
だって、ヒゲ面で、だって、ホームレスって、だいたいオッサンで、
だって、顔なんかドロドロで見えないし、だって、20歳の子がホームレスしてるなんて、
聞いたことないんだものーーーーっ！
「風呂なんてひっさしぶりだったからよ、すげえサッパリしたあ」
そう言って笑う顔が　たしかに・・・　若い
「あんた、あの、あんた」
「ン？」

「コ、コーヒー、 飲む？」

「う、うん」

と、とにかく、コーヒー飲んで えっと・・・

私は酔いを覚まさないきゃっ！

ダイニングテーブル挟んで、私と・・・ あいつ

なんか落ち着かない・・・ 煙草吸おう

ヘンなカンジ・・・ さっきまでのホームレスなのよね、こいつ？

でも、どー見ても、ただの 20 歳の男の子なんだけど？

しかも、今さっき現れたばかりの？ はじめまして～みたいな？

「あのお」

「え？ なに？」

「俺、まだどっか汚れてっかな？」

「大丈夫よ」

「そ、そっか、あのお」

「なによ？」

「なんで、そんなジッと見てんのかなあって」

「み、見てないわよ！」

「そ、そっか・・・ あのお」

「な・に・よっ？」

「俺、なんでここにいの？」

えっ と・・・

「まあ・・・ 気分？」

どんな気分よっ!?

「風呂まで入れてもらっちゃって、ありがとなあ」

「親切でやったわけじゃないわよ！ あんたが死ぬほど臭いからよ！」

「ハハハ」

笑ってるけどさ

「あんた、なんで 20 歳のくせにホームレスなのよ？」

「ハハハ」

「ハハハじゃなくて！ なんでその若さでホームレスなんかしてるのよ？」

「家賃払えなくなっってよ」

「ハ？」

「仕事クビになって、家賃払えなくなっちまって、そんで追ん出された」

「また探せばいいでしょ！ 若いんだから仕事なんていくらでもあるわよ」

「雇ってくんねえんだよなあ」

情けな～い顔で笑いながら頭ボリボリ搔いて

「俺、ロクに読み書きできねえし、ケガしてっからよ」

「え？」

「仕事中に事故って、こっちの脚曲がねえんだ」
そう言えば、なんかノロノロ歩くと感じてたけど・・・
「不景気だしなあ、日雇いの仕事もなかなかねえんだよなあ」
ノンキに笑ってるけど、20歳で人生終わっちゃったのよ、あんた!?
「ねーちゃん」
「なによ？」
「名前なんてえの？」
「北川よ」
「ちげーよ、下だよ下」
私の名前なんか聞いてどうすんのよっ
「美里よ」
「ミサト？ みーちゃんか」
「みーちゃんなんてネコみたいな呼び方しないで！」
「そんじゃ、みさとちゃん？」
「ちゃんはやめて！」
「んじゃ、みさと？」
「呼び捨てにしないで！」
「んじゃ、なんて呼べばいい？」
「呼ばなくていいっ！ 私の 名前は 絶対に 呼ばないでっ」
むしろ忘れてっ！
「ねーちゃん、あれ、もう行ったのか？」
「あれ？ あれって？」
「俺が名前書いたやつ」
「あ・・・」
なんでまたそんなことを憶えてるかなあっ!?
えっと・・・ そうね・・・
「明日・・・ 行きます」
そうよ、明日、さっさと処理してやるわ！
灰皿に煙草をギュウッ
「あ～あ、もったいねえなあ、まだ吸えんじゃん」
あいつが灰皿から吸殻拾って火をつけ・・・ おいっ！
「シケモク拾わないで！」
「まだこんな長げえよ？」
「やめてよ！ 私の部屋でシケモク拾いなんて！ ほら！」
煙草の箱をグイッとあいつの前に
「もらっていいの？」
「いいけど」
あいつはニコニコして箱から一本煙草を出して
嬉うれしそうに火をつけて・・・
あ～あ～あ、吸い方がホームレス！

彼は・・・ かつこよかったわ DUNHILLの煙草とライターが似合ってた・・・
それにくらべて、こいつはっ！
三本指でせっこーく持ちちゃって、あ～あ。
だいたいあの前髪がうっとおしいたら！ 口の中に入りそうじゃない！
「あんた、前髪あげなさいよ」
「え？」
「見るだけでうっとおしいのよ！ ほら、手で上にあげて！」
「う、うん」
あいつが前髪かきあげて・・・ えっ
こ、こいつ、なに、ちょっと、なんか、イケメン・・・って、
バカじゃない？ ホームレスにドキッて、これは酔ってる、うん、酔ってるな
それに・・・疲れてるんだわ、今日は・・・ そうよ、いろんなことがありすぎて・・・
「私、寝る」
限界！
「あのお」
「なによ？」
「俺は・・・ どうすれば・・・」
「え？」
あっ！ 忘れてた！
どうするのおおお？
帰す？ どうやって？ 終電ないわよ？ タクシー？ 乗せてくれないわよ
「ねーちゃん、俺に、なんか用があったんじゃねえの？」
「用なんかないわよ！」
「あ？」
「酔っ払ってて、勢いで連れてきちゃったのよ！」
あいつはポカンと私の顔見て、そして
「ハハハ、おもしろー」
「おもしろくない！」
全然おもしろくないっ
「えっと、あの、とにかく、今日は、泊めて・・・あげる」
イヤだけど・・・
「いいの？」
よくないけど・・・
「なんか悪りいなあ」
ニコニコしてるけど・・・
「あんた、そこでいいでしょ？」
キッチンの隅っこを指差すと、あいつはニコニコして、うんうんて、そりゃそうよ
地下道の地べたにくらべたら天国でしょうよ
ベッドルームから毛布を一枚持ってきて、あいつに投げてやった
なんていうの？ 温情？ いや・・・ ちょっと罪滅ぼし・・・か

「ありがとなあ」

「絶対、私の部屋に入ってこないでよ？」

「うん」

「入ってきたら警察呼ぶからね！」

「ハハハ」

「ハハハじゃないわよ！ わかった？」

「うん」

フウウウ・・・ ため息出ちゃった。

パチンとキッチンの電気を消すと、

「ねーちゃん、おやすみ」

「え？」

「おやすみ」

おやすみなんて誰かに言われるのって、何年ぶり？

いやいやいや、そんなことはどうでもいいわよっ！

「はい、おやすみっ！」

ボタンとベッドルームのドアを閉めた。

電話

あたま・・・痛い・・・

あ・・・目覚まし・・・

なに・・・朝・・・なの・・・ 6時半か。
頭がボーッとしてる・・・シャワー浴びなきゃ・・・

あくびしながらベッドルームを出ると、あいつはまだキッチンの隅っこで寝てる。
毛布から覗いてる寝顔が、ほんとに、ただの20歳の男の子よねえ。
でもホームレスなのよね、まあ私には関係ないけど。

シャワーを浴びながら・・・彼の顔を思い出して・・・
ゆうべのことは・・・本当なの？
信じられないのよ、どうしても、だって、私の恋人なのよ？
専務の早とちり？ そうよ、お見合いは、したかもしれない、だって、断れないでしょ？
専務に言われたんじゃ、いちおうはするわよ、しかたないわ。
でも、婚約なんて、そんなこと、あるはずないじゃない！
あの場では「ちがう」って言えなかったのよ、専務の手前、きっとそうよ！
電話してみよう、彼が会社に行く前に。

急いで髪の毛を乾かして、バスルームを出ると、まーだ寝てる！ いいけど。

あれ？ バッグは？
なんで玄関？ 酔ってたから・・・
「もしもし」
彼の声
「もしもし、私」
「どうした？」
いつもと同じ穏やかな声で・・・
「あの、ゆうべの専務の話なんだけど」

「専務の話？」

「あなたと専務の娘が婚約って…」

「ああ、あれか」

「ちがうわよね？」

「まだだよ」

「え？」

「でも、すると思う」

「えっ？」

「うちの両親も喜んでるしね」

両親・・・ そこまで？

「でも、あなたは私と・・・」

「結婚と恋愛は別だ」

「え？」

「君だってそのつもりだったろ？ 自立した女でいたいって、いつも言ってるじゃないか」

そうだけど・・・

「どうして・・・もっと早く言ってくれなかったの？」

「正式に決まってから言おうと思ってたよ」

「正式になって・・・ だって、私の中にはあなたの子どもがいるのよ!？」

「それはもう結論が出ただろ」

「だって、そんな、そんな簡単なことじゃないでしょ？」

「割り切らなければいけないときもあるんだ」

「そんな・・・」

「そろそろ出るから切るよ」

「待って！」

電話の向こうから彼のため息が聞こえた。

「なんだい？」

「もし・・・ もしも、私が、あなたの子どもを生むって言ったら？」

沈黙

なぜ黙るの？ 困ってるの？ どうするの？ 答えてよ！

「君がそんな選択をするとは思わない」

な・・・ なにそれ？

「でも、あなたの子よ？」

「君らしくないな、どうしたんだ？」

どうしたって・・・

「それじゃ、会社で」

「待って」

彼は今度はわざとらしくため息をついてみせた。

「まだ何かあるのか？」

「私・・・ 今日お休みします」

「そう」

「あなたの子どもを墮ろしてきます」

「そう」

そうって・・・ それだけ？

「総務には風邪ということで言うておくよ、そのほうが君もいいだろ」

私が？ あなたがでしょ？

「それじゃ」

ピッ

バカみたい・・・ なによこれ・・・

バカらしくて涙も出ない・・・

フッと目の前が白くなって・・・

「ねーちゃん！」

グッと抱きかかえられて・・・ え？

「大丈夫か？」

あいつが心配そんな顔で私を見てる

「ちょっと貧血起こしただけよ」

聞いてたのかな・・・聞こえたわよね・・・すぐそばで・・・

「あんた・・・ もう帰って」

「うん」

「あ、ちょっと待って」

財布から2万円出して

「これ、交通費」

「いいよ、俺、ヒマだからさ、歩いてくからよ」

「でも、私が・・・ 連れてきちゃったわけだから」

「風呂入れてくれたじゃん」

そう言ってニッコリされると・・・ ちょっと罪悪感ていうか・・・

あいつが玄関の外からビニール袋を入れて、

パジャマの上を脱いで、え？

わりといい身体してる・・・って、何考えてるのよ？

今度はズボンも脱いで、あっ ほんとだ・・・

右足に膝のちょっと上から縦に太いケロイド・・・

あっ！

「ちょっと、あんた！」

あいつがあわててトランクス引き上げてポカンとこっち見てるけど

「パンツは履いてって！」

「へ？」

「あんたが一回履いたやつなんて、どうせ捨てるんだから！」

ていうか、私が捨てなきゃいけないんだから、イヤよ、触るの！」

「ハハハ、ほんじゃ、ありがとな」

お礼いらない マジ触りたくないだけ

あいつがビニール袋からボロを引っ張り出して着始めた。

ボロボロで煮しめたような汚いシャツを・・・

あれ？　なんか、ちがう、なんか、顔とボロが、ちぐはぐで・・・

「ちょっと、あんた！」

あいつが　フリーズ

「脱いで！」

「へ？」

「せっかくお風呂入ったのに、その汚ったないボロ着ないで！」

「で、でも、俺、これっきゃ」

「いいからさっさと脱いで！」

「え、あ、う、うん」

あいつがボロを脱いでビニール袋に入れて、これでいいですか？　みたいな顔で私を見
てる。

「その袋の口、しっかりしばってよ」

あいつがオドオドしながらビニールの口をギュッとしばったのを確認して、
ツカツカとそばに行ってビニール袋を引っつかんで

「それ着て、待ってて」

床に置いてあった、さっきまでこいつが着てたパジャマを指差した。

「あのお、俺の服は・・・」

「捨てるのよ！」

「エッ？」

「こんな一秒でもここに置いておきたくないの！」

「あ、ちょ、待っ、そ、そん中に」

「なによ、大事なものでもあるの？」

そんなものあるっ？

「う、うん」

あいつがビニール袋の口を開けて

「えっと・・・」

ボロジャンパーを引っ張り出してポケットから何か取り出した。

「なにそれ？」

「これ、ねーちゃんにもらった俺のハンコと3万」

「3万？ なにそれ？」

「あの、ほれ、指輪拾ったときにくれたじゃん」

「あんた、使わないでとっといたの？」

「うん」

貯金感覚？ そんな余裕ないでしょ！

「バカじゃない!? 使えばいいでしょ！」

「使えねえんだ」

「ハ？」

「俺みてえのが万札持ってっと、盗んだんじゃねえかって思われんだよ」

「え？」

「この前も、とっ捕まりそうになっちまって、俺、走れねえのに走った走った、ハハハ」

「もらったって言えばいいじゃない」

「言っても信じてくんねえんだよなあ」

情けな〜い顔で笑ってるけど

「だから、これ、返すわ」

「いいわよ、返さなかったって」

「持ってても使えねえしよ」

あいつが私の手にクシャクシャになった3万を置いた。

お金も使えないって・・・ なにそれ？

「でも、これは俺の名前だからよ」

あいつが嬉しそうにそう言いながらハンコを・・・

なんか・・・ 私　なんか　腹が立ってるんだけどっ

「ちょっと、あんた、私が帰ってくるまで、出てっちゃダメよ！」

「う、うん、つうか、俺ハダカだし」

「そうだけどっ、何か盗んだりしたら、警察呼ぶからね！」

「ハハハ、うん」

片手にくっさいビニール袋、片手にクシャクシャの3万を持って部屋を飛び出した！

病院

近くのスーパーで買ってきたっ。

スーパーで服を買うなんて初めてよ、しかも男性用。

ロング丈のトレーナー・ジャージパンツ・Tシャツ・靴下・スニーカー

あ、丈長めのジャンパーも、寒いとき用？

これで足りる？ ホームレスするのに足りるかな？

わかんないわよ！

いい！ これがいい！

ドアを開けると、あいつがパジャマ着たまま玄関に座ってた。

「あ、ねーちゃん、おかえり！」

「こっち来て！」

ダイニングテーブルの上にドサッとスーパーの袋を置いた。

「これ着て！」

「え？」

「早く！」

「う、うん」

あいつが目をパチクリさせながら、袋から服を取り出した。

「すげえ！」

スーパーの服にそこまで感動しなくていいから早く着てっ！

あいつがパジャマの上を脱いで・・・ いやいやいや、ここじゃなくてっ

「あっちで着替えて！」

「あ、うん」

あいつがスーパーの袋を持って

「あ！ 玄関じゃなくてバスルーム！」

私も着替えなきゃ

病院に行くんだから

ベッドルームから出たら・・・

え？

フツターの男の子が立ってる

サイズ ピッタリ よかった なんか 私の頭 どっかに 飛んでる

「あのお」

「え？ あ、なに？」

「なんかジッと見てっから」

「ジッと見てなんか・・・」

見てたけど

「見てないわよ！」

なんだこいつは？ 私がゆうべ連れてきたホームレスはどこに消えた？

「ねーちゃん？」

「え？ あ、なに？」

「大丈夫かあ？」

大丈夫じゃないかも

「大丈夫よ！」

えっと、それじゃ・・・

ゴルッグルギョルルルウウ

なに？ 何の音？

あいつがあわててお腹押さえて情けな〜い顔で笑ってる。

あ、お腹の音！

「あんた、いつから食べてないの？」

「えっと、おっといかなあ」

「おとといいっ!? あんた3万も持ってて、あ、使えなかったのよね、そうだった」

あいつがまた情けな〜い顔で笑ってる。

駅前のちょっとオシャレなイタリアンカフェ。

私の目の前で、あいつがズルッズル音立ててミートソースをガッツガツ食べてる。

「ちょっと、あんた！」

あいつに顔近づけて、声押し殺して言った。

「お皿に顔近づけて食べないでよ！ 犬じゃないんだから！」

「あ、う、うん」

「それから、その脚！ 通路に出てるわよ！」

「あ、あの、こっち、あんま曲げらんなくて」

あ、そうだった。

「それは・・・ そのままで・・・いい」

ハアアア、こんなにまわりに気を使わなきゃならないなんて。
コンビニで何か買ってやればよかった・・・って、もう遅いわよ！
昨日から何やってるのかなあっ私っ!?

「ごっつおさん」

あいつがミートソースで真っ赤になった口を手の甲で、

「ちょっとーっ！ 手で拭かないで！ ほら！」

あわてて紙ナプキンを渡した。

「ねーちゃんって、お母さんみてえだな」

あいつがそう言ってニッコリした。

「ハアアアアッ!? あんたがっ」

あっ こ、声大きかったわ。

「あんたが」

あいつに顔近づけて、

「行儀悪すぎるのよ！」

「ハハハ」

「ハハハじゃないわよ！ 親に叱られなかったの？」

「いねえんだ」

「し、死んだの？」

「わかんねえ」

「わかんないってなによ？」

「俺、捨てられてたんだ」

「え？」

「駅の便所に」

ぶっ飛び過ぎてて

「あ、そう」

脳が認識できてない

エキノベンジョニ ステラレテタ

えっ？ 駅のトイレに 捨てられてた？

こいつはフツツーのことみたいに言ってるけど

フツツーのことなのかな、こいつには？

私に関係ないけど

「行くわよ」

伝票持って席を立った。

切符を買って・・・

あいつがいつもいる私の会社がある駅まで。

そして、私はその途中の病院のある駅で降りる。

あいつが電車に乗っても、今日は誰もヘンな顔して見ないのね。

そりゃそうね、どう見てもふつうの男の子。

今からあの駅に戻って、またホームレスするなんて誰も思わないわよね。

そして・・・ 今から私が子どもを堕ろしに行くなんてことも・・・

誰も気がつかないうちに、さっさと処理して、何もなかったことにするのよ、何も。

私の降りる駅が近づいたから

「それじゃね」

あいつの顔も見ずに立ち上がった。

「ねーちゃん、どこ行くんだあ？」

「病院よ」

できるだけ、なにげなく聞こえるように

まわりの乗客がなんとも思わないように

「あんたの降りる駅、わかってるわね？ 山下町よ」

「あ、う、うん」

ドアが開いて、他の人たちと一緒に、なんともない顔して降りて

階段に向かって・・・ン？ エ？ ハ？ エッ!?

「ちょ、あんたーっ！　なんで降りちゃったのよっ!？」

あいつが私のとなりで情けな〜い顔して笑ってるうううっ！

「なにやってんのよ！　あんたの降りる駅は、あと5個先なのよっ！」

「うん」

また情けな〜い顔して笑ってるけど

「もう少しで次の電車があるから、それに乗りなさいよ？」

「一緒に・・・ 行くよ」

「ハ？」

「ねーちゃんの病院」

「なんであんたがついてくるのよ？」

「俺・・・ 名前書いたから」

「バカじゃない!?　ただ名前借りただけでしょ！」

「うん」

「次の電車できっさと帰って！」

私はクルッと背を向けてカツカツカツと早足で歩いた・・・ていうか、もう走った。

まったく、何考えてるのよ！　わけわかんない！

ホームレスと病院行くなんて、ありえないでしょおおっ！

おにぎり

気がつくと

固いベッドの上だった。

あ、なんかスッキリしてる

なんか調子が悪かったのって ツワリだったのかな・・・

終わった・・・

なんだ、思ってたよりずっと簡単だった・・・

寝てる間に終わってた・・・

まだ頭がボーッとしてるけど、なんかよく寝たってカンジ

身体を起こすと、一瞬めまいがしたけど、これくらいなら大丈夫ね

ドアが開いて、看護師さんが入ってきた。

「あら、起きたの？」

「はい、お世話になりました」

「北川さん、よく寝てたわねえ、2時間くらいで麻酔が切れるはずなんだけど、
ぜんぜん起きないから、そのままにしたのよ」

「え？」

腕時計を見ると、エッ!? 4時!?

「あ、あの、今、夕方の4時ですか？」

「そうよ」

病院で爆睡って！

「どう？ 立てる？」

「は、はい」

「お家の人に迎えにきてもらえるの？」

「いえ、一人暮らしなので」

「そう、無理しないでゆっくり帰ってね」

「はい」

駅もすぐそばだし、大丈夫、うん、大丈夫

支払いを済ませて、これで終わった！

外はすっかり夕方・・・になってる。

さ、帰ろ え ハ? エッ?

ウソ!

エーーーーッ!

正面の生垣に あ、あいつが座ってるーーーーっ!?

「あ、ねーちゃん!」

あいつが私を見てヨタヨタ立ち上がった。

「あ、あんた、なんで、ここ、ちょっと、なんで、いるの?」

「ねーちゃん走んの早えから、俺、必死こいて走ったよお」

情けな〜い顔して笑ってるけど?

「あんた、あの、い、いつからここに?」

「ねーちゃん中入って、そんで、ずっと」

ハァァァ?

「ずっとって、あんた、何時間もここにいたわけ?」

「うん」

「バカじゃないのーーーーっ!」

ヘラヘラ笑ってるけど

「なによ、あんた、なに、なんで、わけわかんないわよ!」

「ハハハ」

「何考えてるのよ!」

「ごめんなあ」

「こんなとこで何時間も、意味わかんないっ!」

「なんか、待ってたかったっつうか」

「ハ?」

「なんつうか、えっと」

ボリボリ頭搔いて

「俺、名前書いたからよ」

あいつが情けな〜い顔で笑って・・・

名前・・・ 書いたからって・・・

「バカみたい」

「うん」

「名前借りただけでしょ」

「うん」

「余計なお世話よ」

「うん」

「たいしたことなかったわよ、寝てる間に終わってたわ」

「うん」

あいつは微笑んで、そして、おずおずと私の頭に 手を・・・

「な、なによ？」

ぎこちなく私の頭をなでて・・・

「子どもじゃないわよ！」

「うん」

「たいしたことなかったって言ったでしょ」

「うん」

「たいしたことなかったわよ」

「うん」

あいつの手は ずっと私の頭をなでていて・・・

「寝てる間に終わってたわよ」

「うん」

なのに・・・

なんなのよこれ・・・ 勝手に涙がボロボロ出て・・・

「悲しくて泣いてるわけじゃないんだからね！」

「うん」

「なんで涙が出てるのかわからないんだからね！」

「うん」

「だからそんな・・・」

優しい声・・・

「そんな声 出さないでよ！」

「うん」

「ほら、またあ！ ほら・・・ま・・・た・・・」

あいつの胸に頭をつけて・・・ だって・・・ 涙が止まらなくて・・・

あいつの腕がオズオズと私を抱きしめてきて・・・

もう何も言えなくなって・・・

あいつの胸の中で泣いていた・・・

バカみたい、子どもみたいに、バカみたい・・・

ちっとも悲しくないのに・・・後悔なんかしてないのに・・・

なんで泣いてるの・・・

こんなやつ・・・ こんな・・・

なのに・・・

「そばに・・・ いて・・・」

「うん」

あいつの優しい声が耳元で・・・

バカみたい・・・ 私・・・

バカみたい・・・ なんて、こいつの腕の中で・・・ ホットしてるの・・・

電車に乗って、バスに乗って、私のマンションに・・・

また 連れてきちゃ った

バカみたい、私、バカみたいバカみたい バカーーーーッ！

どーするのよおおっ!? えっと、どうしよう、えっと、と、とにかく、

「コ、コーヒー飲む？」

あいつと向かい合って、コーヒー飲みながら、煙草吸って、チラッとあいつを見ると、ヘラ〜ッとした顔で煙草吸ってる。

そうよ、たしかに私言ったわよ、言っちゃったわよ、そばにいてって・・・

でも、あれは、なんていうの？ 感情的になってたっていうか、異常心理状態っていうか、

だってそうでしょ？ やっぱり子どもを墮ろすって、女にとってはタイヘンなことで、まあ、アツという間に終わったんだけど、たいしたことないと思ったのも本当なんだけど、

だけど、こいつがあんなところに何時間も、それに、でも、だって、ほら、いろいろあって、

そうよ、いろいろあったじゃない、だから、なんていうか・・・

バカだわ

「私、寝る」

ボタンとベッドルームのドアを閉めた。

ダメ、今はなんにも考えられない。ドタ〜ッとベッドの上に、そして、真っ白。

目を開けると、真っ暗！ 今何時？ ベッドサイドの時計、8時？

すっごい、爆睡してた・・・！ やっぱり疲れてたのかも。

あいつは・・・ いるわよね、そりゃいるわ・・・ 他に行くところないんだもん。

連れてきちゃったんだし。

あーっもーっイヤ！

ボタンとドアを開けると、あれ？ あいつは？ 帰ったとか？

ベランダのドアが開いてる。見ると、あいつが身を乗り出すように下を覗き込んで、

「あっ、ちょ、ちょっと！ 危ないわよ！」

思わず襟首引っ張った。

「あ、ねーちゃん」

あいつが振り返ってニッコリ笑った。

「なにやってるのよ！ 危ないでしょ！」

「なんか下の方にネコがいたんだよなあ」

この辺いるけど 野良猫いるけど ゴミ箱漁ってるけど

なんていうのかなあ 単純すぎて逆にわからないわ、あんたの・・・ いいけど。

「ねーちゃん、腹へってねえ？」

「え？ あ・・・」

そっか、そうよね、こいつ、お昼も食べてないし、夜だって食べさせてないし。

どうしよう、今からだったらファミレスくらいしかないわよね。

「俺作ったから」

「ハ？」

「作ったっつっても、メシ炊いて握りメシ作っただけなんだけだよ」

あいつが情けな〜い顔で笑って言った。

「あんたが作ったの？」

「うん、米あったから、あの、勝手に使っちゃったけど」

それはいいけど

「あんた、ごはんなんか炊けるの？」

「働いてたときは一人暮らししてたからよ」

「へえ」

チラッとテーブルの上を見ると、デッカーイおにぎりが4個。

ノリもゴマもついてない真っ白なだけのおにぎり。

「食う？」

「え・・・ あ・・・ はい」

椅子に座って、デッカーイおにぎりに向かい合って、あいつが作った・・・

この目の前に座ってる、ホームレスが、あの手で・・・

「あんた・・・ 手、洗った？」

「あ？」

「これ握るとき、ちゃんと手を洗ったの？」

「ハハハ、うん、ちゃんと洗ったよ」

「そ、そう、 それじゃ・・・」

おにぎりを手にとって、お、重もつ、土方の弁当じゃないんだから、こんなデッカーイ・・・

ま、まあ、いいわ。

「いただきます」

あれ？ 美味しい！

なんていうの？ 塩かげんが絶妙？

「梅干しかなんか入れっかなあって思ったんだけど見つかんなくてよ」

そりゃそうよ、だって、

「梅干なんて買ってないもの」

「そっかあ」

買ったことないわよ、梅干しなんて。

料理苦手なのよ。

たいていデパ地下のお惣菜とかお弁当か外食。

作るとしたらトーストとかお茶漬けくらい？ 作るって言えるのかわからないけど。

必要なかったしね・・・

彼とはいつも高級レストランで食事だったし。

私のところに来るのは遅い時間だから、お酒のおつまみ用意すればいいだけで。

冷蔵庫の中には彼の好きな高級オリーブやチーズが入っていて・・・

「ねーちゃん？」

え？ あ 意識吹っ飛んでた・・・

「具合悪りいんか？」

「あ、ううん、あの、塩加減が、いいと、思う」

「マジ？」

あいつが嬉しそうっ！ な顔してる。

「あんたも食べたら？」

私はお皿をグイッとあいつの方に押しやってやった。

「うん」

あいつは一個つかんでバクッと、ハァ～、シアワセそうな顔して食べるわねえ。

こいつは・・・

何時間も私のこと待っていて・・・

名前書いたからって・・・ バカみたい・・・

でも・・・

こいつの前で大泣きしちゃったんだわ・・・ 前でっていうか腕の中で・・・

なんで？

弱ってたのかな・・・ 弱ってたんだわ。

だって、彼とのこと、いちおう、じゃなくて、かなり、ショックだったし、

産婦人科とか中絶とか、そういう、なんていうの？ まあいろいろ？

だから・・・

そばにいてなんて・・・言っちゃって・・・

言っちゃった、言っちゃったのよ？

どうするのよ？ どうするって どうしよう

「あのお」

え？

「なによ？」

「なんでずっと俺のこと見てんのかなあって」

「え？ あ 見、見てない、ちょ、ちょっと、考え事してただけよ」

「そっか」

そうよね、考えてたってしょうがないのよ、言わなきゃ。

「あのね」

「ン？」

そ、そんな真っ直ぐな目で、ていうか、前髪でほぼ見えないけど、
こいつの顔見て言えない気がするから 目をつぶる！

「私が、あの、なんていうか、そはに、いて、って、言ったのは、あれは、
なんていうか、つい、ポロッと出ちゃったっていうか、勢いっていうか、
あの、そんな、深い、意味は なくて、その・・・」

「うん」

え？

「あの、うんって・・・」

「これ食ったら出てくよ」

え・・・

「あ、そう」

なんだ、あっさり、まあよかったけど。

「ごっつおさん！」

あいつが手をトレーナーでぬぐいながら立ち上がった。

「あの・・・さ」

「なに？」

「えっと・・・」

「なによ？」

「あ、これ」

あいつが着ているトレーナー引っ張って

「もらっちまってもいいの？」

「あんたのために買ったんだから」

あれ？ そ、そういう言い方は・・・

「だ、だって、あんたの、臭かったから捨てちゃったでしょ！」

「ハハハ、ありがとなあ」

まあ・・・こちらこそ、いろいろと・・・って言えばいいの？ わかんない。

「そんじゃ」

そう言って玄関の方へ

「え？ ちょ、ちょっと！」

振り向くあいつに・・・

えっと 私 何を言おうとしたの？

あいつが私を見てる

何か言わなきゃ何か・・・

あいつが・・・

まだ私のこと見てる

「な、なに？」

あいつが頭掻いて

「ねーちゃんさ・・・ あんとき・・・」

また私を見て・・・

「そばにいてって、俺なんかにさ」

言った・・・けど・・・

「すげえ嬉しかったよ」

え・・・

あいつはにっこり笑って・・・ そして・・・

玄関のドアが閉まった。

なに それ

なにそれ・・・ そばにいてって・・・ 嬉しかったって・・・

なによそれ・・・

そばにいてって言われて嬉しかったって言って出てくって、なにそれ？

なんなのそれっ!?

玄関のドア、バンて開けたら、ヒョコタンヒョコタン歩いているあいつの背中。

「ちょっと、あんた！」

あいつがビクツとして振り向いたけどおおおっ？

「あんたねっ！」

あいつが怯えた顔してるけどおおおっ？

「おにぎりどうすんのよっ!？」

ポカンとした顔になってるけど？

「あんなバカデカイおにぎり！ 私ひとりじゃ食べきれないわよっ！」

あいつは・・・
情けな～い顔で笑った。

発熱と敗北感

私が悪いんです。

あのとき、あのままにしていれば・・・

今、あいつが、キッチンの床で、おそらく爆睡、していることはなかったです。

その前にお風呂に入れともと言いました。

毎日お風呂に入るという概念が無いみたいでしたからっ。

あああもうっ

おかしい　なんかおかしい　あいつと出会ってからなんかおかしい！

私はもっとクールで合理的で常に冷静で、こんなバカなこと絶対しない女よ！

とにかく　とにかく　えっと

そう！　明日会社に行くときにあいつを連れて、あの地下道に戻せばいいのよ、それよ。

よし！　寝よ！

目覚まし・・・の音・・・なんだけど・・・　頭が痛い・・・　身体もなんか重たい・・・

あれ、熱っぽい？

体温計は・・・　サイドテーブルの・・・　これは基礎体温のやつ、これじゃなくて・・・

あった

え？　38.7度？　ウツソ～

ハアア、会社に電話しなきゃ、携帯は・・・　あ、バッグに入れたままダイニングだあ

「もしもし、北川です」

「あ、北川さ～ん、おはようございますう」

こいつの語尾伸ばすクセなんとかして・・・

「熱があるので今日は会社休みます」

「まだ風邪治ってないんですねえ」

まだ？　あ！　昨日も風邪ってことで休んだんだった・・・！

「え、ええ」

「わかりましたあ、部長に伝えておきますう」

彼に・・・ そうね、部長だからね・・・
「それじゃ」
ピッ
えっと解熱剤どこだっけ？
「ねーちゃん、具合悪いんか？」
え？ あ、そっか、いたんだ
「ちょっと熱がね」
解熱剤は・・・ あ、ここだ
「お、俺に、なんか・・・」
「ああ、大丈夫、大丈夫だから、解熱剤飲んで寝れば治るから」
「頭冷やすか？」
「あ、いや、大丈夫、気にしないで、本当、大丈夫」
「だってフラフラしてんじゃん」
そりゃ熱があるから・・・
「部屋まで運んでやっか？」
いやいやいや、瀕死の病人じゃないんだから・・・
「大丈夫、本当に、気にしないで」
「俺なんかに遠慮すんなよお」
してないしてないしてない
「遠慮じゃなくて、本当に、大丈夫、いつも自分でなんとかできてるから」
あ こいつの食事・・・ 財布は・・・ ツツ・・・頭・・・痛い痛い・・・
なんかもうめんどくさい、財布をボンとテーブルに置いた、もう考えるのムリ。
「これで・・・ 朝食とか昼とか、好きにして」
「俺のことなんかいいからさ、早く寝ねえとき」
「寝る、寝るから、あんたも、とにかく、まあ、好きにして」
「う、うん」
あいつがメチャ心配そうな顔してるけど、かまってるらんない、寝る。

あ・・・ なんか・・・ 楽になってる・・・
今・・・ 何時・・・ 3時過ぎ？ どんだけ寝てたの私？ 爆睡してた。
熱もなんか下がってるみたい、計って・・・ あれ？
アイスノン？
アイスノンやって寝たっけ？
ううん、冷凍庫から出すのもかったるくてそのまま寝た・・・わよ・・・ね？
それじゃ これは 誰が？
あいつ しか いないっ
部屋に入ったら警察呼ぶって言ったでしょおおっ!?

って、入ってきたことも気づかなかったけど・・・

36.8度

おお、下がった。

シャワー浴びよう、汗かいちゃったし。

ドアを開けると・・・ なんか・・・ 違和感・・・

違和感ていうか、なんか・・・ なんだろう、フローリングが・・・ きれい？

いや、熱出してたから目がちょっとヘンになってるのよ。

あいつは？

いない

出ていった？

それならそれでいいけど。

バスルームに入ると・・・ また 違和感 違和感ていうより・・・ なんだろう？

まあいいわ。

浴室のドアを開けると・・・ なに？ なんか違う、いつもと違う、なんだろう？

あ！ 蛇口がピッカピカ！ シャワーヘッドも！

ああああ！ 鏡の水垢が、あのしつこい水垢が ない！

彼が来るときはメチャ掃除して、でも、鏡の水垢だけはどうしても取れなくて

それが ない！

どういうこと???

あいつ？

毎日お風呂に入るって概念が欠落している あいつ？

てか、最初にここに来たときはメチャ汚くて臭かった あいつ？

なんで？

もういいっ！ シャワー！

ハアアアア、サッパリした！

冷た〜い水飲みたい！

え？

キッチンの シンクがピッカピカ!? なんでーっ？

なんか・・・ 逆に・・・

怖くなってきちゃったああああ

あ、玄関の ドアの 開く音 あいつだっ

「あ、ねーちゃん！」

こいつが 犯人なのかって？ 犯人とかじゃないけど

「起きて大丈夫なんか？」

その、死にそんな人を見るようなカンジやめてくれない？

「熱は？」

おおおおっととと 額に手をあてようとしたな

「体温計で計ったから」

スルッと抜けて

「もう平熱だから」

「それでもまだ寝てた方がいいんじゃないか？」

なんでそんなに重病人扱いするかなあっ

「大丈夫よ、もう大丈夫」

「ねーちゃん強がりだからさあ」

ハ？ 今 ナンテ 言ッた？

「あんまムリしねえで休んでねえとさあ」

「あんたねっ」

「ン？」

「あんたが犯人でしょっ！」

あ 犯人 ではない

「お、俺、なんもしてねえよ？」

た 確かに べつに 悪いことは してない けど

「お、俺、マジでなんも」

そこまで怯えなくてもいいじゃない！

「あっ」

え？ なに？ なんかやったの？

「あっ！ て、なによっ？」

なにその悪いことして見つかった犬みたいな顔？ 飼ったことないから見たことないけど？

「あの・・・さ・・・」

オドオドしながら、ジャージのポケットから・・・スーパーの小分け袋・・・

中から小銭とレシート二枚

「ごめん！ マジごめんなさい！」

なに手を合わせて土下座しようとしてるの、右足曲がらないからできてないし？

「お、俺、ねーちゃんの財布から 3,000 円抜いて、それ買って・・・」
それ？ レシート？
洗剤いろいろ、スポンジとか金ダワシ？ 金ダワシなんて買ったことない。
もう 1 枚は・・・ ニンジンやら・・・ 食材？
「で？」
「あの、だから、か、勝手に・・・ ねーちゃんの金・・・」
ハアアアアア？
「バカみたいに怯えるから犯罪でもしたのかと思っちゃったわよ！」
「あ、で、でも、ねーちゃんの財布、勝手に・・・」
「財布預けたんだから好きに使っていいわよ！」
「え？」
「もうっ！ あんたの反応とやってることが違い過ぎて頭混乱したわよっ！」
「ご、ごめん」
「あれ？ あんた、昼は？ ちゃんと食べたの？」
「う、うん、多分・・・これ」
あいつが指差したのは

菓子パン ¥98

「なにこれ？」
「アンパン」
「いやいやいや、種類聞いてるんじゃないで！ これだけ？」
「俺、そんな食わなくても平気だからさ」
あ そうだった こいつ ホームレスだった だったっていうか、今も、いちおう・・・
よね
「あ、あの、晩メシさ、うどんなら・・・ 食べっかな」
「ハ？」
「いちおう、うどんの材料買ってきたんだけど」
「あんたが作るの？」
「あ、う、うん、で、でも、ねーちゃんがイヤなら」
「イヤではないけど、あんた、料理できるの？」
「あ、だから、一人暮らししてたときは・・・」
あ、そう言ったけど うどんまで!?

なんか なんていうか これは・・・ まさか・・・ 敗北感？
まさか～！ 私がこいつに敗北感感じるわけじゃない！

卵とじうどんと、キャベツとニンジンを手切りにしてレーズンが入った・・・

「これはなに？」

「あ、なんか、サラダみてえの」

みてえの・・・ そう

「あ、美味しい」

「マジ？」

「あんた、板前やってたことあるの？」

「ねえよ」

「あ、そう」

なんなの、こいつの方が私より全然料理うまいって、なにっ？

「ねーちゃん、寝た方がいいんじゃないか？」

「もう大丈夫よ」

「それでもまた熱出っかもしんねえじゃん？」

「たまにこうなるのよ、疲れが溜まったときとか」

「ねーちゃん、今疲れてんのか？」

「え、そりゃ・・・」

そうよね・・・ プレゼンの準備したり、妊娠して・・・それで・・・

「ねーちゃん強がりだからよ、疲れても疲れたって言えねえんじゃないか？」

おい、待て！ また言いやがったなあっ！

「強がりって・・・ なにっ？」

「ねーちゃん」

あんたに私の何がわかっ あ・・・

こいつには・・・

路上で吐いてたところも、中絶したことも、泣いた顔も 見られてるううっ

ぜ～ったい人には見られたくないこと全部ううっ

私は 無言のまま あいつが食器洗っているのを見ている

なんか いろいろ負けた感

なによこれーっ!?

「そんじゃ、俺、行くよ」

「え？ どこへ？」

「あ、行くっつうか、出てくっつうか」

あ・・・ そう・・・よね

今度こそ黙ってっ笑顔でっ何も言わないでっっ

私は何と葛藤しているのっ？ 葛藤する何かあるわけっ？

ハアアアア 疲れる

「ねーちゃん？」

「え？ あ、なんでもない、大丈夫」

自分と闘ってるだけ

だからっ 闘う必要性ってなにっ？

「熱あがったんじゃないか？」

あいつが・・・

あいつの手が私のおデコに ピタッ

隙をつかれた・・・

K.O. 負けてっ こういうこと？

ああああっもーっ

どしゃ降り

目覚ましが鳴る前に 目が覚めた

なんだか身体が軽い 倦怠感がない
熱が出て 解毒されたのかな
そうね 熱が出た後って いつもそーだもの
解毒 いい言葉

目覚ましが鳴って
起きよう！
今日からこの解毒された私でガンガンいくわ！
あのプロジェクトは私の企画だもの！ 成功させる！ 絶対に！
主任が誰だろうと関係ない！ 私の底力見せつけてやるわ！
ああ！ 晴れ晴れとした気分！
カーテンをバツと開けて！

どしゃ降り

なにこれ？ どしゃ降り
どしゃ降りだろうと大雪だろうと仕事には関係ないけどね
関係ないけど

あいつを どうする？

とにかく とにかく・・・ 顔洗おう

バスルームに向かう途中でチラッとキッチンの床に寝ているあいつを・・・
こいつ、禁を侵したのよ。
私が気づいてないと思ってたみたいだけど？

真夜中に私の部屋にそ〜っと入ってきて 私の額に手をあてて
ホッとしたみたいなお息ついて またそ〜っと出ていった

薄目開けて見てたんだからっ。

真夜中まで起きてたからまだ寝てるのよっ！
こいつ、風邪ひいたことないのかしら？　　ないんでしょうねっ
だから熱が出たら死ぬとでも思ってるのかもねっ。
いいっ！　　どうでも！
したくしなきゃ！

鏡の中の私。
デキる女の顔。
抜かりなし！　　よしっ！

ベッドルームのドアを開けたら　　あいつと目が合った。
な、なにその怖いものでも見た的な顔？
「ねーちゃん！」
な、なに？
「何してんだ？」
ハ？
「仕事に行くのよ」
「熱下がったばっかじゃん」
「もう大丈夫よ、スッキリしてるわよ」
「あの・・・　強がって・・・」
「強がってないっ！　強がりとか言うなっ！」
「う、うん」
ったく、こいつの中の私のイメージってどんななのよっ？

路上でゲロ　中絶　大泣き・・・

それは解毒したっ！

えっと、とにかく
「コーヒー飲む？」

私の前でカップを口にあてたまま　心配そ～な顔で私を見ているこいつが　ウザ
イッ！
「なにっ？」
「え、あ、えっと・・・　あ、ねーちゃん、朝メシ食う？」

「私は朝は食べないの」

あ こいつは？

「あんたは？ お腹空いてるんじゃない？」

「俺は、朝とかそんなん関係ねえから」

って笑ってるけど・・・ あ！ そうだった！

こいつホームレスだ、三食きちんと・・・ではない、そうだったそうだった。

それにしても・・・ すごい雨。

どうしよう・・・

今日こそはこいつを、あの地下道に戻そうと決意してた、うん、した。

でも・・・ねえ・・・ こんなに雨降ってるのに・・・ねえ・・・

まあ地下道だから雨は防げるだろうけど・・・ 寒いわよねえ・・・

いやいやいや、ホームレスなんだからそんなの慣れてるわよ。

慣れてるだろうけど・・・でも・・・

「ねーちゃん？」

「え？ あ、なに？」

「どっか・・・ 痛いんか？」

「ハ？ 痛くないわよ」

「なんか苦しそうな顔してっけど」

それはっ だからっ

「雨でしょっ！」

「雨嫌れえなんか？」

「そういうことじゃないのっ！」

そうよね ポカンよね その表情は間違っていないわよ

でもね・・・

よりもよって、こんなどしゃ降りの中、あの地下道に戻すって、人としてどうなの？

人としてっていうか、責任？ ここに連れてきちゃったのは私なんだから。

なんていうの？ それは、確かに私に責任があるわよ、そうなのよ。

ああもうっ なんでこんなことを朝から悩んでるの私っ!?

あ、 せっかくスタイリングしたのにかき上げちゃった、まあいいわ、どうせ雨で・・・っ

て

スタイリングまで雨で台無しって・・・

「ハハハ」

ハ？

「なに笑ってるの？」

「なんか・・・ ねーちゃん、おもしろえなって」

「ハ？」

「見てっと、飽きねえっつうか」

「ハァァァァッ!?!」

もういいっ！ もう悩まないっ！ 解毒したんだからっ！ 解毒よ解毒っ！
連れていこう！ 地下道へGOよ！

「行くわよ！」

「うん」

あたりまえみたいに「うん」て言うのね。

あたりまえよ！ ここにいることの方が異常事態だったんだから！

玄関のシューズクローゼットの脇の傘立て。

私はいつもこのお気に入りのブランドの傘。

使い捨ては何本かあるけど、急に雨に降られたときに買っただけ。

傘 あげた方がいいかしら？

そりゃそうよ、バス停や駅まで相々傘したくないわよ。

どうせ使い捨てだし。

「これ、あげる」

使い捨てを一本抜き取ってあいつに差し出した。

「もらっていいの？」

「いいわよ、どうせ使い捨てなんだから」

「ありがとなあ」

お礼言われるほどのものじゃないわよ、使い捨てなんだから。

玄関ドアを開けると すごい音

部屋の中で見るより すごい雨

なんか なんていうの なんか なんか

「あんた！」

振り返ったら、あいつがビクッとして

「留守番！」

ポカン としてるけどっ

「あんたは留守番するのっ！ これ・・・」

財布から5千円出してあいつにグイッと押しつけた。

「これで、昼でもアンパンでもなんでも、とにかく、好きにして！」

「え？ あの・・・ え？」

そうね わからないでしょうね わからないだろうけどっ
「私はねっ、こんな雨の中、あんたをあの地下道に戻すほど冷血な女じゃないのよっ！」
バンッと力込めてドア閉めた。

ああああもーっ
何やってるの私いいいっ

いっその雨に打たれて 滝行みたいに 解毒されたいっっ

あ、早く行かなきゃ。

前髪

なんだろう この 水を得た魚みたいな感覚
自分のやっていることに絶対的な自信が持てるっていうの？

新しいプロジェクトの“主任”の吉田が、まったく企画の内容を把握できなくて、
スタートからこんがらがっちゃったらしいのね。
久しぶりに入社したら、私の机の上にはファイルの山ができてたわ。
みんな困った顔して、すがるような目をして私を見たもの。

企画のすべてを把握している私には答えが全部わかってる問題集解くより簡単。
午前中には机の上のファイル全部なくなったわ。

そして今、私は駅ビルの中のガレットのお店でランチ。
店の広い窓から見える空は雲ひとつなく晴れてる
なんで今晴れるかなあっ　なんで朝晴れてくれなかったかなあっ
いい　もう考えたってしょうがない

きたきた、私のお気に入りのそば粉のガレット。
あいつ　ちゃんとお昼食べてるかな
いやいやいや、あいつのことはいいっ。
テキト～にスーパーかどこかで買って　あっ　鍵渡すの忘れた！
合鍵はあるんだけど　場所を教える　手段がないっ
出かけられないんじゃない？　鍵閉められないから
いいっ　もういいっ　鍵開けたまま　出かけてもいいっ　どうでもいいっ
「コーヒーください」

この駅ビルって、いろいろな店が入ってるのねえ。
あるのは知ってたけど、こういうところでは買い物しないから見たことなかったわ。
あ？　このルームウェア、あいつに似合うんじゃない？
一組しか買ってないから着替え　いやいやいや　いらないっ
今日は雨が降ってたから　そう　雨よ雨

へえ、本屋もあるの。

本屋も大変よねえ、最近の本は売れないわよね、電子書籍になっちゃってるし。

で・・・

私はなんで「犬の飼い方」なんて本を見ているのかしら？

犬なんか飼ってないし飼うつもりもないし飼いたいと思ったこともない

疲れてるのかな 多分そうね あと24時間働けそうな気力はあるけどね

あ、ヘアサロンまであるの？

駅ビルでヘアカットする人なんているの？ いるからあるのよね。

私は表参道だけどね。

あいつの 髪の毛 ポッサボサに伸びて 前髪なんて目が見えないわよ

うっとおしいからかき上げて！ って言っても、またバサ〜ッと落ちてくるのよ。

ヘアカットに連れていけばいいのかしら・・・

いやいやいやいや 関係ないっ 私には関係ないっ あいつの前髪がどうだろうと関係ないっ

なんか 昼休みの方が疲れる・・・

会社に戻ろう！

「北川くん」

「はい」

彼、ううん、藤木部長。

「こっちの17ページのこの部分だけ」

もっと動揺するかと思ってた でも

「ここはこちらのルートを先に進めてから移行した方がいいと思います」

正直 頭の中になかったの

「なるほど、それがいいな」

考える余地もないっていうのおおおっ？

「それではこれで進めます」

「頼んだよ」

その笑顔は相変わらず素敵だけどね。

それどころじゃないのよおおおっ

女子トイレのドアを開けると、うちの部の女子社員が二人パッとこっちを見た。

「北川さ〜ん、今日はありがとうございますう」

その語尾を伸ばすクセやめてくれない？
「コピー何枚とればいいのかもわからなかったんですよ」
指示待ちするなっ 自分で考えろっ
「北川さんが出てきてくれてホントに助かりましたぁ」
あんたのためにやってるわけじゃないわよ
「あ、そう」
個室のドアをバンッ

「ねえねえ、それでどうするの？」
「だからぁカレシが拾ってきちやってえ」
どーでもいい会話をよく続けていられるわね
「うちのマンション、ペット禁止じゃん？」
「それじゃ捨てるの？」
「そんなのかわいそうだよお」
「でも、どうするの？」
そうよ、どうするのよ？
「カレシがもらってくれる人を探してみるってえ」
もらってくれる人？ 人間をもらってくれる人はいるかしら・・・
「昨日はねえ、すっごい汚れてたからぁ、シャンプーしてあげたのお」
「そんなことしたら手放しにくくなるじゃん」
そうよ、それは危険よ！
「でもお、きれいな方がもらってくれる人探しやすいじゃ～ん」
まあ確かに・・・ ペットはね・・・
「それにい、しつけもしておけばぁ、どこに行っても喜ばれるじゃ～ん」
しつけ・・・ どこに行っても・・・
なに考えてるの!?
仕事に戻ろう。

個室のドアを開けて洗面台で手を洗っていても、彼女たちはしゃべり続けている。
あんたらは何をしに会社に来てるのよっ！
「前の毛長くてえ、ヘアゴムでしばったら、ほら、可愛いでしょお」
鏡越しに見える犬の写真・・・
「あ、北川さんも見ますう？」
「けっこうよ」
バンッ
私も何を聞いてたのよっ!?

玄関を開けると

たたきがピッカピカ

シューズクローゼットの上の飾りスペースもメチャきれい。

あ 鍵が置いてある

そうよ、そのリヤドロの置物の裏に置いてたのよ 見つけたのね

まさかっ

エーーーーッ!?

靴がきれいに入ってる！ 磨かれてるしっ！

掃除の妖精さん？

「ねーちゃん、おかえり」

ニッコニコしてピョコタン走ってくるこいつだけどね こいつよ こいつしかいないもの

「え？ ねーちゃん、なんか怒ってる？」

怒ってない

「あ、俺さあ、スーパー行くときに鍵が」

「わかってる、見ればわかる」

「やっぱ怒ってる？」

「怒ってない」

あんたが謎なだけ

今夜は豚の生姜焼き。

キャベツの千切りって、ふつうの人はふつうにできるの？ 私はできないけどね。

こいつはできるらしいけどね てか できてるけどねっ

なんなのこいつの家事能力ハイレベルっぷり？

理想のお嫁さん NO.1 的な？

なのに なぜ ホームレス？ わからない まったくわからない

訊いたら謎が解けるんだろうけど、訊いたら深く関わっちゃうことになりそうで 訊けない

「ねーちゃん、疲れてんのか？」

「なんで？」

「黙ってっから」

頭の中ではしゃべりっぱなしですっ

「疲れてないわよ」

「仕事してきても疲れてねえの？」

「そうねえ・・・ 仕事そのものは疲れないわね、くだらないことで疲れるけど」
ていうか・・・

あんたのことでメチャ疲れてるんだけどおおっ

「ねーちゃんの仕事って、どんなことすんの？」

「どんなことって、海外事業部で・・・ まあ、いろいろ」

「なんかむずかしそうだなあ、ねーちゃん頭いいもんなあ」

私には仕事より、このキャベツの千切りの方が一億倍難しいけどねっ

「あんたは・・・」

いや、やめよう、どんな仕事してきたとか、関わらない関わらない関わらないっ

「なに？」

「なんでもない」

「なんだよお、なに？」

「なんでもないっ」

「なんだよお、言ってくれよお」

だからあっ なんていうかあっ そんな顔近づけないでよっ

あ！

「ちょっと待ってて」

ドレッサーの引き出し開けて・・・ あった！ ピンクだけど いっか

「動かないでよ」

「うん」

あいつの前髪まとめて・・・

「プッ・・・」

あの女子社員の犬みたい！

「なんで笑うんだよお」

って言いながら、あんたも笑ってるじゃない

「鏡見てきて」

あいつはヒョコタン走ってバスルームへ

「ブァハハハハハ」

笑い声が聞こえて 笑いながら戻ってきた

「ねーちゃん、なんだよこれえ」

「あんたの前髪ウザイんだもん」

「俺ずっとこれつけてればいいの？」

あ

目が合っちゃった

初めてまともに 目が合っちゃった

これは……

「ダメだ、はずす」

ヘアゴム外したら あいつの前髪がバサッ

「ねーちゃん、俺で遊んでんだろ」

笑ってるけど？

私は笑える気分ではないっ

イン

お風呂上りの天然発泡ミネラルウォーター ああ！ スッキリするう！

あいつは今お風呂

たしかにね たしかに

夕食終わって、あいつが全部片付け終わって・・・ 出ていかせることはできたわよ。

もう雨は降ってないんだから。

でも私ね 「お風呂に入ってくる」 って言っちゃったの。

入りたかったからだけどね。

でもね、私がお風呂に入っちゃったら、あいつどうするの？

黙って出ていく？ 行ける？ 行ってもいいんだけどね。

それにねえ・・・

夕食作ってもらって後片付けまでさせた後に、出ていけって言える？

言ってもいいんだろうけど、全然言ってもかまわないんだけど、

それって、人としてどうなの？ って思っちゃったのね。

思わなくていいんだけど思っちゃったんだからもうしょうがないじゃない。

だから、お風呂から上がったと言おうって・・・

「あんたも入ってきなさいよ」 って言っちゃったの

言う言葉間違えた。

間違えたけど、言っちゃったんだからもうしょうがないじゃない。

だから今あいつはお風呂に入ってるの。

しょうがない、今日はしょうがない！

朝「あんたは留守番！」 って私が言っちゃったんだから。

どしゃ降りだったからだけど、今はもう降ってないけど。

まあいいじゃない！ あと一晩くらい。

そうよ、あと一晩くらいならいいわよ、そうよ、それよ。

ソファの前のローテーブルの上に スーパーの小分け袋

千円札3枚と小銭とレシート。

渡したのは5千円、それでこのお釣りの多さってなに？

レシート見るとね、私はレシートもらっても捨てちゃうけどね、経費で落とせるもの以外はね、

経費で落とせるものはレシートじゃなくて領収証書いてもらうけどね。
それはいいのよ、そうじゃなくて、
値引きって欄があるのよ、なに？ 昨日のにもあったのよ。
これって、値引き商品てこと？ そうよね？ なにそれえええっ
買い物上手の主婦かよっ!?

なんなのこの、あいつの、主婦の鑑大賞的なスペックはっ!?

あ、バスルームのドアが開く音
あいつがヒョコタンキッチンコーナーに入っていくのが目の端に
水道から水出して
「ちょっと！ グラス使いなさいよ！」
手ですくって飲むって犬じゃないんだから！
「あ、もう飲んじまったから」
それはなに？ 洗いものをひとつでも減らそうという主婦の知恵？
ちがうちがうちがう！ ホームレスだからよ！ ホームレスなのよ！
ホームレスはグラス使わないのよ！

「ねーちゃん何やってんの？」
ローテーブル挟んで床に座ってノンキな顔して聞くけどさっ
私は一人でここで葛藤し謎と直面してたのよっ
「ポーッとしてただけよ」
「ねーちゃん、ポーッとすることあんの？」
「ハ？」
「ねーちゃんていつもなんか考えてるみてえだからさあ」
おもしろそうに笑ってるけど？
あっんたっに 私の何がわかるのよっ!?
たしかに？ たしかに今はいろいろ考えなきゃいけないくて？
そのいろいろ考えなきゃいけない原因は あんただっ
「あんたは何やってたのっ？」
「俺？ 風呂入ってた」
いやいやいや、それじゃなくて
あれ？ 訊いていいの？ この、掃除の妖精さんの、主婦の鑑の秘密？
訊いたら深く関わることになっちゃわない？
「なに？」
「え？ なになにによ？」
「ねーちゃん俺の顔見てなんか言いたそうだから」
言いたいわよ、言いたいつていうか訊く？
あ 訊いてもいいんじゃない？ だって、どうせ今晚で終わりなんだから。
深く関わることなんてないじゃない、そうよ！

「あんた、なんで掃除や料理がうまいの？」
「え・・・」
な、なに？ その、秘密の扉を見つけられてしまった的な顔？
やだ、なに？ そんな溜める？
「えっと・・・」
あ、やっと声出した
「職業・・・訓練」
ああ！ そうなの！
なんだそれか！ 訊いてよかった！ 謎が解けた！ スッキリ！
「院の・・・」
「イン？ インてなに？」
「あ・・・少・・・年 院」
ショウネンイン？ しょうねんいん・・・ しょう・・・ えっ
「しよっ 少年院っ？」
うなづいたまま 下向いちゃってるけどっ
「少年院で・・・ 未成年が罪を犯して入れられる・・・ 少年院？」
下向いたままコクンてっ
「あんたっ、何やったのっ？」
あいつはチラチラ私を見るけどっ
無言？
「言いなさいっ！ 何をやったのっ？」
なんだか私、犯人を自白させる刑事みたいな気持ちよっ
「言えっ！」
白状しろっ！
「きよ・・・恐喝・・・窃盗」
なんだとおおおっ!?
「バツカじゃないっ!？」
うなだれたまま頷くなっ
「なにやってんのよっ、あんたはっ！」
だからっ うなだれたまま頷くなっ
「二度とやらないでよっ！」
「え・・・うん・・・ もう・・・ やんねえ・・・」
蚊の鳴くような声で言うなっ
「約束できるっ？」
「え？」
「私にっ！ もう二度とやりませんで、約束できるかって訊いてるのっ！」
「あ、う、うん」
口約束だけじゃ信用できないっ
「小指出してっ！」
「え？」

なにその怯えた顔っ

「小指っ！ こうやって！ 出せ！」

あいつが震えた手を出した小指をガシッと私の小指でつかんでやった！

「指切り！」

「へ？」

「約束やぶったら、本当にマジでっ 針を千本！ 飲ませるからねっ！」

本気よっ！

前髪の間から私を見ているあいつの目には・・・

きっと今の私の目は鬼みたいに見えているでしょうよっ！

「約束したからねっ！」

バツとあいつの指を放してやったわよ

「ねーちゃん・・・」

「なによ？」

「あの・・・俺・・・」

なんだか 察した 察してしまった

こいつが 何を言おうとしているのか

「あ！ そうだ！ ちょっと待ってて！」

私はベッドルームの中から

「これ！」

あいつにグイッとショッピングバッグ押しつけた

「あんた、着替え、ないでしょ？ イヤなの、私の部屋で汚い恰好されるの」

あいつがポカンとして

中からルームウェア出して

驚いた顔して 私を見上げたけどっ

イヤなのっ

罪悪感抱えたまま ここから出ていかせるのは

それだけよっ

ハンバーグ

誰か吉田を殺してくれないかしら。

殺さなくてもいいから永遠に眠らせてくれないかなあああっ。

名前だけ！ だとしてもっ？ いちおう？ 主任でしょ！

「だ～って俺の企画じゃないからさあ、そんなこと聞かれてもわかんないんだよねえ」
って、よく恥ずかしくなく言えるわねっ、私だったら拷問されても言わないけどねっ。

今だって、あのトイレの、トイレのじゃないけど、女子社員つかまえて、

「ここ間違ってるじゃないか！ おまえのせいで課長に叱られたんだからな！」

小学生かよっ!?

あの女子社員も、米つきバツタみたいに頭下げてんじゃないわよ！

半泣きで戻ってきたから、「ちょっと貸して」って書類取り上げたわ。

「主任」

ニ～ッコリ笑って吉田の前に書類出して

「ここ、主任の判が押してありますよね」

トントントンと爪で「吉田」の文字を叩いて

「ということは、主任が確認したってことですよね」

「ま、まあ、それは形だけで・・・」

「形だけ！ でも、主任は主任！ ですから、判を押した以上は主任の責任ですよっ」

吉田が上目遣いで恨めしそうに見てるけど

「しっかり確認してから判を押していただかないと、私たちも困るんですっ。

仕事が止まってしまうんですっ。わかります？ しゅ・に・んっ！」

吉田が真っ赤な顔してうなずいた。

ハンパなことやってるんじゃないわよっ！ むしろおまえは何もするな！ 判も押すな！

そこに黙って座ってろ！ 置物みたいにねっ！ てか、置物になれ！

私の企画はジャマさせない！ 絶対にねっ！

ランチ行こう！

今日は軽めにおろしそば。

夕飯はハンバーグだから。

そう、今夜のメニューは決まってるの。

今朝、なんとなく訊いてみたのよ。

「あんた、ハンバーグって作れる？」って。

「え？ あ、うん」

「ハンバーグよ？ あの、ひき肉とか玉ねぎとか入れてこねる、あれよ？」

「うん」

あたりまえみたいに「うん」で言うのね・・・ クラッときちゃった。

玉ねぎみじん切りにして炒めてとか、なんか、いろいろ入れてこねて・・・

ムリッ 私にはムリッ

「なんで？」

なんでって、ただちょっと聞いてみただけなんだけど・・・ あ！

「食べたい」

「え？」

「今日の夕食、ハンバーグにして」

キョトン そうでしょうね そうでしょうけど

「作って」

なに？ なんでジッと見てるの？

「なによ？」

「え、あ・・・」

「めんどくさい？」

「あ、いや、ぜんぜん」

全然・・・

ハンバーグ作るのが全然めんどくさくないなんて私なら拷問されても言えないっ

「それじゃ、そういうことで」

あ、お金

「今日の分は・・・」

「あ、昨日の残りでできっから」

なにその・・・ やり繰り上手!?

会社ではけして感じたことのない敗北感を自分の部屋で感じ続ける私ってなに？

「それじゃ」

「あ、あの、ねーちゃん」

「なに？」

「あの・・・ ありがとなあ」

「何が？」

あいつが私のこと見て 何か言おうとしてるけど

何を言いたいかは だいたいわかるから

聞ってるヒマはないのよ

会社に行かなきゃ！

ボタンと玄関ドア閉めた。

私は どうしたいんだろおおお
どうするつもりなのおおお
でもね・・・

あいつは、自分が少年院に入ってた前科、前科って言うていいの？ まあ前科よね。
それをメチャ負い目を感じてるのよ、突き刺さるんですけどっ！ くらい感じるもの。
確かに、犯した罪は償わなきゃ。 少年院に入って償ったんでしょけど、
それでチャラではないわよ、確かにそう。
だけだね、その負い目を感じたまま生きるってどうなの？ まだ20歳でしょ？
前に進んでこそその償いじゃないの？
あ？ ちょっと待って・・・ あいつは・・・ ホームレスだあああ
ホームレスがどうやって前に進むのおお？
進むも何も穴に落ちちちゃってるわよおお。
だからって私に何ができるの？ いやいやいや、何もする義理はないわよ。

あ、トイレ行こう、膀胱炎になっちゃう。

誰か入ってきた。
「なんかさあ」
あの女子社員たちか。
「あの子、頭に手を置こうとするとビクッとするんだよねえ。
もしかしたら、叩かれてたのかもしれないえ」
犬の話してる暇があったら仕事覚えろよっ
「だからねえ、NETで調べたのお」
そんなこと調べる暇があったら仕事を覚えろっ
「ビクッとするからって、触らないようにしてたらいつまでも怖がったままなんだっ
てえ」
触らないようにしてたら？
「だからあ、叩かれるうっから撫でてもらえるうって覚えさせればいいんだってえ」
あんたは仕事より犬のことに一億倍詳しいわね
「こっちがビクビクして触らないのは逆にい？ 前に進めないじゃ～ん？」
前に・・・？
「でも、そんなことしてたら、ますます手放せなくなるじゃない？」
そうよ
「今やってあげられることしたいじゃ～ん？ 次に飼ってくれる人のためになるしい」
この子は・・・ まあいい！

ボタンと個室のドア開けて、洗面台で手を・・・
「あ、北川さ～ん！ 今朝はありがとうございますあ」
「何が？」
「北川さんが吉田主任に言ってくれて嬉しかったです」
あんたのために言ったんじゃないわよ
「あ、そう」
ドアを開けて振り向いて・・・
「あのね」
「は、はい」
「あなたはある意味能力があると思うわよ」
「エッ？」
仕事じゃないけどねっ
ボタンッ

玄関を開けたら
はい きれい！
毎日掃除するのね、私は彼が来るときだけだったわ
「ねーちゃん、おかえり」
ヒョコタン走ってくるけど、昨日走ってきた顔とちょっと違うわよ

手作りのハンバーグを、ここで、私の部屋で食べられるなんて思ったこともなかった。
なにこのフワッフワ感？
どうすればこんなことができるの？ 知りたくはないけど、興味ないし作らないけど
「美味しい！」
「マジ？」
って笑う顔もヘンよ
まあ・・・ だからって、私にできることなんてないし義理もないし

ベッドルームに入って・・・ あれ？
さっきも帰ってきてここに来て急いで着替えて・・・ 気づかなかった

これは なに？

私のベッドの上に きれいにたたんで置いてある 私のブラとパンティ

あいつだっ

まずっ 私の部屋には入るなど言ってたのに入った！

そして 私のブラとパンティを・・・
た、たしかに、溜まってたわよ洗濯物
いつも週末に洗うのよ だけど 先週はあいつを探したりいろいろで・・・
だからって 私のブラとパンティ洗うかなあっ
洗うだけじゃなくてっ こんなにきれいにたたむっ？ 触ったってことよね！

あいつーっ！

ドアをバンッと開けたら、あいつがビックリした顔でこっち見たけど？

「おいっ！ 前科者！」

フリーズ

「おまえはまた禁を破ったな！」

フリーズしたまま前髪の間隙から見える目だけキョトってるけど？

「私の部屋に入るなって言ったでしょ！」

目だけ「あ！」になってるけど？

「おまえには前科がある！ 私が熱出したときも入ったでしょ！」

銃殺刑にされる直前の目ってこんなカンジ？

「おまえには余罪があるっ！」

もう立ったまま死んでる？

「私のブラとパンティ 触ったでしょ！」

脳死？

「助かるけどね」

脳死してるから何言ってるかわからないのね

「溜まってたから、洗濯物」

ポカンと口だけ開いた

「ありがとう ぜ・ん・か・も・の」

あいつが瞬間解凍された

「ねーちゃん！」

「なによ？」

「前科者です」

爆笑！ ふたりでね！

アイス

抜けるような青空！

ショッピングしたり、海辺に出かけたり、ドライブするには最高の土曜日。

私はリビングのローテーブルの前に座って工作中・・・

来週からはもっと本格的に動いていくから、動かさなきゃいけないから、動かすためには、吉田のせいで遅れてる分を、月曜日までに仕上げなきゃならないのっ。なんで休み返上で私がやらなきゃならないのよっ!? 暫定主任補佐の私がっ!? 吉田にはできないからよっ。他の社員たちも細かい部分になったらお手上げ。しかたない、この企画を成功させるためよ！ 私のためよ！

ン？

あいつがキッチンから四つん這いになって顔だけ出してこっち見てる・・・

「なにしてるの？」

「ねーちゃん仕事してっから、ジャマしちゃダメだなあと思って」

「ジャマじゃないわよ」

「でも音立てっとさあ」

「ああ、ぜんぜん大丈夫。会社でも人がワチャワチャした中でやってるから」

「マジ？」

「はいはい、マジマジ」

ここを1個外す？ そうね、その方がスムーズに動くわ。

「そんじゃ、掃除してもいい？」

「いいわよお」

よし！ 正解！ これで動く！

掃除してもいいとは言ったけど

掃除機か・・・

いいけど

リビングに敷いてあるラグ

掃除機ってそうやってかけるの？ グイングインの往復じゃなくて一方向？

あ、どうしよう、ここにいたらジャマよね

PC 持って 立ち上がって どこにいたらジャマにならないのかしら

「ねーちゃん、いいよ、そこは後でやっからさあ」

いやいや二度手間になるでしょ

「いいからやって」

「ごめんなあ」

「いえいえ」

なんか 私 ジャマ？

私がない方が掃除がはかどる？ WiFi 繋がるカフェに行った方がいい？

いやいやいや、待て。

ここは私の部屋よ、私が出て行ってどうするのよ、そうよ。

「もういいよ」

「はい」

なにこれ？

めんどくさいっ

メインの大きいのはいいんだけど、この縦を計算して打ち込むだけの作業がめんどくさいっ

単純だけど細かい作業って苦手！ 必要なのはわかってるんだけど苦手！

ああ、疲れる！

ちょっと休憩！

ソファにゴロ～ン

ローテーブルで仕事していると腰が痛くなるのよねえ

ハアアアア ポカポカして 気持ちいい・・・

サ ト

ミ サ ト

え・・・ わたし・・・ なまえ・・・

ミサト

え？ なに？

目を開けたら

ダーーーーン！

なにこの音？　なに？
あいつが　ソファの真下の床に　倒れている？
「ちょっと！　大丈夫？」
「あ、うん」
「どうしたの？」
「あ、ちょ、ちょい、スッ転んじまって」
「大丈夫？」
「あ、うん、なんとも、うん」
なにその　そそくさ感？

目が覚めちゃった。
もう3時か。
こういうときは・・・
「アイス食べた～い！」
「あ？　買ってくつか？」
「違う！　スーパーやコンビニのじゃダメなの」
「ア、アイスは・・・　俺、作れねえなあ」
作らなくていいっ　アイスまで作られたら　私　女としての絶望から抜け出せなくなるっ
「そうじゃなくて、部屋で仕事していると、無性に食べたくなるアイスがあるの」
「場所教せえてくれたら、俺、買ってくるよ」
「ちがうの、そこに行かなきゃ食べられないの」
「どこ？」
「ローマ、イタリアのローマ！」
「えっ」
あいつの驚いた顔が　笑える！
「ウソ！」
「なんだよお、ねーちゃん、俺のことからかったのかよお」
ねーちゃん・・・ねえ
「ここから歩いて5分くらいのカフェにあるの」
「そんな近けえんなら、すぐ食べんじゃん」
「行こ！」
「あ？」
「あんたも行くの！」
「お、俺も？」
「なによ、アイス嫌い？」
「イ、イヤ、そう・・・じゃねえけど・・・　あの、ねーちゃん、いいの？」
「いいのってなに？」
「あ、だから、あの」

「前科者と出かけることか？」

あいつが頭掻いて笑って

「行きてえっス」

「よし！」

晴れの日の夕方って気持ちいい！

あいつはキョロキョロしながらヒョコタン私の横を歩いている。

犬の散歩って こんなカンジ？

いやいや、犬ではない

「あ！ ここ曲がるのよ！」

真っ直ぐ行こうとするあいつをグイッと

あ 手を つないじゃった

どうする この手？

パッと離したら ちょっとかわいそうだし だからといって つないだままって

あ！ あれだ！ ほら、犬を散歩させるときの、紐みたいなの？ あれよあれ！

それにこいつ、脚が悪いから、なんていうの？ 介護的な？

なんで私がこいつの介護しなきゃいけないのよ？

って思っているうちに着いた、よし、ホッ

窓辺の二人席。

あいつは店の中をキョロキョロ見回してる。

「どれがいい？ 好きな選んで」

メニューを渡すと、あいつが真剣な顔してジューッとメニューを見ている見続けている。

「ねーちゃん」

「決まった？」

「これ・・・ なんて読むんだ？」

あ！ そうか！ こいつは字が・・・ カタカカナもダメ？

「これ」

珈琲

そこ？ そこに引っかかったの？

「コーヒー」

「へ？ これ、コーヒーっつうの？」

うん、そうだけど、そこじゃなくて、アイスなのよ

「俺、一生書けねえ」

あんたがその字を書く機会なんて一生ないと思うし、正直私だって改めて書けて言わ

れたらムリ

「アイスはどれがいいっ？」

あ、またあいつが、おそらく、肩間にシワ寄せてメニュー見てる。

「ねーちゃん」

今度はどんな字を発見したのっ？ 薔薇かっ？ 私も書けないわよっ。

「わかんねえ」

ハ？ えっと・・・

「あんた、カタカナは読める？」

「うん」

そう、ひらがなとカタカナは大丈夫なのね、よかった。

だったらわかるでしょ！ アイスの種類はカタカナで書いてあるわよ！

「何がわからないのっ？」

「いっぱいあり過ぎてわかんねえ」

そこ？ 今度は そこっ？

バニラでいいんじゃないっ！ て言いそうになったけど、それはかわいそうだからやめておく。

そうねえ

「私が好きなのは、ショコラカフェと、ベリーストロベリーと、ビスタ・・・」

ええええっ 好きなものいっぱい過ぎるううっ

「ねーちゃん」

「なに？」

なにその、手を合わせてお願いポーズ？

「私に決めろと？」

うんうん・・・か

「あんたの好みは？ チョコ系とかフルーツ系かナッツ系とか、どれ？」

あ ああああ 今度は斜め上向いて考えはじめちゃったよお

「わかった、2種類頼むから、見て決めて！」

はいはい、深々と頭を下げる・・・と

「すみませ〜ん」

奥のスタッフさんに手をあげた。

こういう店で、向かい合わせで座っていると・・・ 何を話せばいいのかわからない。

家にいるときは、なんかテキト〜に話してたし話さなくてもなんてことないし。

ここが禁煙じゃなかったら、煙草吸ってたら間がもつんだけどなあ。

「ねーちゃん」

「え？ なに？」

「俺・・・さ・・・・・・・・・・・・・・・・」

なに？ なにこの 長ーーーい 間？

「あの・・・ やっぱ・・・ 出た方が、ほうがっつか、出てかなきゃ・・・だよな？」

今度は そこ

「だよなあ、へへ、何言ってんだよなあ」

「バカじゃない？」

「え？」

「まだアイス来てないわよ」

「や、あの」

「注文したのに出ていっちゃったら、お店の人困るでしょ」

あいつがどういう顔してるのか 知らないけど

「私はアイスが食べたいのっ」

あいつのこと睨みつけてやったら

前髪の間隙から見える目は 私を見ていて

「私にアイス食べさせないと、珈琲って漢字 100 回書かせるからねっ」

あいつの口元が緩んで

「ねーちゃん」

「なによっ？」

「俺、ぜってえ書けねえ」

「でしょうね」

なんか

ふたりで笑っちゃった

笑ってていいのか わからないけど？

どっちもどっち

「うおおおおっ！」

私は アイスを食べて うおおおおって声出す人を 初めて見た

「うんめええ！」

そこまで感動してもらったらお店の人も喜ぶと思う

「あんたは、いつもどんなアイス食べてたの？」

「いつもは食ってねえけど」

あ、そうよね、ホームレスがアイス食べてるなんて見たことない・・・てか興味なかったし。

「昔は・・・ あれ、あの、あ、ガリガリ君」

そう、ガリガリ君

ここは裏に工房があって、アイスはすべて手作り、しかも厳選した材料のみ。

ガリガリ君とは違う、全然違う。

「ねーちゃんが好きなのってこれ？」

そう！ そうなの！

あいつの前にはショコラカフェ。

チョコレートに少しコーヒーがブレンドされてて炒ったコーヒー豆の粒とチョコレ

「ちょっと！」

あいつがへへって顔してスプーンくわえてるけどっ

「今食べたでしょ！ 私の！ あ！ 苺丸ごとの部分！」

「うんめえ」

こいつーっ

「ねーちゃん、イチゴ好きなんか？」

そうですっ！ ベリーストロベリー！ 苺のコンポートが丸ごと入っているんですっ！

「好きよ」

そして

「こっちのもねっ！」

あいつの前のショコラカフェをガバッとすくって食べてやったわよ！

「ハハハ、ねーちゃん、ガキみてえじゃん」

「あんたでしょ！ 先に私の食べたのあんたでしょ！ ガキはあんたでしょ！」

「やっぱガキかなあ」

「そうよ！」
「ねーちゃんから見たら・・・」
え？
「やっぱ、俺・・・ ガキかな」
「そうよ、だって・・・」
20歳で・・・ 6歳も下で・・・
「まだ20歳でしょ！」
「だよなあ」
情けな〜く笑ってる口に・・・
丸ごと苺コンポート突っ込んでやった
「美味しいでしょ、ガ・キ」
あいつが私のこと見て・・・
「うめえっス！」
って笑ってるけど
あんたも相当・・・
「うまいわね」
あいつの前のショコラカフェすくって食べてやった。

仕事です。
自分の部屋に入った途端、仕事モードになっちゃう私ってどうなの？
あいつは掃除モードみたいで、お風呂かトイレか、あっちで何かやってる。

どっちもどっちよね いろいろ

ここはこのままでいいとして・・・ こっちをもう少し・・・
「ねーちゃん」
「なに〜？」
そうね、もう少し具体的な・・・
「晩メシ、何食べてえ？」
「え・・・ ん・・・ あんただけ適当に食べていいわよ」
具体的に・・・となると・・・
「ねーちゃん！」
え？ な、なに、大きな声で・・・
「なに？」
「ねーちゃん、ちゃんと食わねえとよ、昼も食ってねえじゃん」
「ああ、そうだった」
「ねーちゃん働いてんだからよ」
まあ・・・ ここに座ってるだけだけどね、肉体労働してるわけじゃないけどね

「ぶっ倒れちゃうぞ」

「ああ、大丈夫、何回かあるのよ、土日に仕事して、日曜の夜にクラッときて、

なんだろうと思ったら、2日間何も食べてなかったの、食べるの忘れちゃうのよね」
笑ってる私のこと見て、あいつがこの世の終わりみたいな顔してるんだけど？

「どうしたの？」

そして、何かを決意したような顔になったんだけど？

そして リビングからいなくなった

なに？

いいけど。

えっとね・・・

今のこの状況をどう説明すればいいのかなあ

あいつが私の横に座ってるのね

それでね おにぎりを小さくちぎる？ 一口大っていの？

私の口元に持ってくるのね

いちおう？ 口開けるわね？ 突っ込むのよ 突っ込まれるから食べるわね？

そしてまた・・・

「ねえ」

「ン？」

「なにこれ？」

「にぎりめし」

いやいやいや、それはわかる そうじゃなくて

「なんでこんなことしてるの？」

「こうすれば、ねーちゃん食うかなって」

食ってるけどっ そりゃ口にグッと押しつけられたら食べざるをえないでしょっ

「あのね」

「あ、水？」

間に飲み物をくれってことじゃなくて

「だからっ」

えっ メツチャ真剣な顔なんだけど

「わかった、食べる、自分で食べる」

「信用できねえ」

ハアアアアアッ!?

「ねーちゃん、食うの忘れるっつってたじゃん」

言ったけどっ そうだけっ

「いいから、俺が食わすから、ねーちゃんは仕事してていいから」

気が散って仕事にならないんだけどおっ？

「俺、ちゃんと食わすから」

あ メツチャ マジな顔おおお

もういい！ こんなことに時間取られている場合ではない！

ここは・・・ あ、このままでいいわね、こっちを
グイッ

あ、はいはい 食べますよ

「ゲホッ」

口元にグラス はい、飲みました

あいつを見ると 真剣っっな顔して うんうんて頷くけど？

はい、仕事しますよ、食べますよっ

なんかわかんないけど

まあいいっ

日曜日

ん・・・ 明るい・・・ え・・・ 朝？

朝だ

ゆうべお風呂に入って・・・ そのあとも仕事して・・・ ちょっと休憩って・・・
あのまま寝ちゃった 家で仕事したときあるあるだ
顔洗ってコーヒー飲んで続きやらなきや
あれ？ これ、あいつの、いや、あいつに貸してる毛布・・・
あいつがかけたの？ そうよね、気づかなかった
え？ 私、けっこう遅くまでやってたわよ、照明もこのスタンド・・・ あ、消えてる
あいつが消した？ そうよね

そ〜っとキッチン覗くと
あいつが隅っこでダンゴムシみたいに丸まって寝てる
寒かったんじゃない？ キッチンの床で毛布なしで・・・ あ、ホームレスだ、そうだ。
でも・・・ね
そ〜っと毛布かけて バスルーム 顔洗わなきや

あいあうおああ？
いやいや、歯を磨きながら言わなくていい
間に合うのかなあ
ちがう、間に合わせるのよ！ 絶対に！

そ〜っとキッチンに入って、できるだけ音を出さないように・・・って、なにやってる
の私？
自分のキッチンなんだから、気を使わなくても・・・ でもねえ・・・
こいつ、何時まで起きてたの？ 先に寝ていいって言ったわよ？
こいつも「おやすみ」ってキッチンに行ったわよ でも 爆睡 遅くまで起きてたな
こいつ
まあいい、仕事！

なんていうかさあなんていうのっ？
なんでこんなところがこんなにグッチャグチャになってるのよっ!?
吉田だっ あいつが余計なことしやがってこんなにしちゃって放り投げたなっっ
吉田のことはいいっどうでもいいっ
やらなきゃ!

私は今、 仕事しながらランチ食べてま〜す。
食べてるっていうか、食べさせられてま〜す。
デパ地下の試食みたいに小っちゃ〜く切ったサンドイッチを口の中に入れてま〜す。
そして、間にコーヒー飲まされてま〜す。
チラッとあいつを見ると真剣な顔でうんうんて頷くのよ。
まあ こいつなりに？ 手伝ってるつもりなんでしょうね。
「ごちそうさま」
ホッとしたみたいに笑って、空になったお皿持って退場。

よしよしよし、ほどけてきた！
それにしても吉田のやつっ こんなにするかなあっ
てか こんなところをこんなにしちゃう意味がわかんないっ

「あ・・・の・・・」
ん？
リビングの隅から顔だけ出してる・・・けど？
「なに？」
「あのお・・・ 布団・・・ 干してっかなあ？」
布団？
「あと、シーツとか洗ってえんだけど」
シーツ？
「ねーちゃんいねえときに入っと叱られっからさあ」
私がないときに入ると？
あ！ 私のベッドの布団とシーツ？
「天気いいからさあ」
布団は布団乾燥機使うし、シーツ類はクリーニングに出すけど？
・・・って説明するのもめんどくさいっ
「好きにして」
「マジ？」
嬉しそうにホイホイ私の部屋に入って行くけど？
「ちょっと！ 今日だけだからねっ！ 特別だからねっ！」

「うん！」

声が弾んでるけど？

なぜ布団干したりシーツ洗うことがそんなに嬉しい？ 私にはわからない 永遠につ

また出た！ 縦の計算・・・ めんどくさいっ

他の部分に比べたら作業は簡単だけどね、めんどくさいっ

ああもう ちょっと休憩

このソファには・・・ 睡魔が・・・ 棲みついて・・・い・・・る・・・

サ ト

ん・・・

ミ サ ト

ミサト

やっぱりか・・・

左手バンツてあげたら

「テッ！」

あいつが頬っぺた押さえてうずくまってる

「どうしたの？」

「な、なんでもねえ」

「大丈夫？」

「あ、ぜんぜん、ぜんぜん」

頬っぺた押さえながらベランダの扉開けて外に・・・

やっぱり おまえか

昨日もだよ

まあいい それどころではないっ

で き た！

ファイル閉じて ノートブック閉じて

「ヤッ ターーー！」

「ね、ねーちゃん？ どした？」

あいつがキッチンから飛びだしてきたから

「終わったー！」

「マジッ？」

うんうん、マジマジ！

「ねーちゃん！」

あいつが嬉しそうな顔して両腕広げるから

「できたー！」

って飛び込んで あいつの首に

あれ？ なんで 私 こいつと ハグしてるの？

えっと どうすればいいんだ？

「ねーちゃんががんばったなあ！」

今だ

あいつの首にまわしてた腕を離して

「やっと 終わりましたっ」

え なに？ なんで 頭に手？

「ねーちゃん、がんばったなあ」

なぜ撫でる？

「すげえがんばってたよなあ」

そして なぜ 私は

「頑張ったよ・・・ 私・・・」

泣いてるの・・・

「私・・・ 頑張ったよね・・・」

「うん」

なんであいつの腕の中で 泣いてるのよ？

気がゆるんだのよ だって

「お腹空いた」

「あ！」

「あっ・・・って、作ってない？」

「え、あ、作ったんだけど」

ダイニングテーブルの上には・・・

小人さん用？ くらいミニミニおにぎり

もはやつくねじゃね？ くらいミニミニハンバーグ

ミニトマトと小さく切ったブロッコリーのサラダみてえの

「ねーちゃんの仕事、夜までかかんのかなあって思って・・・」

これを私の口に放り込もうとしていたわけだ

「はい」

私は口開けて

「え？」

「ほら、入れてよ」

あいつはニ〜ッコリして、ミニミニハンバーグを私の口に入れた。

「美味しい！」

「マジ？」

今日はちゃんと嬉しそうな顔ね。

名前

デスクトップ起動。

USB からファイルを移動して、プロジェクトメンバー全員に一斉送信。

沈黙 ファイルを開ける 見ている そして

おおおお という声が一斉に漏れる

それぞれがキーボードをたたき始める

ヤッ タ！

動いてる動いてる！

金曜日のあきらめモードが一転しているわ。

「あのお」

え？ あ、トイレの、トイレのじゃないけど、あの女子社員。

「なに？」

「私が言っているのかああ」

何か言いたくて来たんでしょ！

「いいわよ、なに？」

「この計算・・・ 数字があ、なんかあ違わないかなあと思ってえ」

書類を指さすその指の爪・・・ なにこれ、犬の、なんだっけ、あ、肉球模様？

「さっきい、吉田主任にコピー頼まれてえ、ちょっと見たら、あれ？ って思ってえ」

爪はどうでもいい

「なにが？」

「この数字ですう」

あ、縦の・・・

たしかに間違えてる、間違えたああっ！

「あなた」

名前なんだっけ？

胸の名札・・・

「いぬやまっ？」

「大山ですう」

「あ、ごめんなさい、ちょっと目が疲れてて」

あんたが犬の話ばかりしてるから

「大山さん、どうしてわかったの？」

「え？ 縦の数字をズ〜ッと見て行ってえ、あれ？ って」

すごい・・・

「ありがとう」

「いいええ」

肩をキュッてあげて去っていった。

なにごと得手不得手はあるのね。

修正してみんなに送らなきゃ。

私はね、どんなに忙しくても、どんなに仕事に夢中になっても、

トイレだけはちゃんと行くようにしているの。

前に膀胱炎になっちゃって熱まで出て酷い目に遭ったから。

「名前つけちゃったの？」

あ いぬやま・・・じゃなくて大山コンビが入ってきた

「だってえ、名前ないとかわいそうじゃ〜ん？」

「でも、名前つけちゃったら、新しい飼い主が困らない？」

「それはあ、この子はこういう名前ですけどお、変えてもいいですよでいいのよお」

犬が混乱するわよ

「ワンちゃん混乱しない？」

そう！ そのとおり！ あんたの名前は憶えてないけど

「大丈夫だよお、それよりい、ひとつの存在として扱ってあげなきゃかわいそうじゃ〜ん？」

ひとつの存在として？

「あなたには名前があってえ、あなたはあなたなのよおっていうかあ」

言っている意味がわからない

「ロンロン〜と呼ぶとねえ」

ロンロン？ なんだその名前はっ

「ボクですか？ みたいに振り向くのお、嬉しそうにい、存在を認めてもらったみたいなあ？」

存在を認める・・・

いやいやいや、なに聞いているのよ私も、忙しいのよ。

個室のドア開けて、洗面台で手を洗い・・・

ドアを開けて・・・

「大山さん」

振り向くと、ビクッとして私を見てるけど

「ちょっと来て」

恐怖で瞳孔開いてるけど

「は・・・は・・・い・・・」

知ったことではないっ。

私のデスクの横に、ガッチガチの大山が立っている。

「あなた、エクセルは使える？」

「は、はい、事務なのでえ」

「それじゃ、計算はできるのね？」

「は、はい、事務なのでえ」

「あなたを私の助手にする」

言葉が理解できない？

「このプロジェクト限定だけど、この縦の計算をまかせたいの」

「エ？ エー——ッ？ わ、わ、わ、私、事務なんですけどお」

「だからなに？」

「プ、プロジェクトの中身にかかわれないっていうかあ叱られるっていうかあ」

「あなたには能力がある」

縦の計算のね

「エッ？」

「私が責任持つ」

「エッ——ッ？」

「ちょっと一緒に来て」

「は・・・はい」

藤木部長の前。

「そうか、北川くんがそこまで言うのなら許可するよ」

「ありがとうございます！ 責任は私が持ちます！」

「責任は俺が持つから、思ったようにやってくれ」

そう言って微笑む顔は相変わらず素敵です。

横に突っ立っている

「大山さん！ 頼むわね！」

「ハイッ！」

少女マンガの女の子が両手グウにして口元あててウルウルって、本当にあるのね。

玄関を開けたら・・・

なんだろう？ 懐かしい匂い・・・

「ねーちゃん、おかえり」

ヒョコタン走ってくるあいつ

「ただいま」
「ねーちゃん、仕事どうだった？」
「仕事？ ああ！ バッチリに決まってるじゃない」
そう言って親指立ててみせた 計算は間違えてたけど
「クウーッ！ ねーちゃん、カッキーー！」
「あんたが食べさせてくれたおかげよ」
頭クシャクシャッて撫でて ベッドルー
え？ どうしたの？ 下向いちゃって？
「なに？ 大丈夫？」
「なんでもねえ、へへ」
鼻声 そういうことか。

懐かしい匂いは・・・ オムライス！ 大好き！
しかもこのオーソドックスなやつ。
卵フワトロデロ〜ンを私はオムライスとは認めない。
そしてデミグラスじゃなくて、オムライスはケチャップなのよ。

なにこれ〜〜〜
チキンライスのケチャップ加減が絶妙！
なんていうの？ ひかえめ？ だから上にかけたケチャップでしつこくならない
のおお！
「あんた、天才！」
「マジ？」
「マジマジ、こんなオムライスを私の部屋で食べられるなんて、しあわせ！」
あ！ しあわせって言っちゃった！
えっと・・・
「ち、小さい頃、誕生日によく作ってもらってたから懐かしいなあ」
なんだこの取ってつけたような・・・
「ねーちゃんの誕生日っていつ？」
え・・・ それ・・・ 聞く？
「9月・・・ 13日」
「マジッ？」
13日・・・ 金曜日じゃなくてよかったけど 火曜日だって言ってた
「俺も！」
「え？ あんたも9月13日？」
「うん」
「えーっ！ なにこの偶然？」
「でも俺は便所で見つけられたんが9月13日だから」
え？

「ほんとはいつなんかわかんねえんだけど」

笑ってるけど

「でも・・・ 名前はわかってたんでしょ？ 何かに書いてたとか？」

「森下駅って知ってっか？」

あれ？ 前も・・・

「えっと・・・ 東南線の・・・ はずれの駅？」

「あすこの便所に捨てられてたから森下、名前は役所の人がテキスト～につけたみてえでさ」

オムライス食べながら・・・ な～んともないようなカンジで言ってるけど・・・

な～んともないのか、こいつには。

それにしても・・・

このオムライス！

お店出せるんじゃない？ 美味しいいいい！

お風呂上りの炭酸ミネラルウォーター

五臓六腑に染みわたるううう！

風呂上りのビールだ！ ってみんな言うけど、ビールはあんまり好きじゃないのよねえ。

せいぜいワイン？ そんなに強くないしね。

あんまり飲み過ぎると・・・

あ・・・ そうよ・・・ そうだった・・・

飲み過ぎた結果がお風呂から出てきた・・・！

怪我して曲がりにくい右脚を伸ばしたまま 床に座っているこいつ

あるときあんなに酔っぱらっていなければ 今ここにいることはなかった

でも 今夜の絶品オムライスも食べられなかった

これは・・・ 難問だ

「ねーちゃん」

「え、なに？」

「ねーちゃんの名前ってさ」

私の名前？

「ひらがな？」

「漢字よ」

あ 絶望的な顔になってる

そうか、こいつは漢字がわからないんだ

でも、こいつが私の名前を書く必要性なんて一生ないから・・・ え？

「知りたいの？」

うんうん・・・か。

メモノートとボールペン

美里

あ、ルビふった方がいいわね

「美が・・・み、里が・・・さと」

「み・・・さと」

「そう」

「ミサトってさ」

「今のは 呼びかけっ？」

「え、あの、ど、どういう意味なんかなあって」

それ・・・ 聞く？

「美しく優しい女の子になりますようにってつけたんですって」

発想がダサいのよお

「メッチャ可愛いじゃん」

「私は好きじゃないけどねえ」

もっとグローバルな名前にして欲しかったわ

「俺、好きだよ」

あんたに好かれてもねえ

「ミ・サト、ミサト、ミサトかあ、ミサト、ミサト」

あんた、さっきから連呼してるけどっ？

やめさせよう

やめさせるには どうする？ あ、そうだ！

「あんたの名前だって」

一男

「カズオのカズは“一”イチで、オは“男”オトコでしょ」

ポカンとしてるけど？

「これは・・・ 読める？」

「自分の名前は読めるよお、ハハハ」

ハハハじゃなくて、あんたの漢字能力がどの程度かわからないのよっ

「つまり、一人の男って意味よね」

「そうだったんかあ」

意味は今知ったのね

「一人の男って、かっこいいじゃない」

「え？」

「男らしい名前よ」

「ねーちゃん・・・ マジで言ってる？」

どういう意味？

「本気で言ってるけど？」

「そっか」

え？　なんで下向いちゃった？

あ・・・　こいつは・・・

「私は好きよ、あんたの名前」

クシャクシャって頭撫でたら　ますます下向いちゃったから

「あんたのオムライスの方がもっと好きだけどね」

「ヤベェ、俺、オムライスに負けてんじゃん」

下向いたまま笑った　鼻声で。

「あのオムライスに勝てると思うな！」

ポンって頭叩いてやった。

いろいろ

吉田って、脳みそあるのかな？

あるんでしょうね、いちおうね、生物として生息するのに必要最低限だけはねっ。

せっかくスムーズに動いてるのに、あいつのところで止まっちゃうのよっ。

「これさあ、ちゃんと確認したあ？ 俺の責任になっちゃうからさあ」

書類持って行った社員、「途方に暮れる」って書いてあるほどの顔になってたわよ。

立ち上がって、ツカツカと吉田のデスクの前に行って、

社員が持ってる書類見て・・・

「何の問題もないですね、これを早急に通さないと遅れますよ」

バカづらして私を見てんじゃないわよっ、吉田っ。

「遅れたら主任の責任になりますからっ、今すぐっ判を押してくださいっ」

ワタワタして吉田が判を押したけど？

あんたは何も考えず判だけ押してろっ！

困ってた社員が、目で「ありがとう」って言ってたわよ。

な～にが吉田翔よっ!? 翔と書いてカケルよっ!? 読めねえっつうの！

飛翔したことないしねっ。一瞬ジャンプすらしてないしねっ。

吉田ハンコにでもすればっ!?

ああああっ イライラするうっ

「そうなのお」

あ、大山ともう一人だ。

「ワンコ用ベッド買ったのお」

犬にベッドーっ!? どんだけ大きい犬なのよっ!? いや、前にチラッと見た写真では・・・

「今まではねえ、バスタオル折って敷いてたんだけどお、やっぱり落ち着かないみたいでえ」

いやいや、犬にはバスタオルで十分だろ

「ここはあなたの場所よっていうところが必あるとお安心するのよねえ」

あなたの場所っていても・・・

「最初は警戒してたんだけどお、ゆうべなんか穏やかな顔になってえ」

犬に表情なんてあるのっ？

「今朝なんかニコニコしてえ」

ニコニコーッ？ あんたが飼っているのは本当に犬なのかって？
「でも、そんな居場所なんか作ったら、手放すとき逆にかわいそうじゃないの？」
そうよ、そのとおり！ あんたの名前なんだっけ？
「野良に戻すわけじゃないんだもん」
野良に戻すわけではない・・・
「次のおうちでもお、最初は今のベッド置けばあ自分の居場所はあるうって安心するでしょ」
ベッドは無理だ・・・
あ、仕事に戻らなきゃ。

個室の扉を開けて、洗面台で・・・
「あ、北川さ～ん」
「あと2時間、よろしく」
「ハイッ！」
そのウルウルポーズって、男子に向けてやるものなんじゃないの？
いいけど。

夕方の大山の言葉
「野良に戻すわけではない」
私は・・・
あいつが私の部屋から出ていくということは、あの地下道に戻ることとしか考えてなかった。
だってそうでしょ!?
あの脚で？ ひらがなとかカタカナしか読めなくて？ どうするのよっ？ 無理でしょ！
あ、ダメダメ、振り出しに戻っちゃう、そうではなく。
えっと、あ、そうそう！ あの家事能力！ あれは使えるわよ。
清掃会社とか？ 料亭や三ツ星レストランは無理だけど、家庭料理の店とか？
クリーニング？ そうなの！ 種類別に分けて洗うのよ、あいつ。
私なんて一緒に洗っちゃってブラの形グチャグチャにしたこと何回もあったし、
白いトップスがまだらのピンクになったこともあるのに。
なんでそんなこと知ってるの？ って訊いたら、インだって！ 少年院よ。
あいつ、少年院入ってよかったんじゃない？
いやいやいや、入るのはよくない、それはよくないけど、おかげであの家事能力よ。
それを活かさない手はないんじゃない？
だからって・・・ 私に何が・・・ ていうか、私がこんなこと考えたって・・・
あれ？
なにこのシヨップ？ 前からあった？ ないわよね？
“ひとりキャンプ”？
キャンプなんて虫は寄ってくるし、お風呂は入れないし、焚火でごはんとか、絶対ムリ！

あ！ ホームレスって、言ってみればひとりキャンプじゃない？
いやいやいや、趣味ではない、それとこれは違う。

あれ？ 何考えてたんだっけ？
まあいい、帰ろう。

「ねーちゃん、おかえり！」
ニコニコしてヒョコタン走ってくるあいつ。
「ただいま クアッ・・・」
言えない・・・ カズオと言ってやればいいんだろうけど、なんか言えないっ
「ねーちゃん、それ、なに？」
「え？ あ、えっと、気にしないで」
「重くね？ 持ってこうか？」
「大丈夫、超・・・軽量」
「わかった」
わかった顔ではないけど うまく説明できないのよ

お風呂から上がって、ミネラルウォーター持ってきて、ソファに・・・
ん？ なに？ ローテーブルの下に・・・
スーパーのチラシ！
あいつ・・・ スーパーのチラシをチェックするの？
今日のお買い得品とか、本日限りの大特価とか、そういうやつ？
なにそのベテラン主婦の域!?
あれ？ 裏に・・・
こ れ は
隅から隅までズラーッと 私の名前えええええっ
怖い怖い怖い怖い怖いっ
ここまで書かれると呪われてるみたいよおおおお
なんでまた私の名前を？ あ、最初の行と最後の行が違う、上達している！
あれか？ 子どもが覚えたての字を書きたくて、そればかり書くてやつ？
そうかも。
だって、あいつが読み書きできるのって自分の名前だけだったんだから、
ゆうべ覚えた私の名前の漢字を覚えて書きたくなった、それだ！
でもねえ、私の名前が書けたところで、あいつの人生の何の役にも立たないわよ
もっと日常生活に役に立つ漢字を覚えた方がいいんじゃない？
まあいけど、関係ないけど、ていうか・・・ 見なかったことにしよう、うん。
あ、お風呂から上がってきた。

こいつがねえ・・・ 漢字を、私の名前だけど、練習していたとはねえ・・・
練習？ 練習意欲があるってこと？
ところで、こいつはなんでひらがなとカタカナしか書けないんだ？
どこかに障害がある？
そうは見えないけど・・・
障害があったら、職業訓練で訓練されたことをここまで活用できる？
もし私が同じ訓練受けたとしても、できない、ていうか、逃げ出す！ ムリ！
ということは・・・

「ねーちゃん？」

「・・・ え？」

「具合悪りの？」

「ううん、どうして？」

「ずっと黙ってっからさあ。 メシ食ってたときも黙ってたしさあ」

だからさっ、あんたのことをいろいろ考えてるのよ！ いろいろねっ

なんでこんなに考えてるの？ てか考えなきゃいけないの？ 考える必要ある？

なにやってるんだらう私いい

「ハアアア」

ソファに頭埋めちゃったああ

「ねーちゃん！」

あいつが駆け寄ってくるけど

「やっぱ具合悪りいんだろ？」

ちがう・・・

いや、背中さすってるけど吐きたいわけじゃないのよ

「大丈夫、大丈夫だから」

「俺はねーちゃんの大丈夫は信用しねえ！」

「ハ？」

「ねーちゃん大丈夫っつって大丈夫だったことねえじゃん！

熱出したりよお、仕事してメシ食うの忘れてたりよお」

私・・・ こいつに・・・ 叱られてるの？

「大丈夫じゃねえときは、ちゃんと言ってくれよ、俺、心配だからよお」

「はい・・・」

なにこれ こいつのこと考えてて、こいつに叱られて 私がシュンとするって？

「ねーちゃん！」

あいつが私の横にドンッと座った。

おいっ！ いつソファに座っていいと言ったっ？

「疲れてっときはさあ」

あいつが自分の左ももポンと叩いた・・・けど？

「ほれ！」

ほれって、なに？

「ほれ！」

ポンポンて なに？

えっ？ ちょ、なに、グイッて

ハ？ 膝枕？

「なんなのこれ？」

起き上がろうとしたら グイッ

「もっと優しくやってよ！ グイッて」

「ねーちゃん強がりだからよ」

おいっ おまえまた言いやがったなっ

「ちっとはさあ、なんつうか」

私の頭を撫でて・・・

「いいじゃん」

こいつに頭を撫でられると・・・ なぜか泣くという条件反射・・・だけど

今夜は・・・

ゆるむ なんだこのカンジ・・・ 全身ゆるむううう

疲れてたのね・・・ 吉田のこともあったしね・・・ いろいろね・・・

「カズオ」

「ン？」

「あんた、上達してるわよ」

「あ？」

「いろいろね」

いろいろ

ここから見えるローテーブルの下のチラシの漢字もね

最強

ン・・・ え？ ヤバ！ 寝ちゃってた。
身体起こしたら、あいつはソファの背もたれに頭ガク～ッてして爆睡。
今何時？ 12時過ぎてるっ！ 2時間くらい寝てたってこと？ あのままだ？
えっと こいつを 起こす？ メッチャ爆睡してるけど？
このままソファに・・・ ダメダメダメ、ソファがあいつのベッドになっちゃう。
だって・・・ねえ、一回ソファに寝かせて、次からはダメって・・・
ダメな理由がなくなる
ここがあなたの居場所よお・・・だっけ？
ソファはダメ、ソファを居場所にしちゃったら、もう、なんか、とにかく、ダメ。
あ！ そうだ！ あれだ！

リビングの照明もスタンドだけにして、キッチンも真っ暗にして、小さな声で、
「カズオ～」
起きない
「カズオ～」
なぜ起きない？ あ！ 私にカズオと呼ばれ慣れていない？
「ちょっと～」
「ん・・・え・・・うん・・・」
寝ぼけておる
「こっちで寝なさい～」
「あ・・・あい・・・」
フラフラ立ち上がるのを誘導して・・・ キッチンの床に・・・ 毛布かけて・・・
おやすみ！

目覚まし・・・ ピッ
今日は・・・ ミーティングだ・・・ 朝からミーティング・・・
メイク気合入れなきゃ、気合で勝つ！ 何に？
顔洗ってこよう。

リビング抜けてキッチンの横を

「ねーちゃん」

え？

「ねーちゃん、これ・・・」

あ えっと

超軽量折り畳みキャンプ用ベッドマット・・・です

「これ、あの、俺・・・に？」

「キ、キッチンの床にヨダレたらされたらイヤだっただけよっ」

バスルームに駆け込んでドアをバタンッ

なんなのあのわけわかんない言い訳っ？

けど言える？ あなたのベッドですよお・・・なんて！

顔洗うっ

メイクもバッチリ決まった！

最近肌の調子がいいのよねえ、ファンデのノリ？ スツテ

「ねーちゃん」

「なに？」

「なんで化粧すんの？」

ハ？

「会社に行くからよ」

いつもメイクしてるじゃない

「ねーちゃん化粧しねえ方が可愛いじゃん」

ハ？ ナニヲ 言ッテルンダ コイツハ？？

私は可愛いなんて思って欲しくて会社に行っていないし思って欲しいヤツもいないっ

「メイクはねっ」

目力込めてあいつを見てやった

「女の戦闘服よっ！」

あんたにわからなくていいっ

キッチンの横通って チラッ見ると

折り畳みベッドマットが折りたたまれて 毛布と一緒に隅に置いてある

ほら！ コンパクト！

ショップの人、ありがとう！

ひとりキャンプは、私は絶対やりませんが

「行ってきますっ」

この会議室に入るのは何回目？

「担当」としては何回もあるけど、「暫定主任補佐」として入るのは初めてだわ。

吉田もいるけどね、主任としてねっ、何の話をしているのかわからない顔でねっ。

あ、大山がコーヒーを運んできた。

そうよね、そうだった、事務職だもの、いつもそうだったわ。

あれ？ なに？ コーヒーが・・・ 美味しい

他の人たちも「あれ？」って顔してるわ。

だって、大山が入れるコーヒーって薄っす～いか濃すぎるかだったわよ。

えっ？ ソーサーにこぼれてない！

いつもソーサーにこぼれてて、みんなソーサー持って飲んでたもの。

どうした大山？ いいけどね、とってもいいけど。

私の提案と意見はすべて通った！ オーーッホホホ！

気合入れたかいがあった！

メイクのおかげではないけど。

玄関開けると

「ねーちゃん、おかえり！」

あいつがヒョコタン走ってくる

「カズオ！」

「ン？」

「勝った！」

「へ？」

「戦闘に勝った！」

「お・・・ おう！」

意味わからないで、おおと言っているな、まあいい。

勝利の味！

アジの塩焼き。

「これは、まさか・・・ あんたが焼いたの？」

「うん、俺が焼いたけど」

「えっ？ でも、あの、ほら、グチャッと・・・ 内臓？ あれは」

「取ったから」

「あんたが？」

「うん」

うん・・・て、あたりまえだけど、どうした？ みたいな顔して

「あ・・・そう」

「あ！　ねーちゃん、サカナ嫌れえか？」

「好きよ、好きだけど」

自分で焼くという概念はない

「すっげえ安くなってたからよ」

あ、そう

「南蛮漬けも作っといた」

ナンバンヅケ？　ナンバンヅケって・・・　なに？

「あ、南蛮漬けも食う？」

「え、あ・・・　見て・・・から」

あいつがタッパーのフタを開けて・・・

揚げてある魚が細く切った野菜と共にタレにつかっている

「1個食ってみてよ」

あいつが一切れつかんで私の口に突っ込んだっ

「あ！　美味しい！」

「こっちは日持ちすっからよ」

そうですか　はい

なんなんだろう　この・・・　仕事で勝っても何かに負ける・・・的な

それより

「塩焼きも美味しい！」

ハア〜ッ　サッパリした！

ほら、スッピンの肌もツルツル、すごい。

今日は前に買っておいたフリルショートパンツのセットアップ。

暑くなってきたしね、でもまだちょっと早いかな？　まあいいや。

ミネラルウォーター取りにキッチンに入ると、

あいつが無心でシンク掃除してた。

「ねえ、もういいから、お風呂入ってきたら？」

「もう終わっから、ねーちゃ」

こっち振り向いて　なに？　なんでフリーズ？

あっ！

「カズオ！　鼻血！」

「え？　あ」

「そんな洗剤だらけの手で、ちょ、えっと、冷やす？　いや、ティッシュ？」

「や、あの、なんも、ねえ、から」

水道水で洗ったって止まらないんじゃない？

「やっぱり冷やした方がいいんじゃない？」
「あ、ぜんぜん、あの、うん」
なに？ 私に心配かけないようにしてる？
「ね、ねーちゃん、水持ってくるんだろ」
「え、そうだけど」
あいつが冷蔵庫開けて私のミネラルウォーター出して
「はい」
「うん、ねえ、大丈夫？」
「あ、ぜんぜん、これ終わったら風呂入っから」
お風呂なんか入ったら、もっと出血しない？
「ねーちゃん、あっち行ってて」
あっち行ってて？ なんなの？ 行くけど。

ミネラルウォーター飲んだら・・・
やっぱりまだこれだと寒いから、ロングパンツにしよう。
にしても・・・
あいつ、大丈夫かなあ 病気？ 元気そうだけど

あ、お風呂から上がったあいつが・・・なんでソ〜ッとこっち覗いてるの？
なんか・・・ホッとした顔？ なに？

「ねえ、大丈夫？」
「あ、もう、うん」
「あんたさ」
「ン？」
「働き過ぎなんじゃない？」
「ハ？」
「だから疲れて鼻血出ちゃったんじゃない？」
なにそのポカン顔？
「だから、働き過ぎなんじゃないのって言ってるの」
「俺・・・なんもしてねえじゃん」
ハ？
「ねーちゃん何言ってんだよお、ハハハ」
あんたは・・・
自覚がないのかっ？
「あんたは、働きっぱなしでしょ！」
「あ？」
「あ？ じゃなくて！ 掃除・洗濯・料理に買い物、1日中働きっぱなしよっ！」
「え？」

「え？ じゃなくて！」

「俺・・・働いてんの？」

「ハァァァアッ!? あんたがやってることを働くと言わないで何を働くというのよっ!？」

「ねーちゃんが・・・働く？」

「そうだけどっ！ あんたが日々ここでやってることはなにっ？」

「ああ、でも、俺、これっきゃできねえからさあ」

「これっきゃできないいいいっ!? イヤミかっ!？」

「へ？」

「私があんたがやってることは全然できない！ この部屋では敗北感しか感じないっ！」

あいつがポカ〜と口あけて見てるけど？

「この部屋の中ではねっ、悔しいけどねっ、あんたが最強なのよっ！」

あいつが・・・なにこの表情？ なんかよくわからない

「ねーちゃん」

「なによっ？」

「やっば、ねーちゃん最強だよ」

いや、だから、私が言いたいのはっ

「俺、イッパツで鼻血出た、ハハハ」

ハ？

殴ってないけど？

タタラレン

今日はね、吉田が休みなのおおお！　ハッハッハッハッ　お腹が痛いんですってえ。
永遠に休んでくれないかしらあ、みんなの仕事が進む進む！

今日のランチは久しぶりに駅ビルの中のガレットのお店。
前は、今日のランチは何食べようかなあって楽しみだったんだけど、
最近家は帰れば美味しいごはんが待ってるから、息抜きのな？
ずっと会社の中にはいたくないからくらいなの？
なにこれ最高じゃない！　男の理想じゃない？　妻が美味しい料理を作って待っている。
私は・・・　ムリ！　不可能！
出来合いのお惣菜でいいよって言ってくれる人か、メイドを雇えるくらいの大富豪？
私・・・　結婚できないかも。
考えなくていい、今はまだいい。

さあ、会社に戻ろう！
吉田のいないオフィス、快適！

今夜はカレーが待っている、私のリクエスト。
あいつが甘口と辛口どっちが好きかって聞くから、中辛って言ったら一瞬悩んでた。
おそらくルーのパッケージの漢字がわからないんでしょうね。
甘口か辛口という漢字を絵として認識してた？　中辛もあるのよ、世の中にはね。

あれ？　え？
カズオ？　なんで玄関の前に立ってるの？
あっ、鍵を失くした？
「あ！　ねーちゃん！」
なにその緊急事態的な顔？　大丈夫よ、鍵なら
「ねーちゃん！」
はいはい、なに？
「あのさ、あのさ、あのさ、あのさ、あのさ」

「なによ、落ち着いて話してよ」
「あのさ、俺、さっきゴミ捨てに行ったらよ」
ああ、はいはい、このマンションは24時間ゴミ捨てOKよ
「掃除のおばちゃんがいるよ」
ああ、管理会社が派遣してる清掃の人か
「タ、タ、えっと、タタラレンのがイヤだからあんた持っててくれつつよ」
えっと・・・ 今のは日本語？
「カズオ、落ち着いてもう一回言って」
「タタラレンのがイヤだからあんた持っててくれって」
タタラレン？
ぜんぜんわからない。
「あ、えっと、これ、こいつ」
カズオの足元に小さな段ボールの箱・・・ これがタタラレン？
「このまんまにして死んでタタラレンのがイヤだから俺に持ってけつつよ」
なにこれ？
「カズオ・・・ フタ・・・ 開けて」
カズオが上目遣いで私を見ながら・・・ ゆっくり段ボールのフタを・・・

コレハ ナニ？？？ この丸まってる小さい物体は？？？

「カズオ・・・ これは・・・ なに？」
「ネコ」
ネコ？ ネコ・・・ネコ・・・
「えええええっ 猫おおおっ？」
ちよ、ちよ、ちよ、ちよ、ちよっと 待ってよーっ！
「なんで猫なんか持ってきちゃったのよおおおっ!？」
「だ、だから、掃除のおばちゃんが」
「このマンションはペット禁止なのよ！」
「で、でも掃除のおばちゃんが」
「さっさと捨ててきなさい！」
「あ、でも、こいつさ・・・」
何を言ったってダメよ！ ペット禁止じゃなくても私は猫は嫌いなの！ 犬もねっ！
「こいつ、ケガしてんだよ」
そんなの私に関係な・・・
「ほれ、ここ」
ウッ 前の手が血だらけ・・・
「ねーちゃん・・・」
「な、なによ？」
「どうしよう」
そんな途方に暮れた顔されたって、私だって、えっと、あの、とにかく・・・

「病院」

うちのマンションから歩いて10分くらいのところに動物病院がありました。

この時間でも開いてました。

動物病院を検索する日が私の人生にあると思ったことは一度たりともありません。

しかも、ここに来るときに、段ボールのままじゃどうなの？ って思って、

古いバスタオル？ 使ってないやつ？ それを取りに部屋に入ろうとしたら、

「俺持ってくる！」ってあいつがバスルームに入って行ったの。

今や私の部屋の中のどこに何があるか、あいつの方が詳しいの。

そしてね、あいつが持ってきたのがキティちゃんのビーチタオル。

大学時代に友だちと海に行くときみんなでふざけて買ったやつ、一回も使ってない。

だからいちばん下にあった・・・はず。

キティちゃんのタオルの中に猫

これじゃまるで私がチョー猫が好きな女みたいじゃないっ！

「これは・・・ どうされました？」

私にわかるわけないっ

「わかりません、さっきゴミ捨て場で・・・見つけたので」

私の横にいるこいつがねっ

「ああ、切れてるなあ、これは縫わないとなあ」

目の前の台で、看護師さんが子猫を押さえて、先生が注射して・・・

あいつは私の横で、怖くて見れませ～んて顔で下向してる。

この先生の縫合の手つきはドラマで見るのと同じだから腕は確かね。

あ、ドラマがウソで、こっちが本物か。

「処置は終わりました」

先生がまた私の前の椅子に座った。

「もう少し遅かったら全身に炎症がまわって危なかったです」

「そう・・・ですか」

「目やにも出ていないし、ノミやダニもいない、あの子は飼い猫みたいですね」

「ですからっ、私はさっき拾ったばかりで」

「おそらくケガをしたから捨てられたのかもしれませんがね」

え？

「そういう飼い主がいるんです、怪我や具合が悪くて病院に連れていきたくないから

とか、

小さいときは可愛いけど、大きくなって可愛くないからって捨てたりね」
だったら最初から飼わなきゃいいのに
「そうだなあ、全治3週間程度かな、あと1週間くらいで歩くことはできますよ」
全治3週間・・・！？
「あの、先生、うちのマンションはペット禁止なんです」
「それは大家さんと相談した方がいいですね、せめて完治するまで許可してもらおうとかね」
それって・・・ 私が世話する前提？
「あ、あの、こちらで引き取ってもらうことはできませんか？」
「うちはそういうのはやってないですよ、保護センターに連絡するといいですよ」
保護センター？
「飲み薬と塗り薬出しておきますね、また何かあったら来てください」
「あ、あのっ」
「はい？」
「あの・・・ エサは・・・何を・・・」
「うちにサンプルがあるので差し上げますよ、あとはペットショップで買ってください」
「はあ・・・」
横に座ってるあいつの方を見たら、有罪判決を受けた囚人みたいな顔でうなだれてる
あんたが悪いわけではない、いや、ちょっとは悪いよね、てか悪いよねっ
清掃のおばちゃんに押し付けられるって、断れば・・・ ムリか。
おばちゃんパワーには勝てないか・・・ そうね ハアアア・・・

「全部でちょうど5万円になります」
5万っ！？
私の後ろから「ゴッ」って言ってよろけて玄関ドアのガラスに頭打った音が聞こえる
「カード使えます？」
「大丈夫ですよ」
よかった、ダメだったら ATM 駆け込まない・・・と・・・ あれ？ バッグの底に
茶封筒
「やっぱり現金にします」
茶封筒から5万円出して、はい、終わり！

それにしても、猫の治療費ってバカみたいに高いのね、保険ないのかな？
あいつは・・・
キティちゃんタオルにくるまった猫抱きながら、死刑台に向かうみたいな顔して歩いてる。

今は・・・ 反省してろっ！

中辛

部屋に戻って、カズオがタオルにくるんだままの猫を廊下の端に置いた。

「着替えてくる」

私はベッドルームに入って・・・

ハアアア なんなの 猫

ねこおおおおおお

でも 怪我してたしね・・・

あの怪我を見てもなお、放置は・・・ できないわよね・・・

しょうがない 命をひとつ助けたってことで うん それよ

なんだっけ 保護センター？

明日連絡して保護してもらおう

今夜は しょうがない

ドアを開けたら カズオが立ってた。

「え？ なに？」

「ねーちゃん」

あ、また・・・ 土下座

あんたは右脚曲がらないんだから土下座できないでしょ！

「ごめんなさい！」

床に頭つけやっ

「っっっっつとに、ごめんなさい！」

「もういいわよ」

床に頭グリグリさせてもさあ

「だいたい、あんたさ、土下座してるつもりだろうけど、土下座できてないから」

「えっ？」

え？ って自覚なかったの？

「なんか、ヘンなヨガのポーズみたいにしか見えないわよ」

「よ・・・が？」

ヨガがわからないか、そうか、たとえが悪かった

「明日、保護センターに連絡するから、もういい」

「それでもよ・・・」

なに？ まだ何かあるの？

「ねーちゃんに、あんな大金、払わせちまってさ」
大金？ ああ、5万か 猫の治療に5万は確かに高いけどね
「あんな大金、俺が、ねーちゃんに・・・返せるわけねえしよ」
「あんたのお金よ」
「ハ？」
「あの5万はあんたのお金」
何を言ってるんだ？？？ みたいな顔してるけど
今証拠を見せてやるわよ

バッグから空の茶封筒出して あいつの目の前に突きつけてやった
「これ！ ここに、あんたの判が押してあるでしょ！」
ポカン？
「憶えてない？ あんたの名前貸してって、あのときお礼ってこれを渡そうとしたら、
あんた、ここに判押したでしょ！」
あ、そういえば・・・みたいな顔してるけど？
「あのとき私、言ったわよね？ 判を押したら受け取りましたって意味になるって」
で？・・・みたいな顔してるけどさ
「受け取ったのよ、あんた！ ほらっ！ ここに判押してるでしょ！」
トントントンて爪でつついて
「だから、この中に入ってたのは、あんたのお金、あんたの5万円」
あいつに空の茶封筒つかませた
「私あんたのお金を出しただけ」
「ねーちゃん・・・」
「あんたもやっと万札使えたわね、ハッハッハッ」
「ねーちゃん」
「なに？」
「ねーちゃん！」
「なによ？」
「ねーちゃんは・・・」
「中辛！」
あいつが 泣きそうな顔から・・・
泣き笑いみたいな顔になって・・・
「カズオ、お腹空いた！」
私の顔を見つめたまま
「うん」
笑顔になった。

なにこのカレー、絶品！

市販のルー使ったとは思えない！

まさか・・・ スパイスから？

「カズオ、このカレーのルーって・・・ 市販？」

「うん」

市販を使ってどうやってこの濃とまろみを？

「ねーちゃん中辛がいいつつたから、甘口と辛口混ぜた」

なっ なんだおおおっ！？

そんなワザがあったとはっ！

「ねーちゃん好きなのはこんくれえかなあって」

こんくれえよ、そのとおりよ！

「カズオ」

「ン？」

「美味しすぎ！」

「マジ？」

メッチャ嬉しそうな顔。

無罪放免みたいな？

無罪ではないけどねっ

まあ・・・ おばちゃんには勝てないか

お風呂から上がって、チラッと廊下で寝ている猫を見た。

エサは食べないし、薬も飲まないって。

世話はカズオがやるんだけどね、あたりまえでしょ！

明日、保護センターに引き取ってもらうまでのことだし。

カズオもお風呂から上がってきた。

そして、ローテーブル挟んだ床の上。

「ねーちゃん」

「なに？」

「タタラレんのがイヤって、どういう意味だ？」

ああ・・・ それね・・・

崇られるのがイヤ

猫が化けて出るとか

おばちゃんが考えそうよねえ

え？ 待って

私 崇られてる？

ホームレスの次は 猫・・・

崇られてるのかな？

「ねーちゃん？」

「えっとね・・・」

私のこと？

「考えなくていいと思う」

考えたくないし。

保護センター

撃沈・・・・・・・・・・・・・・・・

どこの保護センターもいっぱい無理だって断られた。
ちゃんと世話ができる個体数が限られていて、今はギリギリの状態で作ってるって。
23区全滅、関東地地域全滅。
もしかしたら？ 北海道とか沖縄？ いっそアメリカならあるかもね！
非現実的 現実逃避 逃避したい 私の部屋に猫がいる現実から逃避したいっ

どうするのぉぉぉぉ？

考えられない・・・ 何も考えられない・・・

今朝もエサも食べないし薬も飲まないし、水も飲まないってカズオが言った。
やだ、死んじゃわない？
私の部屋で死ぬなんてマジで崇られそう、崇られる！
なんでーっ？ 私か何をしたっていうのぉぉぉ？

「北川さん」

あ、大山

「さっき、ファイルで送りましたけどお」

え？ あ、見るの忘れてた

「ごめん、ちょ、ちょっと忙しくて、今チェックする」

えっと うん うん うん うん よし！

「大丈夫よ」

「ありがとうございますう」

あ

「大山さん」

「はい？」

「ちょっと聞きたいことがあるの」

大山の目が恐怖で瞳孔開いてるけど

「は、はい」

それどころじゃないのよっ

廊下で 誰にも見られないように
「たとえばね」
「は、はい・・・」
「たとえば・・・ 猫」
「え？ あの、すみません、もう一度お・・・」
「猫、仔猫よ」
「は・・・い」
「エサを食べないとする、どうする？」
「それはあ、ウエットですか？ ドライですか？」
「何が？」
「フードの種類・・・ですよ？」
猫のエサってそんな種類があるの？
「え、あの、カラカラしたやつよ」
「ああ、ドライですねえ」
「そうね、そう、乾燥している・・・方」
「仔猫ちゃんならあ、ふやかした方がいいと思いますう」
「ふやかす？」
「はい、お湯を入れて少し置くと柔らかくなるのでえ、そうすると食べやすいかもお」
なるほどね
「それじゃ、薬、飲まないとする、どうする？」
「粉ですか？ ゼリーですか？ 錠剤ですか？」
薬剤師みたいな質問・・・
「じよ、錠剤」
「だったらあ、顔をちょっと上にあげさせてえ、お口の中に人差し指をちょっと入れてえ」
顔を上にあげ、口の中に人差し指
「そしたらあ、人差し指と親指でお口開かせてえ」
いっそあんたが世話してくれないっ？
「お薬を、舌の付け根え？ 喉の近くまでグツて突っ込むんですう」
グツと？ 死なない？
「すぐにお口をつかんで閉じさせてえ」
ねえ、それ、死なない？
「喉をサスサスしてあげれば飲みますよお」
「サスサス？」
「こうやってえ、サスサス～って」
ああ、さするのね
「それじゃ、水を飲まない、どうする？」
「スポイトかなあ」

そんなものは私は持っていないっ

「それかぁ、コットンに水を含ませてえ、お口にチュッてたらしてあげれば飲みますう」

コットン！ なるほど！

「大山さん」

「は、はい」

「あなたは頼りになるわ」

「ありがとうございますうっ」

そのウルウルは、今は私がやりたい気分よ。

どうするの？ 保護センター全滅、どうするの？

トイレの個室で悩む私・・・

他に悩む場所ないんだもの！

いちばん簡単なのは・・・ あのゴミ置き場に戻す

それよ！ それがいちばん簡単よ！ 戻せばいいのよ！

あれ？ 前も何かで同じようなこと考えてた気が・・・

あ！ カズオだ！

カズオをあの地下道に戻せないでウダウダしている私が猫を戻せる？

カズオはねえ・・・ 名前呼ぶようになっちゃったからねえ・・・

私の中でホームレス感が薄くなっちゃってるっていうか・・・

今はあいつのことはいい！ あいつのことではない！

でもねえ・・・ 先生も完治するまでは外に出さないようにって言ってたわよ。

縫合したところから雑菌が侵入してどうか・・・

それで、あのゴミ置き場で死なれたらねえ・・・ マジで祟られる・・・

今度はゾウとか侵入してくるかも・・・ 冗談抜きで・・・

「ええ？ そうなの？」

「そうなのお」

あ 大山ともう一人

「北川さんがねえ、仔猫のごはんとかぁ、薬とかぁ」

おいおいおい！ ベラベラ言いふらすなよ！

「私にい聞いてきたのねえ」

こいつに聞くんじゃなかったあああ

「あの北川さんがぁ、仕事中にそういうこと聞いてくるってないでしょ？」

「ないない」

「あれはねえ、きっと私を試したんだと思うのお」

ハ？ 試す？

「どんなことでもお、きちんと把握してえ、すぐに答えられるかって」

いや・・・ 単なる質問だったんだけど・・・
「だよね、あの北川さんだもんね」
あの北川さんってどういう北川さん？
「でしょお？ 事務的なことじゃなくてえ身近なことを使うってすごいよねえ」
や、だからさ
「それでねえ、あなたは頼りになるって言ってくれたのおお！」
言ったけど
「すごいじゃん！」
「うん！ 私い、もっとがんばるうっ！ 北川さんのためにもお！」
私のためじゃなくていいから
まあ、なんていうの？ そう捉えてくれたなら、こっちは助かるけどね
とんだ誤解だけどね

玄関を開けたら
左角の隅に 新聞紙の上で丸まっている猫
その横に新聞紙の束
なぜ新聞紙があるの？
私は電子版で読めるのよ 会社に行けば紙のは全紙置いてあるし
新聞紙が溜まってこういう束が部屋に積まれるのがイヤだから電子版
なのに なぜ？
そして猫の前には スーパーで肉とかそういうのが載ってる発泡スチロールの器
エサと水が入ってるのが2個

なにこのホームレス感っ！？
この空間がホームレス感！
私の部屋の中にホームレス感満載の空間！

「ねーちゃん！」
ヒョコタン走ってきたこいつ
「ど、どうだった？」
こいつか
こいつが このホームレス空間を作ったのか
だろうね ホームレスにしか作れないよね このホームレス空間

こいつと猫

私の部屋が保護センターになってるじゃーんっ！

決死

なぜ新聞紙があるの？ って聞いたのね。

ゴミ捨て場で拾ってきたんですって。

ゴミ捨て場よ？ ゴミ捨て場 私の部屋にゴミ捨て場から拾ってきた新聞紙の束
まあそれはいいとして、よくないけど・・・

だからなぜ新聞紙なの？ って聞いたらね、

「タオルにシヨンベンしたから」

キティヤんのタオル 捨ててくれて全然かまわないんだけど

「ちゃんと洗ったから」

私の洗濯機で 猫がオシッコしたタオルを洗った

新しい洗濯機買おうかなあ

それはいいとして、よくないけど、まあいいとして・・・

お水飲んでないのに、よくオシッコ出たわねってポロツと言ったのね。

だって、ほら、私、膀胱炎になったことがあるから

そしたらね・・・

飲ませたって言うの 何回か

飲んだの？ って聞いたら、飲ませたって

コットンのワザかな？ って思ったらね・・・

今あいつの言葉を思い出すだけで全身が震えてるんだけどね・・・

「俺が口ん中に入れて、こいつの口ん中に入れた」

ん？ なに？ って思った

聞き直しちゃったもの

「俺が口ん中に水入れて、こいつの口ん中に少しずつ入れたら飲んだ」

心の中で宇宙に届きそうなほどの悲鳴あげちゃった

なんで心の中かっていうとね、衝撃過ぎて声が出なかったから

猫の口に・・・猫の口に・・・ 猫の口に 口をーっ！

言葉が出たのが1～2分後？

「今すぐ3回歯を磨いてメツチャウがいしろーっ！」

言葉っていうか悲鳴？ 怒声？

ちょっと頭抱えて瞑想みたいな？ 頭空っぽにしたい的な？

それやってから、大山流エサを作らせたの。

ふやかす？ あれよ。

なんかレバーペーストみたいになったのを、今、カズオが猫の前に持っていったる。

匂い嗅いでるけど・・・警戒してる？ 大山、どうすればいいのっ？

あ、カズオが指に少しつけて・・・

あ！ 舐めた！

あ！ 食べ始めた！ 食べてる！

大山先生！ 食べました！

カズオが感動した顔で私を見て

「ねーちゃん！ 食った！ すげえ！」

そうね、でも、あんたがやったことは忘れないっ 忘れたいけどっ

次は薬よ。

えっとね・・・ 今、大山が言ったことを頭の中で再生してるの・・・

「頭をあげて人差し指入れて、人差し指と親指で口開けて喉近くにグッと押し込んで」

「あ？ え、もっかい」

「頭をあげて人差し指入れて、人差し指と親指で口開けて喉近くにグッと押し込んで」

カズオが頭90度くらいかしげてる

大山が言ったことそのまま言ってるんだけどっ？

あ、大山は手ぶりつけながら言ってたな。

「だからっ、頭をこう上げてっ 人差し指を口の中にこうっ そしてこうやって口あけてっ」

あれ？ 私の手ぶり・・・

ワニの口開けるみたいになってるー！

こうじゃない！ こうではなかった！ 大山！ いっそ今来てー！

「えっと、こいつの頭をちょっと上にあげればいいのかな？」

そ、そうよ

「こんくれえ？」

あ、そんなカンジ

「そんで、人差し指を・・・ あれ、入んねえな」

入れてよ！

「こいつ小っちゃから、俺の指だとデカ過ぎんのかな」

あ、たしかに・・・ 大山のジェスチャーだと仔猫が見えそうなくらいだったけど

「お～い、口あけろよ～、あ、人差し指はなんとか入った！」

おお・・・ よかった

「親指入んねえなあ、俺の指だと人差し指で口ん中いっぱいになっちゃうな」

ええええ どうするのよおお

「えっと、こん中に・・・」

あれ？ もう薬入れる？

あ、入った！

あ、ペツて ペツて・・・ 出すなよおお

「ねーちゃん・・・」

え？ なに？ なにその顔？ ねーちゃん助けてみたいな顔？

「もっかい・・・おせえてくんねえ？」

あんた・・・ ムリだってわかってるよね

男の指じゃ仔猫の小さい口には・・・

え？ じゃ何？ 私？ 私がやるの？ なんで私がっ？ いやいやいや、それは・・・

でも・・・ このまま薬飲まなかったら・・・ 私の部屋で・・・ 猫が死ぬ？

ええええええ でもおおおお ええええええ でもおおおお ええええええ

過呼吸起きそう てか、もう過呼吸気味 想像しただけで・・・

猫の口の中に指ー！ 私の指ー！

か からだがふるえてる なんか もう

「ウツ・・・エ・・・エエエエン・・・」

泣いちゃったあああ

「ねーちゃん！」

カズオがあわてて傍にきて

「ねーちゃん、ごめん、ねーちゃんなんも考えなくていいから、俺なんとかすっから」

なんとかできてないじゃ～ん ウェ～ん

「ねーちゃん、泣かないで、な、俺なんとかすっから、な」

なんとかできてないでしょおお

もう ダメだああああ

試す え？ なに？

『どんなことでもおきちんと把握してえ すぐに答えられるかあ』

大山・・・ 大山はそう思って頑張ったのにいい

大山は頑張った・・・

これは・・・ 私が試されている？ 大山にじゃないけど

や やるしかない

大山から得た情報を私がちゃんと把握して実行できなかつたら

もう二度と大山に説教する資格はなくなる！

フウウウウ 深呼吸

「ね、ねーちゃん？」
猫の前に・・・
こっち見てるけど
いい？　これは　あんたのためではない　私のためなのよっ
えっと・・・
さ・・・　触った　ゼーゼーゼー
顔をちょっとあげて・・・　人差し指をちょっと入れて・・・
人差し指と親指で口を開けて・・・
ここからだな　ここから　死なないでよ　死ぬなよ　今はねっ
薬を舌の・・・ザラザラするう・・・考えないっ　付け根あたりにグッ
口閉めて・・・　喉元をサスサス
あれ？　ゴクン？　ゴクンてしなかった？
「ミャアアア」
ペッてしない　飲んだ？
思わずカズオを見ちゃった。
「ねーちゃん！　すげえ！」
「の、飲んだ・・・よね？」
「うん、飲んだ！」
あ・・・　こ、腰が・・・抜けちゃったああ・・・
「ねーちゃん、すげえよ！」
カズオがどさくさで抱きしめてるけど・・・　おまえの口は近づけるなっ
「マジすげえ！」
すごいのは・・・　私ではない・・・　大山と・・・　私の仕事に対する執念っ

指を洗った、指っていうか手ね、触っちゃったからね。
こんなに洗ったらカッサカサになるんじゃない？　くらい洗った。
化粧水つけて肌用リッチモイスト美容オイルつけたわよ。
ハァァ～、ダマスクローズのいい香り。
匂い残ってないわよね？　ない、大丈夫。
でも、感触が残ってるううう、記憶？　指の記憶？　消したいっ

バスルームから出てきたら、
「ねーちゃん、晩メシ食う？」
ついさっき、あんなことをした後で、今の私に食欲があると思う？
「あとに・・・　すっか」
視線だけで察知したのね。

リビングのソファにボタン

疲れた・・・ 仕事で徹夜明けより疲れた・・・というより、
私の人生において使ったことのない神経を初めて使ったみたいなの？
こんな疲れ方があったのね・・・みたいな？

「ねーちゃん」

なに？ 今、眼球動かすだけで精一杯なんだけど？

「ありがとなあ」

あんたのためにやったわけじゃないのよ、猫のためでもなく、今後の私の仕事に対する
姿勢？

「ごめんなあ」

なにが？

「ねーちゃん泣かせちゃまってよお」

え？ あっ！

私は・・・ また こいつの前で・・・ 泣いてしまった！

しかも、あんなことで・・・ あんなことで泣いている姿をこいつに・・・

いや、いいんじゃない？

べっつにいいんじゃない～いっ？

だって、こいつ、今や私のブラとパンティ毎日洗ってるのよ？

私もな～んにも感じないでベッドの上に置いてあるのをクローゼットに入れるもの
いいわよ、こいつに泣いたところ見られたからって今さら！

「ねーちゃん！」

えっ？ い、いつの間にこんな傍に来ていた？

「んつとに・・・」

「土下座をしようとするな！ できないくせに！」

「俺、他になんもできねえからよお」

また、何もできないって

「お腹空いた」

なんなのおこれ～ 和風カレーうどん！

昨日のカレーがしっかり和風になってるうう

出汁の香りとカレーの香りが絶妙！

「美味しい！」

「マジ？」

うんうんうん

あっ！ やっだあ！ カレーがはねちゃった！ 白のトップス・・・

「ねーちゃん！」

あいつが布巾で私の・・・

今 おまえ 私の胸 触ったよねっ

あっ！ って顔してるけど？

「ご、ごめん、あの、ごめん、そ、そういう、あの」
いいけど、べつに、この中のブラはあんたが洗ってるし
「シミ抜きしておいてね、お気に入りのだから」
「うん、ぜってえ取っから！」
あんたは 何でもできるじゃん！

ショップ

お風呂に入ったら、少し落ち着いた。

さてと・・・

あの廊下のホームレス空間をどうする？

あのままだイヤ！ 絶対イヤ！ 死んでもイヤ！

猫の・・・ ああいうの、なんていうの？ 道具？ 居住空間物？

仕事以外で部屋でノート開くって初めてかも。

猫 必要なもの

検索！

ああ、グッズっていうのね。

トイレ・ベッド・爪とぎ・・・ 爪とぎってなに？

えーっ！ 猫ってバリバリバリってあちこちやるのおお？

あ、でも、まだ小さいし、歩けないから、いらなくない？

永遠に飼うわけじゃないし。

全治3週間・・・ 保護センター全滅・・・

考えない！ 今は、あのホームレス空間をなんとかすることだけに集中しよう！

基本、ベッドとトイレとエサと水の器ってことか。

オンラインショップだと・・・

発送日 営業日2~3日後 遅い、あ、翌日発送！ 土日は除く

明日は土曜日よおお

こうなったら、明日こういうのを売ってる店に行くしかないな。

検索！

ここからいちばん近いのは・・・ 二駅向こうにある。

お店のカンジは・・・ なかなかいいんじゃない？ オシャレじゃない！

ここだ！

カズオがお風呂から上がってきた。

「カズオ、明日、買い物行くからね」

「うん、メシは作っといた方がいい？ 食ってくるの？」

ハァアアアッ？ 私がこの状況でノンキにショッピングに出かけると思ってるの？

「あんたも行くのよ！」

「俺も？」

「猫のものを買うの！ あんたは荷物持ち！」

「お、おう！」

カズオと一緒に電車に乗るのって、いつぶり？

あ、私が病院に行った日か。

その前が・・・

まさかこいつが、あの汚ったな〜いホーレスだなんて・・・

「ン？ な、なに？」

って言う顔はフツターの男の子。

どうするんだ 私は？ こいつを？

あ、着いた。

「行くわよ」

「うん」

初めての ペットショップ。

なんだか なんていうの？ 精神的に敷居が高い。

こういうところって死ぬほど猫が好きとか犬が好きの人しか入ってはいけない気がする。

いやいやいや、私だって死ぬほど必要なものがあるんだから！

このベッド素敵！

白いフワッフワの毛にティファニーカラーの細いリボンのワンポイント！

あ、こっちはアイアンベッドのミニチュア版！

これはまるでオシャレー人用椅子みたい！

こっちはホテルのソファのミニチュア版！

どうしよう 全然決められない

えっと、先にエサ入れ、それがいい。

なんですとおおおっ？

有田焼？ 猫のエサ入れに有田焼？

えっ？ これって・・・ グッチ？ ヴィトンも？

なんなの この世界はっ？

あ、カズオは？

ポケ〜ツとした顔で立っている・・・だけ。

そうよね、あいつに作れるのはホームレス空間だけ。

戦力外！

結局、私にはわけがわからず、ショップの人に全託。

要望は言ったけどね、シンプルで品があるもの。

小さな四角型のモコモコベッド、その下に敷く白いコットンラグ。

ベッドもラグも洗えるんですって。

「仔猫ちゃんのうちは洗えるものが便利ですよ」

小さな白い陶器の器が二個とペットにも安心な消臭スプレーとかいろいろ。

あとは白いトイレとトイレ用サンド。

「仔猫ちゃんのうちにトイレを覚えさせてあげるとそこですようになりますよ」

「お、覚えさせるとは・・・ どうやってでしょうか？」

「ソワソワしたりしたときにトイレに置いてあげるといいですよ」

ソワソワ？ 猫がソワソワするときなんてわかるわけがないっ

「ごはん食べた後に置いてあげるといいですね」

・・・ めんどくさいっ

横にいるカズオをキッと睨んだら

俺にまかせろ的に頷いたけど？ あんた以外に誰がやるのよっ!?

「仔猫ちゃんのお名前は？」

「ハ？」

「20分ほどいただければ、仔猫ちゃんのお名前をラグに刺繍できますよ」

「けっこうです」

名前はないっ つける気もないっ

「ペットシーツはどうかさいますか」

ペットシーツ？ シーツ？ ベッドメイキングも必要なのっ？

「仔猫ちゃんはベッドでオシッコしちゃうたりするので敷いてあげるといいですよ」

「あ、だったら・・・」

えっ？ ちょ、ちょっと、腕引っ張らないでよ！

「ねーちゃん」

えっ なに、なに、顔近づけないでよっ

「あれは・・・」

耳打ち？

「近くのスーパーで安く売ってっから、見たことあんだよ、俺、買ってっから」
そんなものまでチェックしていたのっ？
主婦の大会出たら優勝するわよ、あんた！
「シーツは・・・ けっこうです」

部屋のドアを開けたら・・・ モワツとした匂い
「シヨンベンしてたのか」
ハ・・・ハアアアア・・・
自分の部屋に戻ってきて猫のオシッコでお出迎え・・・
泣きそう 泣かないけど 泣く気分ではないし

コーヒー飲もう

カズオはペットシーツと夕飯の買い物に出かけた。
土曜日くらい外食でも Uber でもいいのに。
私はカズオの料理が美味しいからいいんだけどさ。

今朝よ、軽いショックよ。
カズオがネコにエサあげて、薬飲ませたの、飲ませたの！
スンナリと！ いともたやすく！
昨日の私を見て？ 要するに？
口を開けて喉近くに薬を入れればいいんだってわかったって。
なにそれっ？ 私のあの狂乱騒ぎはなんだったわけっ？
泣いたのよっ？ あんなことで泣いたのよっ？ どうしてくれるのよっ？
それでね、その後に水を口元にやったら飲んだのよ！ 発泡スチロールの器からねっ
あいつの口移しはなんだったのっ？ あいつは全然気にしてなかったけどねっ
私のカミナリ直撃くらいのショック被害をどうしてくれるのよっ

カズオが帰ってきて、今日買ったものを私の指示どおりに並べた。
いいんじゃない？ とってもいいんじゃない？
あ・・・ でも、ペットシーツの袋がダサいなあ。
えっと・・・ あ！ あれだ！

Dior のショッピングバッグ！ 取っておいてよかった
これに・・・ シーツを入れて・・・
おおおお！ 最高！

「ねーちゃんすげえ！ メッチャかっけー！」

そうなのよ、こういうセンスはあるのよ、バリバリね。

この部屋で あんたに勝てるとしたら・・・
これ・・・だけ？

いい、なんでもいい、とにかく、あのホームレス感は 消えた！

覚悟

お風呂から上がって、廊下の隅をチラッと見ると、白で統一された素敵な空間！

・・・に猫

ミネラルウォーター取ってこよう。

ハアアア、なんか疲れた。

ソファにボタン・・・・・・・・ ダメダメダメ寝ちゃう、目は開けよう

なんかねえ なんていうのかなあ モヤッとした壁？ 私の前にモヤッとあるってカンジ？

ハッキリ、ドンッと見えるなら、ここから崩せばいいとか、いっそ爆破しようとかね、突破する手立てを考えられるんだけど、モヤッとしてるから、どこから何をしていいのか・・・

カズオがお風呂から上がってきた。

ドライヤー使えって言っても忘れて、ほら、タオルでゴシゴシ髪の毛拭いてる。

いいけどね、私の髪じゃないから。

こいつ・・・ 自覚ないのかな？

ああやってると顔の周りの髪が後ろに流れて、顔がハッキリ見えるのよ。

それがさあ・・・ けっこう？ かなり？ イケてる？ イケメンなんだけど

あれ？ 珍しくボソボソひとりごと言ってる？

「ウンコ出ねえなあ」

ハ？

今 私は あんたが イケメンだと 心の中で 言ってやったのに

「ウンコ出ねえとなあ」

撤回！ イケメンで思った思考をすべて DELETE！

「どうすりゃ出んのかなあ」

なんかもう なんかもうっ

「寝る！」

朝 日曜日の朝

ノンビリした気分と 明日から仕事だって気持ちが入り混じる 日曜日の朝

起きよう

ドアを開けたら

「なっ なに？」

カズオが立ってる

「ねーちゃん！」

「な、なによ？」

「ウンコ出た！」

あああああもうーっ

バッチーっ

「デッ・・・」

あいつが頬っぺた押さえてビックリした顔で私を見てるけどっ

「なんで起きた途端にあんたのウンチの話を見かねなきゃいけないのっ？」

「え？」

「あんたのウンチが出たことなんか私に聞かせないでっ！」

「お、俺じゃねえ、俺のウンコじゃねえよ！」

「あんたがしたならあんたのウンチでしょっ！」

「ね、ねーちゃん、お、俺のウンコじゃなくて、あいつ、あいつのウンコ」

「あいつっ？」

「あいつ、猫」

「猫？」

猫のウンチ？ 猫のウンチ？

「猫がウンチしたことを・・・ わざわざ私が起きるのを待って・・・ 言いに来たの？」

「うん！」

「そんなこといちいち報告するなあああっ」

あいつがサッと身を避けた ゼーゼーゼー もう一発引っぱたきたいのにつ

「ねーちゃん、ねーちゃん、あのさ」

あんたとは口ききたくないっ

「あいつさ、ここ来てからさ、一回もウンコしてなくてよ」

ああもう朝からウンコウンコウンコってーっ

「なんか、フンづまりになっと危ねえって、前におっちゃんが言ってよ」

「おっちゃん？ だれ？」

「あ、浮浪者の」

あ・・・ そっちの世界の・・・おっちゃん・・・ね

「おっちゃんが言ったのは犬のことだったんだけどよ」

猫とか犬とかああああ もういい 動物ワールドから抜け出したいいい

「出たんだよ、さっき！ あいつ、ウンコしたんだよ！」

顔を輝かせてって・・・ こういうことを言うのかな・・・

「そう」

ニコニコしてる顔には 私の手形がくっきりついてるけどね

要するに、食べたからでしょ。

食べたら排泄するわよ、食べてなかったから排泄するものがなかったってことよ。

・・・って、ああああああっ！ こんな世界から早く脱出したいっ！

何かないかな？ 保護センター以外のどこかない？

警察？

『遺棄された動物を発見した場合は、まず、最寄りの警察署に連絡してください。』

警察によって聴き取りや見分が行われますので協力してください』

聴き取り？

『遺棄された動物は犯罪の証拠にあたるので・・・』

ちょ、ちょっと、犯罪の証拠って・・・ なんか 怖い

他には？

『捨て猫を見つけた時、あなたが取れる手段は、大きく分けて次の4つになるかと思えます』

4つの手段？

『1. 捨て猫を見なかった事にする』

見なかったことにしたいっ！

ていうか、見たくもなかった！

でもっ もうすでにいるのっ！ 私の部屋にいるのよおお

『2. 捨て猫を保健所へ引き取り要請をする』

保健所！ その手があったのね！

『保健所などに引き取られた捨て猫たちは、飼い主が見つからなければ、』

3日～7日後には殺されてしまうでしょう。それも、苦しみながら』

えええっ 殺される それも、「苦しみながら」

ヒーーーーッ！

『3. 捨て猫を一旦保護して里親を探す』

「一度子猫を保護して、里親が見つかるまで責任を持つ」と、覚悟を決める方法です』

覚悟・・・

『4. 捨て猫を自分の愛猫にする』

これだけは絶対にないっ！

私に残された手段は2か3。

でも、2は「殺される、それも、苦しみながら」

怖い とてつもなく怖い

3しか残らない・・・

里親を探す・・・ どうやって？

里親募集サイト、保護ボランティア団体、なんとか・・・なりそうかも・・・だけど

里親が見つかりやすいのは、健康でトイレの躰がされてあること・・・

ということは・・・

あの猫をもらってくれる人を見つけやすくするには・・・

全治3週間、あれを全治させること・・・

3週間・・・

覚悟・・・

3週間・・・

覚悟・・・

ムリ・・・

3週間も・・・

私にはムリ・・・

私には・・・

え？

え？ あれ？ えっと・・・

頭の中の モヤッとした壁が ハッキリとした二枚の壁になって

それをピタッと合わせたら

あら？ 合う？

これしかない？

あとは・・・

覚悟 覚悟 覚悟 覚悟 覚悟

えっと・・・

保留

スリープモード

私は フリーズ

間違い

「あ、ねーちゃん、仕事？」

なぜ私が仕事してると思うの？

リビングでノートの前に座ってるから？

「そんじゃ、昼メシ、サンドイッチにすっか？」

またあの試食用くらいに切ったサンドイッチを私の口に放り込むつもり？

放り込まれてもね 咀嚼できる自信がない

今は ゆっくりと 首を横に振ることしかできない

「ねーちゃん」

なに？

「怒ってる・・・よな？」

なぜ？

「怒ってっから・・・ 口きいてくんねえんだよ・・・な？」

そうではない

「怒ってねえの？」

怒ってない

「そんじゃ、どうしたの？」

どうしたのって・・・

私はね 今まで いろいろ覚悟決めてきた

そんじょそこらの男性社員なんかより よっぽど肝がすわってるのよ

バシッと覚悟決めて 覚悟決めたら 即 実行！

そういう女なの 私は

「ねーちゃん」

なに？

「なんで俺のことジッと見てんの？」

いちおうあんたに伝えてるつもりなんだけど

発声する気力がないのよ

「ねーちゃん、具合悪りいんじゃねえのか？」

伝わらないわよね そうよね 声出さなきゃね

「熱あんじゃねえの？」

ないでしょ 勝手に私のオデコに手を当ててるけど

「ねーちゃん、どうしたんだよ？ 言ってくれよ」

どこから？

また勝手に私のとなりに座ってるけど
あ 頬っぺたに まだ私の手形が残ってる
「痛かった・・・わよね」
「ン？」
「頬っぺた・・・ 引っぱたいて・・・」
「ああ！ なんともねえよ」
笑ってるけど
「ねーちゃんのビンタ、チョー強烈だけど」
笑ってるけど
「なんともねえよ」
そう言って微笑んで 私のこと見てる あんたの顔見たら・・・
「ごめん・・・ね・・・」
涙が・・・
「ねーちゃん！ なんともねえって！」
「ごめん・・・」
「なんともねえよ、ねーちゃん、なんともねえからよ」
なんかもう・・・ 止まらなくなっちゃって・・・
「ねーちゃん」
優しい声で・・・
「なんともねえよ」
抱きしめられたら・・・

なんか・・・
ホロホロって・・・ 私・・・ パンパンだったんだって・・・
でも・・・ 今は・・・ なんか・・・

「もしも・・・」
「うん」
「もしも・・・私が・・・間違えちゃったら・・・」
「うん」
「間違えちゃったら・・・ どうしよう・・・」
カズオが・・・ 私のこと・・・ 抱きしめたまま・・・
「俺はさあ」
私の頭を優しくなでて・・・
「まちがえてばっかだったけど」
すごく優しくなでて・・・
「ねーちゃんと会えたから」
私と・・・
「まちがえてよかったよ」
そう言って笑う声・・・

「カズオ・・・」

顔をあげたら カズオが優しい目で私を見ていて

「一緒に・・・私と一緒に・・・間違えてくれる？」

「うん」

「あと・・・3週間・・・ここにいてくれる？」

一瞬驚いた目をして

「メッチャ・・・まちがえてんじゃん」

え？

「俺、まちがえんのは得意だからよ」

そう言って笑った。

覚悟なんてできなかった。

正解もわからない。

そんなことは 初めて 私にとっては 初めて。

だけど、今、あの猫の傷が治るまで世話しなきゃいけないことは事実で

それは 私一人じゃ 私じゃできなくて

カズオが必要で

今わかるのは それだけ

なんか・・・壁が消えた

なんか ホットしたら

「お腹空いた」

「サンドイッチでいい？」

「小さくしなくていから！ 仕事してないから！」

「うん」

カズオがスーパーに走っていった。

ヒョコタンね。

泣く

また泣いてしまった・・・！

あいつの前でまた泣いてしまったあああ！

いいけどね、いいんだけどね、猫の口に指突っ込むのがイヤで泣いちゃったしね。

いいんだけど・・・

なぜあいつの前だと泣いてしまうのおおおっ？

私は泣かない女で有名なのよ。

付き合った人の前でも、もちろん藤木さんの前でも、一度も泣いたことはない。

女友だちの前でもね。

冷血って言われたこともあるわよ。

一緒に「全米が泣いた！」って映画観て、泣きどころはどこ？ って言ったとき。

それなのに なぜっ？

あいつはどう思ってるんだろう・・・

あいつから見たら、おばさん？ え？ 26歳って、おばさん？

まあ、20歳の子にとってはおばさんよね。

それが目の前で子どもみたいに・・・ あああああっ！

みっともなーい！ 髪かきむしってひっこ抜きたいくらいみっともないっ！

いや・・・だからさ・・・ 不測の事態続き？ そういう、なんていうの？

あれ？

泣いてる？

え？ メッチャ泣いてるんだけど 猫が！

どうしようどうしよう、カズオ！ 早く帰ってきて！ 泣いてる！ 激しく泣いてるのよ！

え・・・ どこか痛い？ 断末魔の声？ し、死んじゃう？

やだ、どうしよう・・・

そ、そばに・・・ 行くだけ・・・ 行って・・・みる？

あああああ！ 私の方見てるうううっ！

そしてメチャ泣いてるううう！

や、やっぱり、どこか痛いのかな？ 傷が悪化？

えっと、脚だけ・・・ え・・・ ちょ・・・ちょっとだけ 動かないで。

わかったから、わかった！　なんとかするから、泣かないでよ！

えっと・・・

え？　ああああああ　私の手に・・・頭を・・・乗せるううう？

え？　えっ？　あれっ？

た　　立った

立った？　立った！　私の手に頭を乗せて・・・　立った！

クララが立ったー！　　みたいな

え？　ちょっと待って

この瞬間を　私が見ていいの？

これって　ほら、親が自分の子どもが初めて立ったみたいな？　そういうやつじゃない？

これは・・・　この瞬間は・・・　カズオのものよ！　カズオが見ないとダメなやつよ！

「あんた、ちょっと、あんた、座って、ゆっくり、座って、そう、それ」

ハハアアア　座った

あれ？　もう泣いてない。

なんだったの？　いいけど

手　洗わなきゃ！

感触が　フワフワだったな・・・　いやいやいや、とにかく洗わなきゃ。

ランチ食べたならソファで寝ちゃってた。

目が覚めたときには、カズオは干してた私の掛布団取り込んでベッドメイキングしてた。

主婦って・・・　休日ないのね、カズオは主婦ではないけど。

私にはムリ

結婚できないかも・・・　いやいやいや、今はそれは考えなくていい、考えたくないし。

あ、そうだ、明日は営業交えてのミーティングがあるんだ。

ノート出してるついでに・・・　少しだけチェック。

もう資料はできてるから、お互いの経過報告みたいなものよね。

ここの表をもう少し見やすくできないかな？

大山に頼む？　縦の計算部分だから大山だな。

「ねーちゃん」

「はいは～い」

と、よし！

「あのお」

「なに〜？」
「仕事してんだよね」
「してるよ〜」
「そんじゃ晩メシは・・・」
え？ あ！
「すぐ終わるから！ 小さくしないで！」
「お、おう」

日曜日なのについ仕事しちゃう私って・・・ おばさんっていうよりおじさんじゃん！
終わり！

「うおおおおお！」
え？ なに？ カズオが吼えてる？
「ねーちゃん！」
なに？
「ねーちゃん！ 早く！」
なによ？

「ねーちゃん！ こいつ、立った！」
あ・・・
「立ったよ！」
「あ、うん、へえ」
「まだ支えなきゃなんねえけどさ」
「はあ」
「立てたなあ、よかったなあ、よかったなあ」
感動しているカズオ・・・ よかった
あ！ こ、こっち見るな！ あのときのことは忘れて！ 忘れなさい！
「こいつ、ねーちゃんのが好きなんじゃね？ ねーちゃんばっか見てるよ」
メッチャ無邪気に嬉しそうに言うけど
「そ、そうではない！ 違う！ 誤解！」
誤解よ、あのときのことがあったから見てるだけよ
「ねーちゃんはネコにまで好かれんだなあ、だよな、おい、そうだろ？」
「違う！ あんたのが好きなの！ カズオが好きなの！」
最初の場面はあなたのものです！
「し、仕事してくる」
やることないけど。

お風呂から上がって、炭酸ミネラルウォーター飲んで・・・

なんか 今日一日でいろいろいろいろあって なんていうか 二日経った？ みたいな

3週間 ここにいてって 言っちゃった

後悔は・・・ ない

不思議だけど ない

むしろ・・・ 肩の荷が下りたみたいな

もうこれで、いつ出ていかせるかなんて毎日葛藤しなくていいっていうか

あ カズオがお風呂から上がってきた。

またドライヤー忘れてタオルで拭いてる、いいけど。

ほら やっぱりイケメンだよなあ

こいつは自覚ないんだろうなあ

ないわよね ウンコなんてワード連呼するんだもんねえ

「ねーちゃん？」

「え？」

「なに？」

「なにって なに？」

「なんか、ジッと見てっから」

あんたがウンコというワードを連呼すると考えていたんです

「なんだよお、ねーちゃん、言ってくれよお」

言ってくれよって・・・ あ

「よかったわね」

「え？」

「猫 立って」

顔がパーッと輝いて

「うん」

嬉しそうに微笑んでるよ

よかった あの最初の場面を あんたにキープしておけて

「全米が泣いた！」より感動的

泣かないけど

タイプ

「ここなんだけど」

大山と私のデスクトップ前

「もう少し見やすくできる？ パッと見てわかるようにしたいのよ」

「はい」

え？ 即答？

「午後のミーティングまでは・・・無理よね？」

「できますよお」

マジか！

「それじゃ、お願い」

「はい！」

使える 大山 使えるぞ

ランチは駅ビル内のいつものガレット。

ここには・・・猫の匂いがない！ 香ばしいガレットの香りだけ！ 天国！

「北川さ～ん」

え？ あ、大山？

「ご一緒してもいいですかぁ？」

ご一緒？ 私と？

「いい・・・けど」

「失礼しま～す」

ニッコニコして真ん前に座ったけど

私と話すことでもあるの？ あの表のこと？ ここで？

あれ？

「あの、いつも一緒の・・・」

名前なんだっけ？

「今日はお休みなんですう」

ああ！ だからか

一人メシができない女子あるあるか、だから私でもいいわけだ 人であれば誰でもね

なぜ私は 今 大山と向かい合って そば粉のガレットを食べているんだろう？

「北川さんはあ、どういう人がタイプですかぁ？」

え？ なに？ 何の話？
「タイプというのは・・・ なに？」
「好きな男性のタイプですう」
こ こいつは 私と恋バナするつもり？ 私とっ？
無謀過ぎる・・・
「やっぱりい、藤木部長みたいなあ、知的な人とかですかあ？」
フラレました
「部長のことは・・・ 上司として尊敬している」
フラレたからね
「そっかあ、やっぱり北川さんのハードルは高いんですねえ」
「ハードル？」
「だってえ、藤木部長さえ相手にしないってえ」
いや、フラレたのよ
「かなり理想高いんですねえ」
そうじゃなくてさ
「でもお、北川さんみたいな女性は、どんなに理想が高くても叶っちゃいますねえ」
いや、理想とか、今はそんなこと考える余裕ないのよ
「私なんかあ、あ、私、カレシいるんですけどお」
知ってる
「カレシはあ、私のことタイプだったっていうんですけどお」
ノロケ？ 私の前でノロケ？ 私の前で？ この私の？
「可愛いからってえ」
なんだか意識が遠くなっていく・・・
「でも、それってえ、私より可愛い子が現れたらそっち行っちゃうのかなあって。
なんかあ、ときどき不安になっちゃってえ」
えっと・・・ 午後のミーティングには営業部の主任も来るのよね・・・
「でも、北川さんが声をかけてくださってからあ」
え？ 私？
「そういうこと気にしなくなってる私がいてえ」
ほう、それはよかった
「本当に感謝してるんですう！」
瞳キラッキラ
「それは・・・ よかった」
「あ！ 私、お先に失礼しますう、午後の資料確認してきますう！」
「あ、お願い」
なんだかよくわかんなかったけど よかった、うん。

午後のミーティング。

大山の作った票はパーフェクト！

もちろん私がちゃんとチェックしたわよ、責任は私にあるんだから。

ほらほらほら、みんな頷いて見てる、見やすいからすぐにわかるのよ。

「失礼しま〜す」

大山がコーヒー運んできた。

大山、あんたが作った表は最高よ！ って言いたいけど、今はミーティング中。

部長の前から順番にコーヒーを置いていく大山。

私だったら「飲みたきゃ自分でいれてきなさいよ！」って言いそう、言わないけど。

あっ！

ガチャーン

シーン

「なんなんだ君はっ！」

吉田、今のはおまえが急に手を振り回したからだろっ

「す、すみません」

今のは大山が悪いのではないっ

「い、入れ直してきます」

これは・・・

「私も手伝います」

席立って、大山のあとを追って、ミーティングルームのドア閉めて

「大山」

「は、はい」

「耳貸して」

「は・・・い？」

「少なくとも、これだけは言えるけどね」

「は・・・い」

「私が大っ嫌いなタイプは、吉田っ」

大山が私を見上げて

わかりますうって顔でうんうん頷いた。

「泣いちゃダメよ！ あんなヤツの前ではねっ」

「はい！」

ミーティングルームに戻ります。

玄関ドア開けたら・・・

「ねーちゃん、おかえり！」

なんかホッとする

「ただいま」

「ねーちゃん！」

「なに？」

「便所でウンコした！」

あんたが・・・では・・・ ないわよね？

「お、俺じゃねえよ？ こいつ、こいつだから」

察したか

「あ、そう」

帰ってきて早々・・・ 猫の・・・ ハアアアア

ハアアア～ 最高！

ゆうべはクリームシチューだったんだけど、その残りでドリア！

しかも上にはとろけるチーズ！

「カズオ！ 美味しすぎ！」

「マジ？」

こいつは私の食の好みを把握しているな、なんていうの？ 傾向？ いや、タイプ？

タイプ・・・

そういえば・・・ こいつのタイプってどんななの？ あるわよね、20歳だもんね

「カズオ」

「ン？」

「あんたのタイプってどんな？」

「あ？ なにが？」

「好きな女の子のタイプ」

なにその衝撃的なものを見たような顔？

「な、な、な、なんで？」

「聞いてみただけ」

「あ・・・ そっ・・・か」

「どんな子が好きなの？」

「え・・・」

何その上目使い？

「軽く聞いているだけだから、軽く答えてよ」

「えっと・・・」

いや、そんな真剣に考えなくてもいいのよ、大山みたいに軽くでいいのよ

「すっげえ美人で・・・」

はい、出ました！ 男は結局は顔！ 顔なんてね、メイクでどうにでもなるんだから！

メイクマジックに騙されるんじゃないわよ！

「メッチャ強い強くて・・・」

Mか？ こいつはMだったのか！

「それでも、すげえ優しくて・・・」

出た！ 男の好きなタイプで必ず出るワード！ 優しい！

男の前で優しい女なんてね、裏ではメッチャくそ意地悪いんだから！

「泣いた顔がメチャ可愛くて・・・」

あ～あ～あ、わかってない！

女の涙は武器なのよ！ 男の前で？ シクシク泣いて？ 泣いたら許される的な？

「メッチャ頭いいのに・・・」

知性を求める？ 知性がある女は男の前で泣いたりしないから！

「ちょっと抜けてて・・・」

ああもう、そういうのが女の計算だってわかんないかなっ！

ワタシ～、ウツカリさんだからあっていう女は実はメッチャ計算高いのよ！

心配だ！ こいつが心配だ！ このままでは悪い女に騙される！

「カズオ、あんたのために言うておく」

「え？」

「あんたが言う、そういう女は、この世に存在しない」

「ハ？」

「あんたは若いからわからないかもしれないけど、そんな女はこの世に存在しないの！」

ポカン？

悪いわね、でもこれが現実よ。

え？ なんて口開けたまま情けな～い顔で笑うの？

「ねーちゃんは・・・」

なんで笑ってるの？

「メッチャ・・・ウケる・・・」

ウケる？

ああ！ まだ若いから、私の言ったことを受け入れられないのね。

まあいいわ、夢見てなさい。若いうちにね、痛い目に遭うと思うけどねっ。

みーちゃん

なにこのお肌のツルツルのプルプル～
最近ずっと調子いいのよねえ、なんで？
あれ？ もしかしたら・・・ 食生活？
それだ、それしか思い浮かばないもの。
カズオの美味しいごはん食べて、お肌ツルツル
最高すぎ！

バスルームのドアを開けたら
カズオが廊下に座って猫を抱っこしている・・・
「んつとに可愛い顔してんなあ」
え？
「あ、悪かったって、怒んなよお」
えっ？
「ミャ～」
「ハハハ、可愛いなあ」
あ！ これだ！
カズオの好きなタイプの女の子って この猫だ！
さっき言ったこと全部当てはまる！
そんなにこの猫が好きなのね、世話してるからね、情が移るってやつね。

ミネラルウォーター飲もう

「みーちゃん」
ん？
「みーちゃん、そっかそっか」
ハ？

背中越しに聞こえるのは・・・

「みーちゃん」

なんだとおおおおっ!?

「カズオ」

「え? なに?」

「今... なんて言った?」

「俺、なんか言った?」

「みーちゃんて... なに?」

あっ! て顔してるわね それよ!

「えっと、あの、こいつの... 名前」

ハァァァァアッ?

「な、な、な、名前 なぜ?」

「名前あった方がいっかなあって」

「何にいいの?」

「ウンコさせるときも」

またウンコっ!?

「名前呼ぶと反応するっつうか」

「ウンチのために名前をつけたの?」

「あ、や、そんだけじゃねえけど」

「ウンチのために、私の名前をつけたの?」

「え、じゃなくて」

「ウンチのために、猫にっ 私の名前をつけたの?」

「あ、だから」

「私はねっ、小さい頃っ、みーちゃんて呼ばれてたのっ! ネコみたいでイヤだったの!」

「え、あの、ね、ねーちゃんの名前じゃなくて...」

「ハ?」

「えっと、なんつうか、こ、こいつが、あ、ミイミイ鳴くから、みーちゃん...て」

なんだそれはっ

「まぎらわしいっ!」

「そ、そんじゃ、なんて名前にすれば...いい?」

あああもうっ

「なんでもいいっ! どうでもいいっ! 好きにしてっ!」

リビングに駆け込んでソファにバタン

おとなげない

わかってる おとなげない

だけど なぜか 「みーちゃん」という響きに過剰反応するのよ

中学のときに、誰だった? みーちゃんて呼んできて、

猫みたいな呼び方しないで! って怒鳴っちゃった、あれから口きいてくれなかったな

カズオが世話してるんだから、カズオが好きな名前つけたっていいじゃない
しかも、ミィミィ泣くからって、ダサいけど、あいつなりの？ ネーミング？
それなのに、私ったら・・・

「ねーちゃん」

あ カズオ・・・

「あの、ごめん」

あんたは・・・ 悪くない

「もういい、もういいから」

「でも、ねーちゃんのこと、怒らせちゃって」

「由来が違うから、いい、私の名前じゃないんだから」

カズオが・・・ どうしたらいいのかって顔してる

「あんたが悪いんじゃないの、私って昔から、みーちゃんて呼ばれると」

あれ？

「みーちゃんて・・・ 呼ばれると・・・」

おばあちゃん

「おばあちゃんが・・・ 呼んでたんだ・・・ みーちゃんて・・・」

思い・・・出した・・・

「私のおばあちゃんね・・・ 私が小学4年生のときに死んじゃったんだけどね・・・

そのおばあちゃんが私のことを“みーちゃん”て呼んでたの」

そうだった

「大好きなおばあちゃんね・・・ みーちゃん、お菓子食べる？ とか、みーちゃん可愛い
ねとか、

おばあちゃんは・・・ みーちゃんが大好きよって・・・ だから・・・」

なんで泣いてるのよお

「おばあちゃんが死んだとき・・・ 悲しくて・・・ すごく悲しくて・・・」

カズオがまた勝手に横に座ってるけどお

「もう・・・ みーちゃんて・・・ ヒック・・・ 呼んでくれる人はいないんだなって・・・

もう・・・ おばあちゃんいないって・・・ ウ・・・ ウエエエエン」

ダメだあああ カズオが肩抱くからあああ

「だから・・・ ウエエエエン・・・ みーちゃんて言葉に過剰反応しちゃって・・・」

あ、ティッシュが目の前に わかり過ぎてるけど

「あの猫の名前は、そういう意味じゃないのにいい」

うん そう もう一枚

「みーちゃんていうのは嫌いじゃないの、ただ思い出したくなかったんだと思う」

あ 鼻かんだティッシュをよこせと はい

「おばあちゃんがもういないって・・・ ウツ ウエエエエン」

カズオが抱きしめるからあああ

「あの猫の名前は・・・ みーちゃんていいと思う」

頭撫でないでよおおお

「カズオがつけた名前だから・・・ あの猫も嬉しいと思う・・・

おばあちゃんが・・・ みーちゃんて呼んでくれると嬉しかったみたいがいい」

カズオのスエットが・・・ ティッシュになっちゃってるけどおおお

「由来は違うけどおおお ウエエエエン」

あ そんなにギュッてすると鼻水ベツトリになっちゃうよお

「ねーちゃん」

なに・・・

「ねーちゃん」

え・・・

「ねーちゃん」

顔をあげて カズオを見たら

優しい目で 私のこと見てるから

「いいよ、あの猫、みーちゃんて」

カズオが微笑んでるから

「いいよ」

「へへへ」

「なによ？」

「ねーちゃん、可愛い顔して泣くからさ」

ハアアアアア？

「あんたのせいだからね！」

「うん」

あんたのせいで

こいつのせいで

また泣いちゃった

猫の名前ごときで

猫の名前なんだけど・・・

ちがうから・・・ ほんとは・・・

ねーちゃんの言い方で・・・ わかった・・・

私が真似した おばあちゃんの呼び方と同じだったから・・・

不覚

会社で唯一ホッとできるのがトイレの個室。
やっと今日で一山超えたってカンジ。
吉田がいなければもっと早く超えられたけどねっ。
まだ山はいくつもあるけど、まずはホッとした。

あれ？ この感触・・・ まさか・・・ えっ 生理？
でも、先生は30日から50日で来るって言ってなかった？
まだ二週間よね？ え・・・ 不正出血？
検索・・・・・・・・ あ、二週間で来る人もいる よかった
あ どうしよう
タンポン持ってきてない！
デスクの奥には常に入れてるんだけど、まさか今来ると思ってなかったから
どうしようっ？ トイレットペーパー敷いて、デスクまで取りに行っって・・・
「それじゃ先に行ってるね」
「わかったあ」
あれ？ この声は・・・ こ、こうなったら・・・
「お、大山・・・さん？」
「え？ 北川さん？ 北川さんですかあ？」
「き、北川です」
「どこにいるんですかあ？」
「手前の列の左から二番目」
「もしかしてえ、急にきちやいましたあ？」
「えっ？ な、なぜわかったの？」
「私もお友だちとよくやるんですう、トイレから叫んでタンポン投げてえって」
そういう連携プレーがなされていたとは・・・
「どっちがいいですかあ？ ナプキンとタンポン？」
「タ、タンポン」
「ライトとレギュラーとスーパーありますけどお」
完璧な品揃えだ・・・
「スーパーで・・・お願いします」
「投げますよお」
「はい」

「それえ！」
おお！
「キャッチした！」
「よかったあ」
「大山さん、なんか、あの、ごめんね、ありがとう」
「とんでもないですよ！ 北川さんには本当に感謝してるんですよ」
「あ、いえ」
「私、いつも支えていただいてえ、ありがとうございますう」
「あ、いえ、あの、こちらも助かってるから」
「嬉しいですよ！」
こんなこと・・・
トイレの扉越しで言い合うことかな

今日も“みーちゃん”は、ちゃんとトイレでウンチとオシッコしたそうです。
カズオが毎回抱き上げてさせてるんだけど。
カズオって、お母さんになったらスーパー・ママじゃない？
家事はカンペキ、料理上手でやり繰り上手、子育てもマメ。
なぜ男に生まれた、カズオ？
そして私もなぜ女に生まれた？
男だったら、今頃部長？ いや、副部長か、藤木さんには勝てないなあ。
さてと！ ミネラルウォーター飲もう！
バスルームのドア開けたら カズオ？
「どうしたの？」
「あのお」
「なに？」
「これって・・・ 捨てて・・・いい・・・やつ・・・だよな？」
これ？
あっ あああああああああっ！
バシユッとカズオの手から奪い取って・・・ キッチンのゴミ箱にバシユッ
「あああああ！」
リビングに走った もう 走った 走って ソファに頭埋めたああああ
し・・・ 使用済みの・・・ タンポン・・・

カズオに・・・ あああああ 見られたああああっ
袋には入れてたけどおおおおおお
20歳の男の子にいいいっ
トラウマ与えたかもおおおお

不覚だった・・・ あまりに 不覚・・・

いつも一人だったから、取り替えるとき、ポンとペーパーホルダーの上に置いて、
そのまま忘れて・・・ 次に入ったとき、あ、忘れてた・・・で済んでいた
けどおおおっ

それをやってしまったああああ

なんかもう・・・ 落ち込む・・・

女としてどうなのよ・・・ 女としてっていうより、もはや人として？

使用済みの・・・ あれを・・・ カズオに・・・

あああああああっ

謝ろう

カズオがお風呂から上がってきたら

ここは素直に謝ろう

メッチャだらしのない女だと思っただろうなあ

だらしのないわよお ていうか 一人のときはさあ いやいや 言い訳しても ハアア

今日はミネラルウォーター飲んでもスッキリしない・・・

するわけない・・・

あああああああっ

あがってきた・・・

またタオルでゴシゴシ髪の毛拭いてる・・・

顔見れない

見ないままでいいか・・・

えっと・・・

「あの・・・ カズオ」

「ン？」

「あのね、私ね、大学に入ったときから一人暮らしなのね」

「うん」

「女友だちも泊ませたことないし、ましてカレシとか？ もちろん同棲なんて」

「ねーちゃん！」

「いや、話はこれからが」

「ねーちゃん！ みーちゃん！」

え？ なに？ ねーちゃんみーちゃんて

「ねーちゃん！ 見て！」

え？ なにを？

あれ？

なぜ あの猫が リビングに いる？

「みーちゃん、歩いた！」

「へ？」

「歩いてきた！」

えー？ だって、まだ1週間経ってないよね？

スックと立って こっちを見ている・・・

たくましい

ある意味 今のあんたは 私より ずっと 女として たくましい

「ねーちゃん！」

え？ なに？ 両腕広げて？

「ねーちゃん！」

来いって？ ハグ？

いやいやいや、猫が歩いたくらいでハグはしないわよ、私は

「ねーちゃん！」

しつこいなあっ

やればいいのねっ はい

ハグハグ

よかったねの背中ポンポン

これで満足でしょ

え？ なに？ ギュッて

そんなに感動したの？

「ねーちゃん」

「なに？」

「俺、院にいたときによ」

イン、あ、少年院・・・

「性教育の時間であってよ、産婦人科の先生が来んだけどよ」

へえ、そんなこともしてるのね

「性病とかさ、そういうの教わんだけどさ」

そうね、教えてもらった方がいいわよね

「女の人は大変なんだっつうこと教わってよ」

そう・・・

「おかあさんに感謝とかは、あんまピンとこなかったけど」

そう・・・よね・・・あんたは・・・ね

「女の方はすげえなって思った」

そう・・・

「すげえよ、ねーちゃん」

え？

パッと私から手を離して・・・

「おまえもすげえなあ、みーちゃん」

ヤラれた・・・！

こいつに 一本とられたっ

20 歳の男の子にっ

不覚っ

平和ボケ

あれから、ものすごく気をつけるようになった。
使用済みを袋に入れて、その上をトイレットペーパーでグルグル巻きにしてギョッ。
それを必ず持ってトイレから出て速攻キッチンのゴミ箱にポイ。
ただね、カズオってけっこうマメにゴミ捨てるのよ。
だから他のゴミで隠せないの、やたら存在感を主張するのよ、白い巻物が。
あれは3日目の朝だったかなあ・・・
グルグル巻きをポイッとゴミ箱に捨てたらね、それ一個だけ。
私がお社に行って、カズオがゴミを捨てる時に、これはあれだなんて思うんだなあ
思うよねえ、これしか入ってないんだから、ていうか、この二日間、少ないゴミの中に、
あの存在感ある巻物があるのを見てたんだよねえ、だったら、いっかあ！になっちゃった。
これが女の現実だ、あんたも後々のために見ておけよ！ みたいな？
めんどくさくなっちゃっただけなんだけど。
いいんだけどね、もう10日？ 2週間？ くらい前には終わったしね。

ネコも丸1週間経ったときに抜糸に行って、経過は順調って言われて、
おとといもう一回行って 完治！
動物の生命力の強さを感じた、ていうか、あの子の生命力？ あんな血だらけだった
のに。
こうなると・・・ 里親探し。
今も見てたんだけど、もともと私とは関りのない世界だったから、
なんていうの？ 見てるうちにめんどくさくなっちゃってノート閉じちゃった。
いっそペット OK の部屋に引っ越す？ その方が簡単じゃない？
いやいやいや、ちがうちがうちがう、飼いたいわけではない、飼いたくないの。
だから里親探してたのよ、めんどくささでとんでもない方向に行くところだった。

あれ、あんた、ここに来てたの？
ダメ、ソファの上には絶対に乗せないわよ、そうよ、ダメ。
そんな目で見たってダメ、私は甘くないのよ。
もうすぐあんたの恋人カズオがお風呂から出てくるから、あっち行ってなさい。
だから、ソファの上には乗せない、の・せ・な・い、私の目を見なさい、本気よ。
「みーちゃん」
ほら、あんたの恋人が来たわよ。

「ねーちゃんのところにいたのかあ、そっかあ」
おいおい、あんたまで来たら暑苦しい！
「みーちゃんはねーちゃんのことをほんとに好きなんだなあ」
みーちゃんとねーちゃんが紛らわしいし。
それにしても、こいつ、ネコに話しかけちゃって、どうなの？ 20歳の成人男子。
ほら、ニ〜ッコニコしちゃって、恋人に話しかける的な？
そうよね、こいつの理想の恋人だもの プッ
かわいそうだけど人間の中にはいないから、あんたの理想どおりの女。
大山はどう？
まあ顔は可愛い、声2オクターブくらい高くして「そうなんですう」って語尾伸ばすけど、
しっかりしている、仕事もできる、あれ？ 最近泣かないなあ
吉田のバカにとんでもないこと言われても、「はい」って、よく耐えてるわ。
耐えるとか私にはムリ、ついカーッとときちゃって論破して完膚なきまで
「あっ！」
おまえ・・・ ついに・・・ ソファに乗りやがったなあああっ
「みーちゃん、ソファ乗ったらダメだぞ」
って、あんたまでちゃっかり座ったけどっ
「ねーちゃんのそばに行きてえのかあ、そっかあ」
そんなこと、このネコは一言も言っていないっ
「そうだなあ、ねーちゃんのことを好きなんだよなあ」
だからっ このネコはそんなことは言っていない！ ニャーッとしか発してないで
しょ！
ていうか、あんた、いつまでソファに座ってるのよ？
「ン？」
ン？ じゃないわよ 確信犯だと私が気づいてないと思ってるのか？
「なに？」
なに？ じゃないわよ
「なんでそんなジッと見てんの？」
あんたが偶然を装ってちゃっかりソファに座っていていつどくのかなあと思ってるの
「ねーちゃん、なんだよお、言ってくれよお」
「そうねえ・・・」
なんていうか
「平和だなあと思って」
「へいわ？ みーちゃん、ねーちゃん、へいわだっけさ」
みーちゃんねーちゃん紛らわしい
「よかったなあ、みーちゃん」
何がよかったのかわかんない
「あっ！」
「ねーちゃん、どうした？」

「え・・・」

すっかり 忘れてた

カズオをどうする？

3週間ここにいてって言っちゃったけど、もうすぐ3週間・・・

そのあとは？

「ねーちゃん？」

どうしよう・・・

なんにも考えてなかった

「ねーちゃん、どした？」

どうしたって・・・

「ねーちゃん？ なんかあったんか？」

あったっていうか・・・ ないのよ

ノープラン

平和ボケしてた

四面楚歌

「北川さん、これに判お願いしま〜す」

はいはい、えっと・・・ うん、OKだな。

「はい」

「ありがとうございますう」

「あ、大山さん」

「はい」

「次、吉田のところに行くのよね」

「そうなんですう」

眉しかめてるよ わかるよ

「もしも何か言ったら、北川はこれでいいと言ったって言いなさい」

「はい、ありがとうございますう」

吉田はどうでもいいことで自分より下だと思ってる相手にえっらそんなこと言うのよ。

ほらほらほら、やっぱり言ってる。

「でもお、北川さんはあ、これでいいとおっしゃいましたあ」

よく言った！

吉田がこわばった顔で私の方を見たから、ニ〜ッコリしてやったら黙った、フツ ちょろい。

仕事はいいんだけどさ、プロジェクトも終盤だし

問題は・・・ カズオをどうする？

たとえば・・・ ネコに里親が見つからなかったとする

え？ それはダメ！ 絶対見つけなきゃ！

まあ、すぐには見つからないだろうから・・・ 見つかるまで？

里親が見つかるまでは、いてくれとは言える

永遠に見つからなかったら？ いやいや、絶対見つけなきゃ！

それで、ネコの里親が見つかったとする

カズオは？

私のところにいる理由がなくなるわよね

いや、ネコのためにだけ置いてるわけじゃないけど

え？ 他に何のため？

私が酔っぱらって連れてきちゃった責任？

それはある、確かにある

でもねえ・・・ 一生責任とるわけにはいかないわよ

だけどねえ、親もないし、ていうか、家がないのよ そうよ どうする？

いっそ養子縁組？

いやいやいや、6歳しか変わらないのに養子って

私だっていつ結婚するかわからないんだから、全然予定はないけどね ないけど
子連れ結婚て、あんなデッカイ子どもがいますはないでしょ！

でもさあ・・・

私のところを出て どうなるの？ すぐに家なんか見つからないだろうし

ていうか、そのお金だってないし

私が部屋を借りてあげる？

それじゃまるで愛人囲うエロオヤジよ！

でも、最初の敷金・礼金くらいは出せるわよね そんなに高いところじゃなければね
保証人にもなれるし それか？

いや・・・ 継続できないかも・・・

だって怪我してクビになって家賃払えなくなって追い出された・・・のよね？

今すでに脚悪いしね なかなか仕事見つからないって言ってたわよね？

あ、それに読み書きできない

どうするの？

ハンデとかのレベルじゃないわよ、四面楚歌って言葉が浮かんだわよ

でもねえ・・・ だからってねえ・・・ とは言ってもねえ・・・

なんか・・・ どっち見てもどこ見ても 中途半端

あ、トイレで何やってるの私？ 就業時間過ぎちゃうわよ。

玄関のドア開けると・・・

「ニャ～」

はい、ただいま

「ねーちゃん、おかえり」

「ただいま」

今夜はハンバーグ！

「相変わらず美味しい！ いつも美味しい！」

「マジ？」

私が美味しいって言うと、いつも嬉しそうな顔するのよ
つまりは毎日ってことだけど

「ねーちゃんさ」
ン？
「もしも、もしもさ、最後これっきや食えねえってなったら、何食いてえ？」
「え～、範囲広すぎるなあ、どれ系？　メイン？　スイーツ？」
「んっと・・・　俺のメシ」
「それは・・・　ムリ！　あんたの料理全部美味しいんだもん、決められないわよ」
「マジ？」
「いっつもそう言ってるでしょ」
ウワッ　メッチャクチャ嬉しそう！
「それでもさ、それでも、これっきや食えねえってなったら、どれがいい？」
「え～・・・　そうだなあ・・・　まあ・・・　オムライス？」
「そっか」
「あんたは？」
「俺は食えりゃいいっつうか」
「それはズルイでしょ！　私には選ばせといて！」
「俺は・・・　食えりゃありがてえっつうか」
あ・・・　そういう意味　そうか　そうよね
「私はあんたの作ったごはんがありがたい！　肌の調子最高だもん」
「ねーちゃんは昔っからきれいじゃん」
「昔っていつ？　私、まだ26なんだけど？　昔と言われるほどの年経ってないわよ！」
「へへへ」

お風呂からあがって・・・
あ！　あんた、なんでまたソファの上にいるのよ？
あったりまえみたいな顔して！
でもねえ・・・　いつかはなくなるのよね、あんた
優しい人がもらってくれればいいわね

いつかは・・・
そうなのよ・・・
ネコもカズオも　いつかはここからいなくなる　いなくならなければならない
ずっとこのままなんてムリだもの

「あ！　みーちゃん！　ソファの上はダメだっつったろ」
って、あんたも座ったけどね
もはや　どく気もないよね
嬉しそうにネコとしゃべって

なに この光景
なんで・・・
なんで こんなに平和なの・・・

「ねーちゃん？」
なんでこんなに平和なのよ・・・
「ねーちゃん、どした？」
なんで・・・
「ねーちゃん、なんかあったんか？」
私のこと 心配する声も
「ねーちゃん」
私が泣いてると いつも抱きしめる この腕も

ムリ・・・

カズオをここから・・・

ムリ・・・

「ねーちゃん」
そんな優しい声で・・・
「ねーちゃん」
優しく頭 撫でないで

私は あんたを ここから出すこと 考えてたんだから

なのに・・・
「ねーちゃん」

そんなの・・・ ムリ・・・
こんな平和な光景・・・
壊れちゃうの？ 壊しちゃうの？

ムリ・・・
どうしたらいいかなんて・・・
ムリ・・・

出張決定

「北川くん」

藤木部長？

「はい」

「ちょっとこっちで」

ミーティングルーム？ なに？ 何かまずいことでも起きた？

藤木部長がドアを閉めた。

なんだろう・・・ プロジェクト中止？ ここまで来て？ でも、そういうことあるから

「急で申し訳ないのだが」

「は・・・い？」

「来週末からニューヨークに出張だ」

「はい！」

藤木部長が行くということは、いよいよプロジェクトの最終局面、MAGAとの提携の本契約ってこと？ ヤッターー！

「行ってらっしゃいませ、こちらの方は」

「君も行くんだよ」

「ハ？」

そういうことは部長クラス以上が行くけど・・・

私レベルで行くということは・・・ 契約できなかった後始末しに行くってこと？

「何を不安そうな顔してるんだよ、君は英語が堪能だろ」

「あ、はい、それは・・・」

「本契約に入る」

「え？ 本当ですか？」

ああ！ よかった！

「向こうの社長が、このプロジェクトの詳細をこれを作った本人に聞きたいそうだ」

「私に？」

「かなり気に入ってるようでね」

「えっ・・・」

「こっちからは俺と君が行くことになった」

ちょっと・・・ めまいが・・・

「1カ月は滞在するつもりで用意してくれ」

「はい」

「今日は専務も交えての、まあ、前祝いだ」

初めてあの笑顔が出た・・・ ホットした・・・

「そういうことで」

私の肩をポンと叩いて

藤木部長がミーティングルームを出て・・・

え・・・ え？ えええええっ？

ニューヨーク！？

海外事業部の誰もが夢見るニューヨーク出張

いつでも行けるように皆パスポートを持っている

ニューヨークだけじゃないけど

ロンドン・パリ・ブリュッセル・・・

でも、うちの会社ではニューヨーク出張が花形

まさか こんなに早く行けると思ってなかった

行きたいとは思ってた いつか絶対行行って 私は同期の誰よりも先に行くぞって

ああああ 今になって身体が震えてきたあああ

現実になった！

ウソーーー！

しかも、MAGAの社長が私が作った企画を・・・

もう死んでもいい！

ダメダメダメ死にたくない！ ニューヨークに行くまでは死にたくない！

ちょっとまだ席に戻れない・・・

冷静でいられる自信ない いられるわけじゃないっ

深呼吸しよう フウウウウウ

ちょっと落ち着いた

ニューヨーク 1ヵ月！

いっそ住んでもいいけどおおおっ

あれ？

ニューヨーク 1ヵ月・・・

1ヵ月 日本にいない

これは・・・

決断のときがきた
覚悟を決めるときが

そして私はもう覚悟はできてる

昼休憩のときを買っておいた
まさかこんなに早く・・・

「北川さ～ん？」

あれ？ 大山？

「どうしたの？」

「部長があ、北川さんのところに行ってえ話を聞いてやれって」

え？

「何かあったんですかあ？」

メチャ心配そうな顔してるけど

「大山」

「はい？」

「私ね、来週末からニューヨークに出張が決まったの」

「ええええ？　すご～い！」

ピョンピョンはねてくれてるよ

「北川さん、やりましたねえ！　私も嬉しいですよ！」

「大山のおかげ」

「私なんて北川さんに支えられてばかりでえ」

「大山は私の最高の相棒！」

「えっ・・・」

「泣くな！　会社で泣くな！」

「は、はい」

グッとこらえられるようになったなあ

「おみやげ何がいい？　渡せるの1ヵ月後だけど」

「おみやげ買ってきてくださるんですかあ？」

「だから、何がいい？」

「それじゃ～、ティファニーのお・・・なんちゃって」

「ティファニーって、おい！」

「ウソですよ、ウフツ、北川さんがおみやげくださるだけで嬉しいですよ」

「それじゃ、ティファニーね」

「えっ？」

「大山の仕事はティファニーに値するわよ、ティファニー以上よ」

おいおい、大山、涙ウルウルさせないの！

私も言えないけどね。

二人で涙ウルウルで頷き合った。

大山とこうなるとはなあ！

そして やっぱり藤木部長には勝てないなあ！

北斗の拳

もう10時になっちゃった！

玄関開けたら

「ねーちゃん！」

カズオが走ってきた こいつなりの速さで

「よかったあ」

え？　なんで座り込む？

「俺、ねーちゃん、事故にでも遭ったんじゃないかねえかと思ってよお」

ああ、心配してくれてたのね

「ねーちゃんボヤツとしてっとこあっからよお」

ハア？

「無事でよかったよお」

まあ・・・　すごく心配してくれてたみたいだから、ボヤツとの部分は聞き流そう

「ねーちゃん、メシは？」

「ごめん、食べてきちゃったの、作ってくれてたわよね」

「そんなどうでもいいよ！　ねーちゃん仕事してきたんだからさあ」

カズオが奥さんだったら、ダンナさんは、俺は天使と結婚したのか？　って思うわね。

ごはん作って待ってるのに連絡もよこさないで遅く帰ってきたら・・・　ほぼ血の雨が降る。

私が奥さんだったら・・・　私在家で待っているという想像がつかない、やめよう。

「カズオ、お風呂入った？」

「うん、あ、ちゃんと洗っといたから」

「いいわよ、そんなの」

カズオはいつも私の後に入って翌朝には掃除するから、私はいつもピッカピカのお風呂に入れる。

昭和の妻の理想形？　昭和の妻の理想形がどんななのかわからないけど。

「ねーちゃん、風呂入る？」

「その前に炭酸飲みたい・・・」

「俺持ってくっから」

「いいわよ、自分で取っ」

「ねーちゃん仕事してきたんだからよ、座ってなよ」

こいつの頭の中の“仕事”というのは・・・　肉体労働？

ハアアアア

感情がアップダウンじゃなくてアップアップアップだからヘンに疲れちゃった

「ねーちゃん、ほい」

「ありがとう」

ハアアアア 炭酸が染みるううう

「ねーちゃん、メッチャ疲れてんじゃん」

感情がね 嬉しすぎると疲れるのね

「あのね」

「うん？」

「私、来週末からニューヨークに出張に行くことになったの」

「ニュ、ニューヨークって、えっと、国？」

「アメリカの東京みたいなところ」

首都ではないけど この方がカズオはわかるであろう

「スゲーー！ アメリカってマジであんのかよ！」

驚きどころは そこか まあいい

「ねーちゃん、やっぱカッキーなあ！」

いや、ちょっと震えて、藤木部長がそれを見越して大山送ってきたから そんなではないな

「ねーちゃんてさあ、昔っからカッキーもんなあ」

「だからさ、昔って言われるほど年寄りじゃないから！」

「ヘッヘッヘ〜」

「なにそのヘッヘッヘ〜って？」

「俺さあ、ねーちゃんのこと、けっこう前から知ってた」

「けっこう前？ いつ？ あ、指輪のとき？」

なにニヤニヤしてんのよ？

「俺さ、けっこう前から、ねーちゃんがあの地下道通るの見てたんだ」

「ン？？？」

「なんかすっげえキレイな人だなあって」

ハ？

「でもよ、なんつうか、俺からずっと、なんつうか別世界つつうかマンガの中の人つつうか」

「マンガ？？？」

「なんつうか、あ！ あれ！ 北斗の拳！」

北斗の拳・・・ おまえはもう死んでいるっていう人？ よく知らないけど

「だから、なんつうか、ねーちゃん見かけっと、マンガ見てるみてえなカンジでさ」

たとえばよくわからない

「なんか、えっと、北斗の拳見てるみてえな？」

ますますわからない

「それがよ、俺の目の前で、側溝持ち上げようとしてっからよ」

側溝は持ち上げようとはしなかった！ フタよ！

「うおおお！ 北斗の拳が俺の目の前で側溝持ち上げようとしてんぞって」
なんかもうわからない世界なんだけど
「俺、マンガの世界に入っちゃったカンジになって声かけちまってよ」
どういうカンジなの？
「そしたらよ、北斗の拳が俺に頼みがあるっつってよ！」
もはや妄想？
「北斗の拳が俺に話しかけて俺に頼みがあるってどうなっちゃったんだ？ って」
「ちょっと待って」
「ン？」
「北斗の拳、必要？」
「わかりやすいかなあって」
「わかりにくい、北斗の拳は・・・ 忘れて」
「北斗の拳なしでうまく説明できっかなあ？」
そんなに必要なのっ北斗の拳っ？
「えっと、だからあ、なんつうか・・・」
あ、必要なのね
「俺になんか、だっれも頼むなんつったことねえのによ、北斗の、あ、じゃねえ」
「必要なら・・・ 使っているいい」
もうなんでもいい
「俺なんか、いねえっつうか、俺はいねえはずなのに、北斗の拳が俺を見たっつうかさ」
なんかよくわからないけど 何かを必死に伝えようとしているのはわかる
「そんで北斗の拳に頼みがあるって言われたらよ、ビックリすんだろ？」
だろ？ って言われても よくわからないけど
「俺、夢見てんじゃね？ って思ってよ、北斗の拳に俺が見えてんの？ って思ってよ」
はあ、そうなの
「そんで俺メッチャ嬉しくなって北斗の拳のために指輪探すぞってなってよ！」
えっと・・・ こいつの中では・・・ 私はもはや完全に・・・ 北斗の拳なの？
「そんで見つけて、な〜んとか届けて、金くれるつって、北斗の拳に金はもらえねえって」
流れは・・・ なんとなくわかる・・・かな？
「そしたらよ、北斗の拳がガシッて俺の腕つかんでよ」
え？ あ・・・
「俺、ビックリしてよ！ 俺に触りてえヤツなんていねえのに北斗の拳が俺の腕をつかんだ！」
はいはい、つかみましたよ、私も自分にビックリでしたよ
「北斗の拳でメッチャ変わってんなあって」
ハァッ？
「そんで、あれは夢だったんかなあくれえに思ったときによ、北斗の拳が俺んどこ走ってきて」
ああ・・・ 今度は場面変わってあれか
「俺の名前おしえろっつってよ！ 俺の名前なんてだっれもどーでもいいのによ、

北斗の拳が俺の名前聞いてんぞってビックリしてよ」
やっぱりあのときか・・・
「なんかもう俺、嬉しくなっちゃってさ」
そう言えば・・・ 浮かれていたような・・・
「けどよ！ 北斗の拳が、信号赤なのに渡ろうとしてよ！ あぶねえって」
頼むからああ そんなに細かく描写しなくていいからああ
「北斗の拳で、けっこうボヤツとしてんだなあって」
「それっ？」
「ン？」
「さっき私のことボヤツとしてるって言ったでしょ！」
「うん、ボヤツとしてっじゃん」
ここまで細かく描写されたあとで否定しにくいわよっ
「そんでさ、次に見たときは・・・」
ヤメテーー！ あれでしょ？ 路上ゲロ～・・・
「ちょっと、ちょっと・・・ トイレ」

休憩挟まないと疲れる・・・

決めたこと

つまりは・・・ カズオにとって私は・・・ 北斗の拳なのね。

ちがうちがうちがう

カズオは私が出勤や帰宅のときに、あそこを通るのを見ていたってことか。

そんなこと言ったことないじゃない、あ、今言ってるのか。

さて、北斗の拳第二巻を読むか、読むんじゃないけど。

「お待たせ、続きをどうぞ」

どうせ路上ゲロでしょ

「ねーちゃんスゲーよ」

あれ？ 北斗の拳は消えたの？

「スゲーつつうか、なんつつうかさあ、なんつつうのかなあ」

北斗の拳出演させた方が言いやすいなら出していいわよ

「ねーちゃんといっとさあ、あれ？ 俺って、フツターの人間なんかなあって」

北斗の拳よりは遥かにふつつうよ

「ねーちゃんは、俺のことフツターに叱ってくれて、怒ってビンタしたり」

あ、それはごめん、本当にごめん

「俺が作ったメシ食ってくれて、そんで美味えつつってくれて」

美味しいのよ、本当に美味しいのよ 私は味覚は優れてるのよ 自分では作れないけど

「なんつつうのかなあ」

カズオがこんなにしゃべるって・・・

「俺はどっしようもねえクズで、そのへんにほっぽっとかれてるゴミとおんなしなのに」

「あんたはクズじゃないわよ」

え？ って顔したけど

「言ったでしょ？ この部屋の中ではあんたは最強だって」

ボリボリ頭かいてるけど、本当よ、この私がこの部屋では完敗よ

「俺さ・・・ ねーちゃんに会うまで、シアワセって言葉がよくわかんなくてよ。」

院から出たときに、これなんかなあ？ って、でもなんかわかんなくてさ」

少年院から出所したのはよかったけど・・・ そうね、それはちょっと違うと思う

「でもさ、俺、わかった」

あ・・・そう

「ねーちゃんのそばにいつとさ、ああ！ これなんだって」
え？
「ねーちゃんのそばにいつと、しあわせってこれなんだって」
「そう」
なんか・・・ 泣いちゃうから やめて・・・
「俺さ、毎日さ、出てかなきゃなんねえなあって」
え？
「いっくらなんでも、もう出てかなきゃなんねえなあって、毎日思ってたさ。
思ってたのにさ、ねーちゃんのそばにいてえなあって、もうちっといてなあって」
カズオが・・・ そんなことを思っていたこと・・・ 知らなかった
そんなことを思わせてたんだ・・・ 私が・・・
「でもよ、ねーちゃん、言ってくれたろ？ あと3週間ここにいていいってよ」
いていいじゃなくて・・・
「俺、嬉しくってよ、俺は3週間はここにいていいんだって」
いてくれる？ って頼んだのよ・・・
「出てかなきゃって、3週間は考えなくていいんだって、ねーちゃんといていいんだって」
私と違う感覚で・・・ 同じこと思ってたのね
「ねーちゃん」
「なに？」
「俺、明日出てくよ」
「え？」
「明日で3週間じゃん」
そうだけど・・・ 私は
「みーちゃんも連れてくよ、あいつのケガも治ったしよ」
なんで？
「まあ、なんつうの、俺が里親？ へへへ」
「あんた、それだけのために出ていくの？」
「ちげーよ、なんつうの、あれ、あの、あ！ シメドキ？」
「潮時、し・お・ど・き」
「あ、それぞれ！ やっぱむつかしい言葉はわかんねえ、ハハハ」
「ネコ連れて、ここを出て、あんた、どうするの？」
「なんとかなるって！ なんとかならさあ、俺はなんとかやってきたからよ」
笑いながら言ってるけど・・・

どうすればいいの・・・
カズオが決めたこと・・・
私が決断したこと・・・

「それにさあ、これ以上いたら・・・ 俺・・・」
カズオが下向いちゃった・・・

カズオが下向いちやうときは・・・

何を言えばいい？

どっちを言えばいい？

カズオに決めさせるの？

カズオは必死に・・・ カズオにこんなことを決めさせるなんて・・・

そんなこと・・・ そんな・・・

「そうよね！ 確かに！ 私は3週間って言ったしね！」

決めるのは・・・

「来週末にはニューヨークに出張だし、1ヵ月は帰ってこられないの」

私よ

「そうする、それがいいわ」

これは 私が決めたことよ

「私、お風呂入るから、あんた先に寝なさい、もう遅いから」

カズオの顔は見ないで、バスルームへ向かって

ドアを閉めた。

最後の夜

バスルームのドアを開けて
真っ暗なキッチン素通りして
スタンドライトだけついているリビング通って
ベッドルームに入ってドアを閉めた。

明日 有給取っておいてよかった
ちがうことしようと思ってたからだけど
明日は カズオと 最後の・・・
実感がわからない

あ 水忘れた

ドアを開けたら ネコ？
なにしてるの？ 中に入る？ いいわよ 最後だから
あんたとも 明日でお別れね
「ニャ～」
そうね 不思議ね ちょっと淋しいわよ

「あ・・・」
え？
カズオ・・・
「ごめん、あの、みーちゃん入っちゃって」
「いいわよ」
最後なんだから
なに？ ひざの上に 抱っこ？
抱っこしてあげる 最初で最後の

「あんた、フワフワね、なに？ 舐めるの、あんたの舌ザラザラしてくすぐったい フフ」

顔をあげたら

カズオが目の前に・・・
前髪の間隙から・・・私を見ていて・・・
「なに？」
そのまま私を見つめているけど前髪が・・・
「あんたの前髪・・・」
手であげたら
カズオの目がハッキリと見えて・・・
その目が私に・・・
わかってたわよ
わかってたから怖くて
あんたのこと・・・じゃなくて
私の気持ちを 見てしまうことが
カズオの頬に手をあてて・・・
でも 見ちゃった 今 見ちゃった
頬にあてた私の手を・・・カズオが少し震えてる手で優しくつかんで
目を閉じて 苦しそうな顔して
だから・・・
カズオのくちびるに かすかに震えてるくちびるに
そっと Kiss
初めてなのに ずっと知ってたような なぜ この感触・・・
くちびる 離れたら
またカズオが私を見つめて そして
カズオの腕が私を抱きしめた
ダメだよ・・・ あんたに抱きしめられると・・・ いつも泣いちゃうでしょ
なぜ泣いちゃうんだらうって・・・
わかった だって あんたの腕の中は
こんなに 笑っちゃうくらいこんなに あったかくて
こんなに あんたの思いでいっぱい
私・・・ ここにいるのが ここにいると
ほら 泣いちゃうの

もう・・・ ダメだよ・・・
ほら 知らないふりできなくなっちゃった
あんたの思い・・・
私の・・・

もうダメだね・・・
もう見ないふりできないね・・・
カズオを見上げたら・・・
指で そっと私の涙をぬぐって・・・

その手を そのまま 私の頬に

そして そっと Kiss

もうダメだね・・・ ウソつけないね・・・

カズオのくちびるが 少しずつ強く 私のくちびるを 溢れ出して止まらないように

そして・・・

その手が 私の頬を 首筋を 肩を・・・

はじめてなのに・・・

いつも見つめられていたから・・・

ずっと知ってるみたいで・・・

私の肌を 私を触る手で・・・

こんなに こんなに 愛しそうに 大切なもののように

どんなに私のことを どれほど私のことを

こんなに？ こんなに・・・

この肌は 全身で感じる肌の感触は・・・

初めてなのに ずっと感じていたくなる

溶け合うほど ずっと

私を見つめながら

少し歪む顔が

そして 溶けていくような目で

私を・・・

離れたくなくて ずっと

離れたくなくて 離れたくなくて

ずっと

抱きしめあって・・・

この腕の中にずっといたい

ずっと・・・

私らしい　そして・・・

目が覚めたら・・・
隣には　カズオはいなかった
何時？　8時過ぎか

言わなきゃ　カズオに
ゆうべ　わかったから　わかっちゃったから
言わなきゃ！

ベッドルームのドアを開けると・・・
リビングにはいない。
キッチンにもいない、どこ？
買い物に行ったのかな？
玄関の　え？　ネコのベッドとトイレがきれいに隅に置かれて・・・
ネコは？
シューズクローゼットの上のスペースに　鍵
カズオがいつも使っていた　鍵

どういうこと？

キッチンに・・・
マットと毛布と着替え一式入れてる袋がきれいに隅に・・・

どういうこと？

どういうこと？

ゴミ箱のフタを開けたら何も入ってなくて
新しいゴミ袋がきれいにかけてあって
シンクに目を移すと　ピカピカで　グラスひとつ残してない

バスルームを開けて　浴室のドアを開けたら
ゆうべは私が最後にシャワー使ったのに

きれいに掃除されてる

どういうこと・・・

出ていったの？

出ていっちゃったの？

どうして？

何も言わないで？ 顔も見ないまま？

私、あんたに話すことがあったのよ。
話さなきゃいけないことがあるの。

ゆうべは あんたが必死に決めたことを
あんたに背負わせるのは・・・
あんたが必死に決めたことだから、私が決めていたことは言わなかった。
あんたがそう決めたのなら、そうさせてあげた方がいいんだって。

でも、違うってわかったのよ。
ゆうべ
やっぱり違うって、あんたのは違うって。

あんたが出て行くって決めてたとき、
私は あんたとネコと一緒に暮らすって決めてたのよ。
ペットOKの部屋に引っ越して、一緒になって・・・
あんた用の携帯も買ったのよ。
連絡取れないと困るからって、ゆうべみたいに心配させちゃうでしょ。

覚悟決めたのよ、私。
私はね、今までいろいろ覚悟決めてきた。
そんじょそこらの男性社員なんかより、よっぽど肝がすわってるのよ。
バシッと覚悟決めて、覚悟決めたら、即 実行！
そういう女なの 私は。

だけど・・・
出ていっちゃったら・・・
私の覚悟なんて ないも同じじゃない
あんたに届かないなら

携帯 渡す前に出ていっちゃったら・・・
届くはずないわよ

わかった
あんたがそう決めたのなら
ここまでキッパリと見せつけられたら

私も新しい覚悟を決める

I'm gonna take a shower
切り替えなきや
来週末にはニューヨークよ

シャワーの後の浴室は
いつも私が使った後と同じ光景になった
お湯が飛び散って 鏡は湯気で曇ってる
私らしい

I'm gonna have a bottle of water, sparkling please.
冷蔵庫を開けたら
ラップがかかったお皿
なにこれ・・・

オムライス

だから聞いたの？
最後に何が食べたいかって
そういうことか
でもね
私は食べないわよ
こんな冷たくなったオムライス

ザッとゴミ箱に捨てた
生ごみも何もかもいっしょくたに捨てる
私らしい

この部屋は また私らしくなっていくのね
私の部屋だから

だけど・・・

このソファに座っていると・・・
あんたがその角から「ねーちゃん」て入ってくる気がして
キッチンから「ねーちゃん！」て呼ぶ声が聞こえる気がして
玄関のドア開けて「ねーちゃん」って・・・

なによ・・・ なんなのよ・・・
この部屋・・・
あんたでいっぱいになってるじゃない
私の部屋なのに

私の部屋なのに・・・
そうね・・・
あんたは・・・
いつも・・・ この部屋では最強で・・・
今も・・・
私のこと こんなに打ち負かすなんてさ
あんた 思ってもいないわよね

背中向けて行っちゃったんだから

見えるわけない わかるわけない

そしてね・・・
こんなに打ち負かされてるのに
私 泣いてないの

私らしい
これだけはね

そして・・・

今日、私はニューヨークに向かう。
スーツケースにはプラダのスーツとパンプス。

もちろん仕事のファイルも入っている。
DELETE できなかったメモリは USB の中。

いってきます！

To be continued...

Be With～ I

著 神原 涼

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
